

外國所以發越
光於海越

摩斯科州の比斯克に達する者一は搭爾巴哈台より山を越て齋桑斯科に至るもの、
而して其一は烏蘭達巴是なり通商行旅皆道を科布多搭爾巴哈台に取りて烏蘭達
巴に向う者殆んど希なり是れ道路險惡加ふるに宿驛なきを以てなり去れば中佐
山中を行く者數日一人にも出遇さざりけり是をもて去らぬだに險惡なる道は行
旅往來の跡なきが爲に益々荒れて益々惡しく蓋し天下の險なりと云ふ嗚呼我帝
國軍人の名は長く斯の至險至惡ある亞洲の一名山に留まれり假令ひ風霜の消磨
陵谷の變遷ありて他日題名の石を求むる能はざらしむるども其事其名長く亞爾
泰山と與に存して天下の耳目に在り想ふに當に噴々傳稱久しして衰へず以て千
古に不朽なるべし是れ豈中佐が名を食る所以ならんや實に國光を海外に發越す
る所以なり我輩是に於てか太白を擧げて快飲せざる可らず

既入蒙古

山を下れば嶺東は嶺西と全く觀を異にし形勢一變盡く皆重山秃嶺にして復た
一株の樹木を見ず山も溪も石礫落々たり山勢梯の如く或は急に或は平なり空山
の中道路分明ならざるも嚮導の記憶に従ひ溪に沿ひて蛇行數露里一小溪水を得
げり嶺西は艸木に富み到る處水ありけれども嶺東は樹木なく水源に乏しくて溪

蒙古人之帳

谷縱横なるも絶て流水なく群流の會する溪間すら水聲沉々たるのみ去れば此
に至りて馬を水艸の中に放牧し枯枝を採りて附木となし乾馬矢を拾ひて薪に代
へ火を燒き湯を沸かして午餐し溪を下りて行くこと又數露里遙に溪流の右岸に
當りて堆然土饅頭の如き者處々に落々たるを見る嚮導曰く是れ蓋し蒙古人の帳
幕なり前には無かりしが近頃水艸を逐ひ轉移せしものにやわらんと中佐曰く彼
處にて次の部落の所在を問ひもし遠くは此に投せんと乃ち馬を驅りて幕畔に至
るや數多の蒙古犬群吠止す之を聞きて蒙古人幕中を出で犬を制し中佐を台吉の
幕内に導きけり

台吉延見

台吉は部落の長にして蒙古の貴族蓋し元の太祖成吉思汗の族裔或は有功將帥の
後胤なり今や其狀賤見るに忍びず台吉出でて中佐を幕内に延き與ふるに座を
以し嗅煙草の小壺を出して之をもてなす中佐煙草を嗜ます將に辭して受けさら
んとす嚮導中佐の膝を突き耳語して曰く嗜むと嗜まざるを問はず一たび之を手
に受くるぞ蒙古の禮法なると因て謝して之を受けり台吉旅行免狀を示さんこ
とを乞ふ中佐乃ち護照を把りて之を示す護照は清國總理衙門の交付する所漢文

を以て之を記す台吉及び部落中固より漢字を識る者なし披閱少時竟に其文を讀
 ひ能はざるも紙面捺する所の總理衙門の印章を見て會得しけん之を中佐に返し
 けり次の部落の遠近を問ふ曰く近しと乃ち辭して馬に上る台吉彼の印章に對し
 て嚮導一人を出しけり溪流の左岸を行くに路狭くして纒に馬を立つべし吃爾嚮
 子嚮導首を回らし彷彿且つ曰く愚者て此を過ぐ今光景一變愚復た部落の在る所
 を知らずと蓋し逐艸遷移會て定處なければなり因て彼の蒙古嚮導に導かれつゝ
 行きけり中佐馬上首を回らし蒙古今日の衰を見て昔時の盛を思ひ感慨禁する
 能はざりけり

蒙古懷古

蒙古は漠南に居るを内蒙古と曰ひ漠北に居るを喀爾喀蒙古と曰ひ青海に環居す
 るを青海蒙古と曰ひ賀蘭山南に居るを阿拉善又は西套厄魯特と曰ひ額齊納河の
 陰に居るを額齊納土爾扈特と曰ひ金山亞爾泰山の支那名稱天山の間に錯處する
 を土爾伯特土爾扈特和碩特と曰ひ喀爾喀以下之を總稱して外蒙古と曰ふ其中面
 積尤大にし悉比利の貝加爾義爾斯科多摩斯科塞米巴拉丁斯科塞米勤丁斯科
 五州と境域を接し將來の關係尤大なるを漠北喀爾喀と爲す中佐の涉跋せしも

思古之盛
 衰而慨今之

亦此の地なり此の地又分つて四大部と爲す曰く札薩克圖汗部曰く二音諾顏部曰
 く土謝圖汗部曰く車臣汗部是なり汗は猶王と云はんが如し皆堂々たる元の太祖
 の後裔にして今猶清朝の皇室と婚すとかや中佐川を渡りて行く思へらく漢
 唐の盛時能く漠南内蒙古を並吞せしも猶且つ戈壁大漠の北に在りて慄悍勇敢統
 一する能はざりしは此の地なり獠族の中に奮起して雲蒸龍變殆んせ亞の全洲を
 兼有し遂に歐の一半を奪取して以て西歐諸國を震動せし元祖成吉思汗の出でし
 も亦此の地なり當時名將輩出勇卒雲の如く精練敵なく戦うて勝たざるなく一往
 奮進殆んせ天下を席巻せんとせしは豈に漠北蒙古に非ざるか亦盛なりと云ふべ
 し願みて今の勢を視れば山川舊に依り草木日に新にして而して復た一人の古今
 成敗の跡を思ふて驟然奮起する者なく彼の蠢々たる者徒に一息を寒烟荒草の中
 に食るのみ何ぞ其衰ふるの甚しきやと既にして又思へらく抑蒙古の面積大約
 我帝國に九倍するも人口僅々二百萬に過ぎず其喀爾喀蒙古に屬する者實に五六
 十萬のみ蒙古一帯樹木なく穀物野菜なく唯水草を逐うて遷移し遊牧を是れ事と
 すること古今固より同じ而して猶且つ無數の豪傑を此の地に出生せり泥んや天險
 國を成じ土地豊饒人口四千萬を有する我神州をや神州男兒にして豈秀靈の氣鍾

まがりて傑且つ偉ならざるあらんや而して動もすれば他邦の凌辱を受けんとす荷も忠君愛國の志ある者蒙古の昔時に耻ぢて國家の爲に盡瘁鞠躬せざる可らずと古を懐うて今を慨ぎ彼を觀て此を思ひ慷慨胸に滿ち悲憤交至り覺えずも鐵鞭を揮て一聲叱咤すれば馬驚きて電馳止まず

唱咒拜日

中佐左右を顧みれば嚮導在らず夕照紅を漲らして風色慘憺たり遙に前面を望めば一嚮導は馬を驅りて行くこと既に遠し蓋し今夕の張幕を求めんとてあり遠く後邊を顧みれば一嚮導は馬を下りて地に伏し將に西天に没せんとする夕日に向て禮拜し居けり吃爾噉子人は皆回教を信奉し一日少くも三回は顔と手とを洗ひ清め西天墨加の方に向ひて口に呪を唱へつゝ幾たびか頭を地に伏して禮拜するを常とし百忙中亦之を怠らずと云ふ既にして彼れ追ひ至る星夜寂寥たる石徑を登ること數露里にして張幕の地に達しけり時に午後七時半此の日行程四十露里金山を下りてより氣候稍暖に正午は列氏の十二度なり

以球代肉

部落の名を塔爾哈特と云ひ土爾伯特の一部なり台吉は國境馬盜の事に關して屢

亞爾泰驛に往來せしことありて中佐の吃爾噉子嚮導とは嘗て相知れるものなりけり因て容易く張幕を得つ台吉も亦官位を有する蒙古人數名と與に來訪ひけるが別段談話とてもなく只各喫烟草の壺を出し長烟管もて烟草を吹かひつゝ互に面を見合ひてニヤリ、と打笑ふのみ此の夕携帶の羊肉已に盡きて明日の用意なし因て中佐朱玉五個を台吉に示して曰く以て羊一頭と代ふことを得べきや否やと台吉喜びて之を諾し且つ曰く羊は明朝之を交付せん請ふ朱玉を與へよと彼れ固より蒙古の貴族人を欺くべくもあらねば明朝羊を得んことを約して先づ朱玉を與へけり此の邊人氣あしければとて吃爾噉子嚮導は六馬を引きて草野の中に放牧し終夜自ら之を監護しけり

拜鎮達巴

翌くれば廿五日朝まだき台吉來りて我幕内に入らんことを乞ふ因て導かれて其幕内に入れば妻と共に坐に請じ茶と羊乳をほし堅めて製せし菓子とを出してもてなし扱昨夜約束せし羊肉は此處より遠路携帶し玉はんこと不便ならんと思ひ蘇阿克にて御手に入るやう取計ひ置きたりと云ふ其言葉に非ず且つ一貴族の言なれば少しも疑はず別れて途に上りし頃には午前七時半なりけり三たび山

を越ゆ其三を拜鎮達巴と云ふ海面を抜くこと殆んど一萬尺是を遠征中過る所の
最高山と爲す高度を測らんとて晴雨計を取りて見れば象牙の部分龜裂して度を
示さず人馬皆渴すること甚し以て其空氣乾燥水分に乏しきを知りけり去れば
山高きも雪なかりけり此の晴天れて氣冷に芳草地を掩ひ騎行太だ便なり山
を下れば路甚だ峻急又岩石多し山下一溪水を渡り又小坂を登りて行くこと未だ
幾ならずして一部幕を得張幕七八之を蘇阿克と云ふ此の地は烏里雅蘇台科布
多等より悉比利多摩斯州の比斯克に達する衝路に位し國境の要地にして清國
官吏の駐劄する所なり亞爾泰驛を出でより六日峻嶺峻巖を跋渉し山中又風雪
に困しみ主従人馬皆甚だ疲勞しければ清國官吏の助勢を得て一日馬を駐め以て
疲勞を慰めんとて先づ往いて官吏の張幕を訪ひけり

官吏無狀

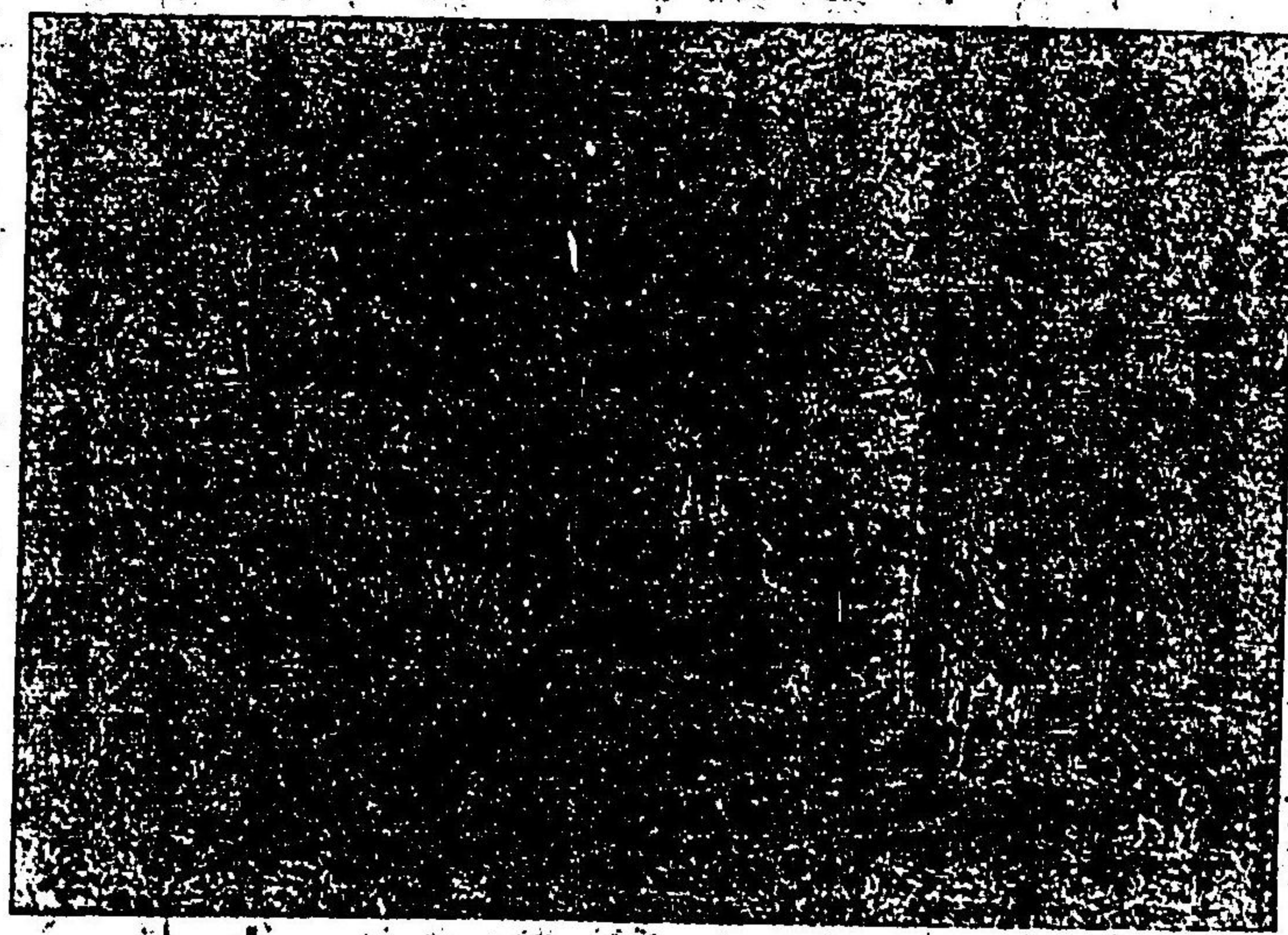
清國官吏の幕外には紅布の令の一字を印せし旗一旗を樹てたりけり官役使丁
に導かれて幕内に入れば中央に露西亞製の鐵暖爐あり正面幕壁に沿りて高さ一
尺五寸ばかりの床板を張り敷くに毛布を以し床上高さ一尺ばかりの一小机を置
き左右に赤き座蒲團あり是れを主客の席と爲す床の前面に黃布をもて包める箱

官吏不知
禮貴族不
恥欺人

あり中に國境官吏の印章を藏む其傍に上任大吉と大書せし一木牌を立つ暖爐の
周圍に木もて敷居めけるものを作り以て幕中上下の別を爲すとぞ中佐幕内に入
り先づ揖して懇懇に禮を成しけり然るに彼の清國官吏何爲る者ぞ四品頂戴の官
帽を戴き傲然主人の席に在りて答禮を成さず中佐徐に敷居の内に入り自ら彼が
右なる客席に就きけるに彼れ問うて曰く何の用ありてか來れると中佐善く支那
語を操る答へて曰く予は日本帝國の福島少佐なり蒙古地方を遊歴して此の地を
過ぎし時人馬稍疲れたり駐宿勞を慰せんと思ふ帳幕を命せられんことを彼
曰く請ふ護照を示せと乃ち之を懐に取きて示せば彼れ披閱一番曰く護照中只
驗査放行の文字あるのみ助勢を與へよとの文を見ず豈予の與り知る所ならんや
又曰く護照は光緒十七年の日付なり貴下の來る何ぞ其遲きや中佐笑つて曰く貴
下果して北京伯林を去ること幾里伯林蒙古を去ると幾里なるを知れりやと彼れ
赧然答ふる所以を知らず時に彼の塔爾哈特の台吉羊肉を此の地に得べきやう取
計ひたりと云ひしより蘇阿克に至りて直に之を索めければも得ず必定彼れ貴族
の身を以て人を欺くを耻ぢす恬として珠玉を騙取せしものなり中佐此に至りて
食料の乏を告げ朝來渴して一滴の茶を飲むを得ず飢えて一樹の肉を食ふを得ず

り。け。れ。ば。更。に。言。葉。を。和。ら。げ。て。清。國。官。吏。に。明。て。曰。く。帳。幕。な。き。は。憂。ふ。る。に。足。ら。ず。幕。天。席。地。以。て。今。夕。を。徹。せ。ん。の。み。但。朝。來。食。は。す。少。許。の。羊。肉。を。得。て。以。て。飢。を。醫。せ。ん。と。欲。す。請。ふ。周。旋。せ。ら。れ。ん。こ。と。を。彼。れ。曰。く。護。照。中。復。た。此。の。事。を。記。せ。ず。且。つ。予。は。官。人。貴。下。の。請。ふ。所。は。私。事。の。み。予。の。與。り。知。る。所。に。非。ざ。る。な。り。と。蒙。古。の。一。譯。官。支。那。語。に。通。ず。る。者。亦。其。傍。に。在。り。吃。爾。噉。子。嚮。導。を。罵。り。且。つ。中。佐。の。勳。章。を。見。て。是。れ。洋。鬼。子。の。物。な。り。と。嘲。り。尤。無。狀。を。極。め。け。れ。ば。中。佐。憤。然。と。し。て。大。聲。之。を。叱。し。て。曰。く。黙。れ。敢。て。無。禮。を。爲。さ。ば。科。布。多。の。辨。事。大。臣。に。訴。へ。て。嚴。に。處。分。す。る。所。あ。ら。し。

蘇 阿 克 部 落
清 國 境 官 吏 駐 紮 之 地



兩國有。事。
成敗如何。

めんと乃ち止みけり清國官吏又曰く護照中貴下一人の姓名あるのみ僕従を携ふるを記せず此より復た二嚮導の通過を許さずと二嚮導は一ツをツンバイと云ひ一ツをアーベンと云ふツンバイ尤活潑勇敢なり進んで官吏に謂て曰く我主は元是れ高等武官僕従嚮導唯其隨意亦怪しむに足るなし書中豈に之を記する理あらんやと官吏默然として辭なし彼等の暗愚事理に通せざる糺ひ千言を費すとも到底論す可らざるを知り憤然疲馬に鞭ちて出でけり中佐曰く邊疆藩屏の貴族恬然人を欺きて榮辱の繁る所を知らず國境要地の官吏事理に暗く外國の形勢に通せざること如此く而して過る所の部落復た一兵卒を見ず嗚呼此の愚官愚民を以て精練勇壯の露軍と咫尺相對す知らず兩國一朝事あらば其成敗果して如何んと。

蒙官貪慾

既に清國官吏の張幕を出るや嚮導疲困の色あり曰く日將に没せんとす愚復た張幕の何れに在るかを知らず如何ん中佐曰く唯水草の地を擇べ鞍を枕にして露宿せんのみ嚮導曰く食なきを奈何せん中佐曰く燕麥の馬に與ふる者あり嚼で以て飢を凌がんと因て自ら嚮導に先ち南に向て而して行く嚮導感激亦馬を驅りて之に隨ふ時に後の方に呼ぶ者あり顧みれば則人あり馬を馳せて逐ひ至る近くに

及びて知る是れ先に清國官吏の傍に在りて嘲罵を極めし蒙古譯官なるを彼れ頻に我張幕に入らんことを勸めて止まず中佐固より彼が無狀を惡み默然答へず二嚮導疲勞に堪へず亦幕に入りて一宿せんことを乞ふ因て詮方なく之に従ひ相伴うて行く日没する比は山を下り西の方より來る一溪に遇ふ溪は科布多道なり中佐始めて迂路を取りしを知りけるが又迂路の爲に好經驗を得しを喜びけり山間地勢稍平なり草野の中を行くこと數露里張幕の地に達す此處を波羅布爾噶斯と云ひ亦土爾伯特部落の一にして昨日暮を此に移せし者なりけり此の日行程四十露里蒙古譯官中佐が必ず羊肉を要するを知り高價を食らんと欲す嚮導曰く價貴し買ふ勿れ愚此に少許の脂肪を携へつれば請ふ分ちて以て飢を醫せんと蒙官露語を解せず然れども其舉動を見て嚮導の賣買を妨ぐるを覺りて怒ること甚し嚮導を指して中佐に謂て曰く彼は哈薩克なり哈薩克の人と爲り兇猛屢境を越えて我輩遊牧の牛馬を掠奪し兩國々境の官吏此の詛已ます今彼等貴下に隨行するをもて通過せしめざるを得ず然れども歸來驗査一番若し旅券なくんば豈敢て放行せしめんや必ず懲罰措かざるべしと哈薩克とは哥薩克の訛にして彼等露人を目するの稱なり蒙官の言ふ所固より盡く信す可らざるも牛馬盜奪の事或

は信ならん中佐嘗て聞く塔爾巴哈台及び伊犁等の國境上亦屢此の事あり盜馬の詛常に絶えずと兩國々境固より天然の分界あるに非ず唯地圖上の一線を以て兩國を劃するのみ其繁雜多事なる海國日本人の想像し得可らざる者ありと云ふ蒙官其妻と與に新鮮なる羊肉を人々の目前に調理し獨り中佐に與へて嚮導をして指を染めしめず中佐憮然顧みて蒙官に謂て曰く異郷の跋涉主僕固より死生苦樂を同じくす予れ豈に獨り羊肉を食うて彼等をして飢ぬしむるを得んやと而して蒙官遂に嚮導に與へず乃ち辭して受けざりけり嚮導之を見て感奮措く能はず脂肪數片を取りて之を煮以て中佐に與ふ中佐曰く脂肪は汝等之を食へ予は別に食わりと乃ち糞底に残れる麵包粉一握を飾ひ出して之を食ひ茶十數盃を喫して糞に飢渴を醫するを得けり此より嚮導益忠實を致し科布多に達するまで奉事私なく與に艱苦をぞ嘗めける主は仁にして僕は義豈美談に非ずや抑吃爾噶子人は逐草遊牧の一賤民のみ而して猶且つ義を知る況んや東方君子國の民族をや以て世を警ひべし此の地方種々の蒙古人清屬吃爾噶子人と雜居し土俗橫暴なり固て此の夜嚮導は終夜幕外に在りて馬を護り中佐は短銃を枕にして天明に至りけり

始遇行人

明くれば九月廿六日午前八時四十五分發程左右皆山中に草野あり廣さ五六露里
蘇阿克河其間を流る河岸一帶石礫なきに非ざるも亦水草に富み以て遊牧すべし
此の日馬太だ疲れて駄する能はず徐行數里蒙古に入りてより以來始めて一隊の
行旅と遇ひけり露商二人哥薩克兵二人伴を結びて跋渉し皆露國軍用のベルタン
銃を携ふ悠々たる行路の人本相知らざるも同じく是れ異郷の客天涯相遇ふ空谷
之音の感なきに非ず馬を立て、與に語りけり彼等は科布多より來り將に烏蘭達
巴を越えて亞爾泰驛に至らんとする者亞爾泰山中既に雪ありと聞き相顧みて稍
色を變じけり彼等曰く此を去る數露里露國商人あり幕を張りて商業に従事せり
と

土人移幕

行くこと未だ幾ならず左手なる山の下に一隊の蒙古人水草を逐うて幕を移す者
あるを見る遠く之を望めば軍隊の大演習の如し先鋒は則羊殆んど四五百頭第
二線は馬百餘頭第三線は牛五六頭殿は則駱駝帳幕及び器具を駄す羊は歩兵の
如く牛馬は騎兵の如く駱駝は輜重兵の如く整々堂々隊伍を亂さず實に曠原の一

大壯觀なりけり

露商幕内

又草野の中を行くこと露敷里波羅布爾噶斯を距ること二十露里果して露商の帳
幕二點あり一は其居一は則僕従の居る所此地二幕のみ其餘土人の帳幕今日他處
に遷移せりと云ふ蓋し曠野見る所の一隊是なり乃ち露商を訪へば彼れ之を幕内
に延き款待尤惻然なり露商は露國宣教會の派遣する所比斯克より來りて此地に
在る者十八年備さに艱苦を嘗めて宣教と商業とに従事すと云ふ其幕外數頭の駱
駝あり皮荷を駄し比斯克に向て送る者なり此の邊漠北蒙古の僻地なれば交通尤
便ならず磚茶一枚の價三留に上るとかや此の日蒙古人露幕を訪ひ羊皮十八枚を
もて煙草四斤と代へて去りけり幕内に蓄ふる所は磚茶、喇嘛草、刻烟草、綿布類、尤
多く綿布は紅黃の二色賣行尤よし是れ喇嘛教の僧侶其色の法衣を着ればなり露
商は毎年十一月より翌年三四月の交に至るまでは本國に歸るとなり時に一蒙古
人又至る痛く酒に酔ひけん蹠蹠として幕に入り口を極めて何やら主人を罵り
遂に其面に唾して無禮言ん方なかりけり主人は深く憤地に入りて訴へんと欲す
るも地なく助を乞はんにも入さければ隱忍争はず中佐見兼ねて劍を按して起ち

蒙古人を叱して曰く汝何爲る者ぞ無禮も亦甚し予は日本帝國軍人なり汝の姓名を何と云ふ予れ科布多に至り參贊大臣に告げて處するに法を以てせしめんと彼れ喪然色を失うて去りけり露商中佐に謝し且つ曰く如此き者數忍耐日を送る艱苦言ふ可らきと以て蠻俗を知るべきなり此日中佐始めて與安亞爾泰の二馬に蹄鐵を打ちけり遂に幕内に宿す此地稍平坦なれども海面を抜くこと六千五百尺なり

始見樹木

馬疲るゝこと甚しけれハ小距離をのりて宿らんとて翌日は午後二時に發程露商馬を驅りて二三露里の外に送りけり草野の中を行きて一溪水を得科布多河と云ふ此に至りて蘇阿克河と會す右手の方童山の麓に一人家あり支那人山東より來りて商業に従事する者なりと云ふ野盡きて丘あり丘を越えて科布多の左岸に出づれば一部落あり伯路と云ふ露幕を去ること二十五露里なり河岸に一株の川柳あり蒙古に入りてより百露里ばかりの間始めて樹木を見けり地形想ふべし伯路は喀爾喀蒙古の札薩克圖汗部屬し土人帽を戴かず皆紅又は黃の布もて頭を包りりとぞ

科布多河

次日砂途石徑を行き山谷の間を過ぎて科布多河の岸に出れば奔流岸を打ちて珠碎け霧飛ぶ岸上草あり其上に小憩す會雨至り冷氣肌に透りけり河に沿ひて行く數里地稍平なるも絶えて樹木なく一望皆石砂磧の上を渡るが如し日暮一部落を得之を烏爾克と云ふ行程三十五露里なり部落河岸に瀕し岸に椰樹多し時に土人駐宿を好まず苦請時を費し朱玉五個を與へて纒に張幕の中に入るを得けり翌朝部落を出づれば直に科布多河を渡らざる可らず河の廣さ三十間ばかり水深く流急にして橋なく船なく且つ人烟稀薄往來木だ少にして足跡蹄痕を印せざれば何の邊か徒渉すべきを知らず河に臨みて馬を立つる者久しく遂に一銀片を以て一土人を雇ひ先づ濶踏を爲さしめ淺瀬を擇びて馬を乗入れけるに水猶深くして馬腹を没しけり遂に右岸に至り流に沿うて行く路皆砂礫山を下りて一部落を得途に一支那人に遇ふ蒙古人二人を隨へけり是れ前日見る所の家に住する支那人東の商人なり科布多河此に至りて東流し四山環繞嚮導路を知らず更に一土人を雇ひて導者と爲し山を上り溪を過ぐ山上溪間皆砂石のみ一滴の水を見ず途上又蒙古の二騎士に遇ふ其携ふる所の古銃鷄頭に煙を附けたるが彼等は山羊を近郊

に獵する者なりけり山羊此の邊尤多く亦露人の尤喜ぶ所にして其悉比利に輸出する者莫大なりと云ふ又山阪を上下し石徑を行くこと數露里一部落を得其傍溪水あり清冽飲むべし又水草に富り中佐馬を此に駐めんと欲す蒙古の導者曰く此の地厄魯特蒙古の游牧部落にして物を奪ひ人を傷ひ兇暴尤甚し猶進むを可と爲すと準噶爾四厄魯特蒙古は皆て喀爾喀蒙古を獵食して之を漠南に逐ひしことあり後怨結んで解けず今猶互に相爭奪するが故なるべし因て又南に行くこと數里一部落を得之を烏哈と曰ふ喀爾喀蒙古の札薩克圖汗部に屬する者なり幕外の犬大に吠ゆるに主人出で之を制し中佐を延んで幕中に入れば下婢茶肉を持出で、款待しけるが蒙古に入りてより未だ嘗て如此く清潔整頓せし幕を見ざりきと云ふ此の日行くこと四十露里

蒙古兵制

此の夜宿せし所の烏哈の帳幕は佐領の居なりけり佐領は蒙古の武官なり清朝の蒙古を御するや軍制を以し定邊左副將軍烏里雅蘇台に駐劄して喀爾喀蒙古四大部の兵馬を統轄す四大部には三汗一諾顏ありて之を治め毎部編して旗と爲す札薩克圖汗部は分ちて十八旗と爲し總て士百三十八人騎兵一千百五十人之を分轄

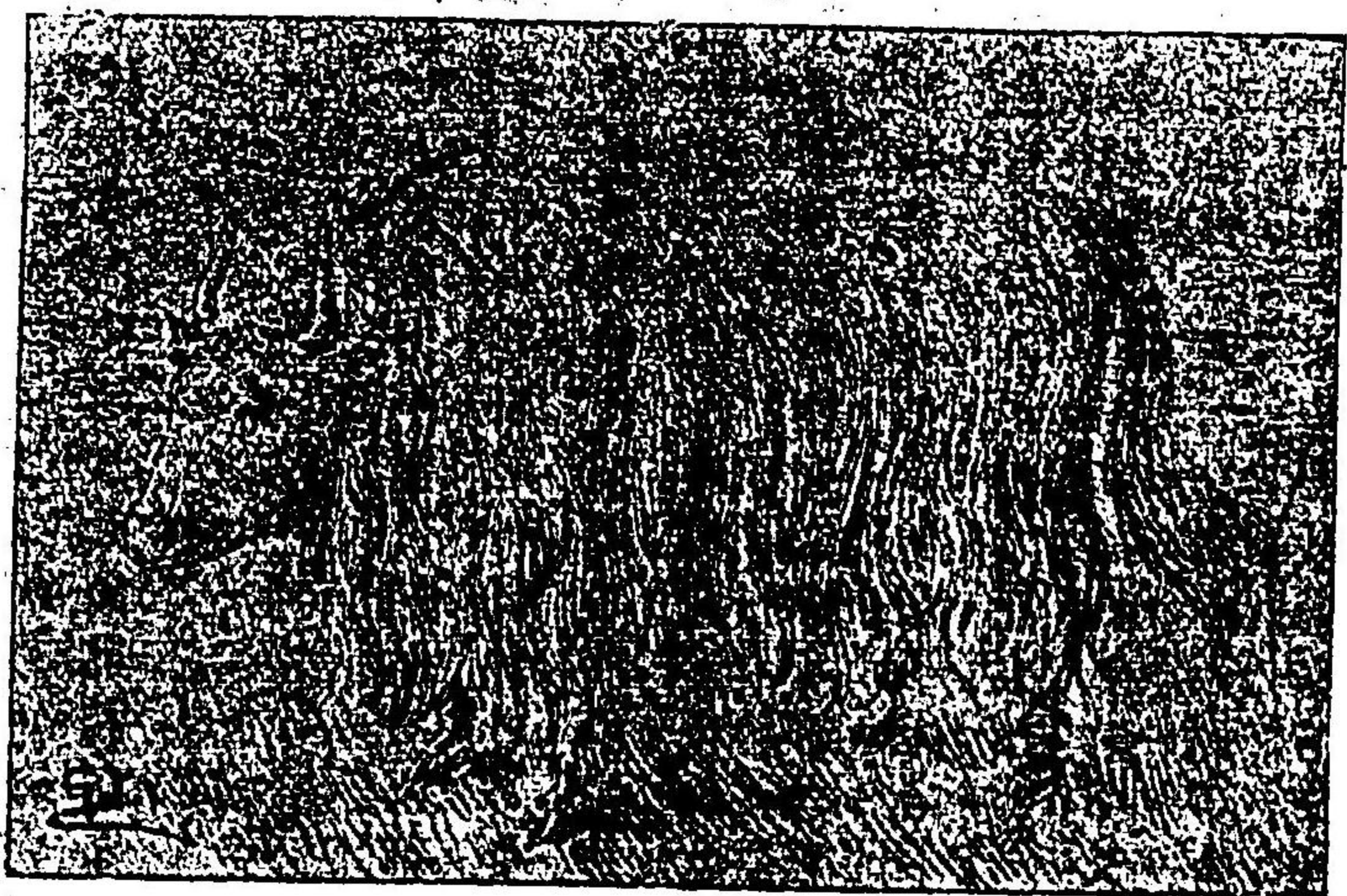
御蒙古軍制

するを佐領二十二名と爲す帳幕の主人は則其一にして科布多以北十八部落を管すと云ふ主人此の夜公事の爲に科布多に在り中佐を幕内に延きしは其長子なりけり

野見異牛

三十日烏哈を出で、山を登れば枯草多く遊牧に適せり左方山下遙に數點の帳幕を見る是れ蒙古第一の富豪なる者にして牧畜尤多く牛馬羊駱駝一萬餘頭ありと云ふ時に數郡の牛羊百餘の駱駝草野の上に遊ぶを見る此の邊産する所の牛凡種に異なり牦牛格肥大其毛甚長く尾垂れて馬の如し初め中佐の馬其異形に驚きて進まざりけり其乳尤衛生に適すと云ふ中佐嘗て伯林動物園に遊びて亦此種の牛を見けり此札に書して曰く西藏産と中佐其異形に驚きけるが後動物書を閱みしけるに曰く此の牛西藏に産し寒烈高燥の地に生育し好みて粗草を食ふ概皆毛長くして黒く尾垂れて白し其尾は掃蠅に適し歐洲市場價太だ貴しと今又此の地を過ぎて同種の牛を見果して寒烈高燥の地に生育すること獨り西藏のみならずを知るけり此の日天晴れて風冷に地勢漸く高きも太だ峻急ならず土柔らかにして騎行に便なりけり將に山嶺に達せんとして嚮導又路を失ひければ

ツンバイをして山下の部落に至りて更に一嚮導を雇はしむ既にして一老婦を伴ひて至る曰く壯者皆牧場に在り雇ふことを得ざりきと老婦の年を問へば五十五なりと云ふ其健馬に鞭ちて山阪を上下すること壯者に譲らず既よして山上に達すれば湖あり水光鏡の如く仰げば則南方の一嶺尤高く聳然として萬山の上に在り嶺上の積雪夕照と相映じて紫雲の搖曳するが如し此の雪固より太古の物なり湖畔左折して溪を下り水草を得て小憩し老婦二嚮導と與に乾馬矢を拾ひて火を燒き茶を煮て冷肉を食し又一嶺を越えて南に行くと數露里一溪流の傍に小部落ありて亦厄魯特に屬する者因て夜を胃して猶行き午後七時班牙部落に達して不潔の一幕内に入りけるも枯草に乏しく馬を牧するに足らざりけり彼の老



百八十六

導者の終日驅馳絶えて疲勞の態を見ず彼等の馬に乗るハ猶我が草履を穿くが如しとなり

暴風大作

十月一日溪水に沿うて行く石徑委蛇數里にして一部落に至り此に嚮導を得南折して山を上り嶺に至り東望すれば大小の山嶺眼下に廻合し科布多河其間を流る山間溪多きも絶えて水を見ず漠外の山川蕭索憐ひべし山を下りて行くこと數里一小溪を得水草あり小憩乃發す嚮導路を一直線に取り石徑峻坂一氣踏破し顧みて中佐に謂て曰く山南部落あり砂爾と云ふ部落の境域中井水三眼あり水の有無に隨ひて遷移遊牧す今は其何の井邊に在るを知らず兎も角も其近き者より求めんとて嶺を踏えて行くこと一露里一井あり水を見ず日將に没せんとして四顧蒼然帳幕の在る所を知らず既にして西南の山腹遙に一群の牧馬を見る其必ず部落あらんことを知り馬を馳せて至れば果して數帳あり而して其地井なし野草又悪しく馬に飲ひ且つ牧する能はざりけるも日已に暮るゝをもて遂に帳幕に入りけり此の夜暴風大に作り獵々鳥々終夜聲あり聲百雷の如く砂を捲き石を飛ばして月色爲に暗く細砂織塵幕隙より入り耳を埋め鼻に満ち目開く能はず呼吸亦

迫り唇乾きて龜裂しけり蓋し暴風は漠外の名物なりとぞ

入科布多

二日南に向ひて山を踰ゆ溪を渡り厄魯特蒙古の一部落を過ぐれば右の地方地稍高き處に一湖水あり太だ大ならず清流飲に適す馬渴する甚しく走りて湖水を飲む其喜び知るべし小憩乃ち發し嶺を登ること數里嶺上遙に其下を瞰れば地大に開きて山嶺環繞一水其間を流れ上に城郭あり郭外人家稠密市廛相連り蒙古人の帳幕其外に星羅しけり此を科布多城と爲す中佐亞爾泰驛を出で、よりこのかた十三日峻嶺曠野の中を行きて寒帳牧畜の外一物を見ずして今忽ち人烟繁華の地を望む心神自から暢然たりけり一鞭嶺を下りて城外に至り是より先き亞爾泰驛税關官吏ウラセンコ氏の贈りし漆書を携へて露商アサノフ氏を訪ひ其家に投宿しけり此の地亞爾泰驛を去ること五百露里我百三十三里騎行十三日一日平均十里強なり馬峻嶺を行くこと久しうして疲勞尤甚し因て馬を駐むる者二日アサノフ氏多く草秣を蓄へ且つ地燕麦を産しければ馬始めて飽くことを得けり

沿革一斑

中佐の馬既に蒙古の要地に入れり勢を審にし情を察せんと欲せば先づ其地の變遷を知らざる可らず請ふ其一斑を示して後科布多城の事を記せん漢唐遼宋必すしも載録せず成吉思汗此の地に起りて宋を亡ぼし烏城を一統して帝位に就き國を元と號せしも亦人の知る所曠々を須ひず厥後元の亡びるや蒙古分つて三大部と爲れり曰く漠南内蒙古曰く漠北喀爾喀蒙古曰く厄魯特四衛拉蒙古是なり厄魯特蒙古は元の遺臣にして西域に居り分ちて四部落と爲る伊犁に在る者は曰く準噶爾義爾齊斯河畔に在る者は曰く土爾伯特塔爾巴哈台に在る者は曰く土爾扈特烏魯木齊に在る者は曰く和碩特之を稱して四衛拉と云ふ當時準噶爾の兵強く威猖んにして嘗て四衛拉の三部落を併呑し天山南路を奪略して威西藏に震ひけり喀爾喀蒙古世々雄を漠北に稱す中世喇嘛教を奉じ武備を修めず酒を好みて放逸互に相凌辱す準噶爾其隙に乗じて急に擊ちて之を破り喀爾喀を漠南に走らし遂に漠北を兼有しけり清朝康熙二十五年親征し兵を分ちて兩道と爲し進み擊ちて大に準噶爾を破り喀爾喀の故地漠北を復し封を有功の諸台吉に加ふ雍正九年固倫額駙策凌額駙は帝婿の稱準噶爾を奮擊せし功を以て詔して近親十九酋長を統率して別に一部を爲し冠するに三音諾顏の稱を以せしむ後屢準噶爾を討ち乾隆二十二年に至りて終に之を亡しけり準噶爾の盛なりし時人口六十萬と稱す

蒙古三大部
分爲二數

俗僥悍を尙び殘忍酷薄を喜び賊を爲さる者は人と齡するを得ず能く數人を切すを勇者と爲す進みて退くを知らず戰うて死を顧みず比隣の回城回救を奉ずる者及び哈薩克其至るを聞く毎に奔竄遁匿唯其爲す所には是れ任せり實に清朝歴代の邊患なりけり準噶爾の亡ぶるや餘孽皆或は戰死或は痘死し或は露國に投じ其存して今に至れる者は僅に來降成屯の厄魯特部落若干あるのみ漠北數十里準噶爾と稱する者復た一帳幕なく西北蒙古の部落中厄魯特と稱する者即ち準噶爾の遺族なれども其舊稱を用ゐず當今科布多の兵備は駐班官兵三百十九人毎年定期或は毎二月を以て交代す其他宣化大同より來成する綠營換防兵二百四十人あり光緒五年明治十二年露國哈薩克人科布多の境に入り遊牧を擾亂す是に於て新に蒙古騎兵三百選練して處々に分防せしむ之が爲に毎年費す所の軍資壹萬八千兩厥後邊疆肅清に歸しけるより光緒十年明治十七年之を撤しけり故に今現存する所唯駐班官兵と綠營換防兵とあるのみ此の二兵も亦支那内地の綠營兵と一般其名ありて其實なし故に茫々たる漠北蒙古殆んど兵備なしと中佐云ふ蒙古兵制の條參照

科布多城

漠北之三要地

科布多は西北亞爾泰方面の要衝にして庫倫烏里雅蘇台と並稱して漠北の三要地と爲す科布多城は土を以て之を築き規模甚だ小參贊大臣此に駐劄し土爾伯特土爾扈特新和碩特の兵大約八千を總轄す乃ち漫西蒙古にして金山天山の間に錯處する者は是なり城南の人家を市廛と爲す人口大約貳千概ね支那内地より來りて商業に従事する者なり前門の一街道路稍廣く兩傍並樹あり路上清潔支那人の住する所益し罕に見る者なり露商數人あり皆比斯克より來れりと云ふ商品は布匹烟管刻烟草喫烟草鐵鍋火箸庖刀小刀磚茶等蒙古人日用の物品及び蒙古人の喜ぶべき玩弄品多く其價尤貴ときは喫烟草入の壺なり蒙古人の携さへ來りて交易する者唯毛皮あるのみ其取引さして盛ならざる者の如しと云ふ光緒七年明治十四年露清條約を結びて陸上貿易を開きけるが露國未だ領事を此地に置かずアノフ氏貿易商人頭取を命ぜられ兼ねて領事の職務を取扱はしむとなん

發科布多

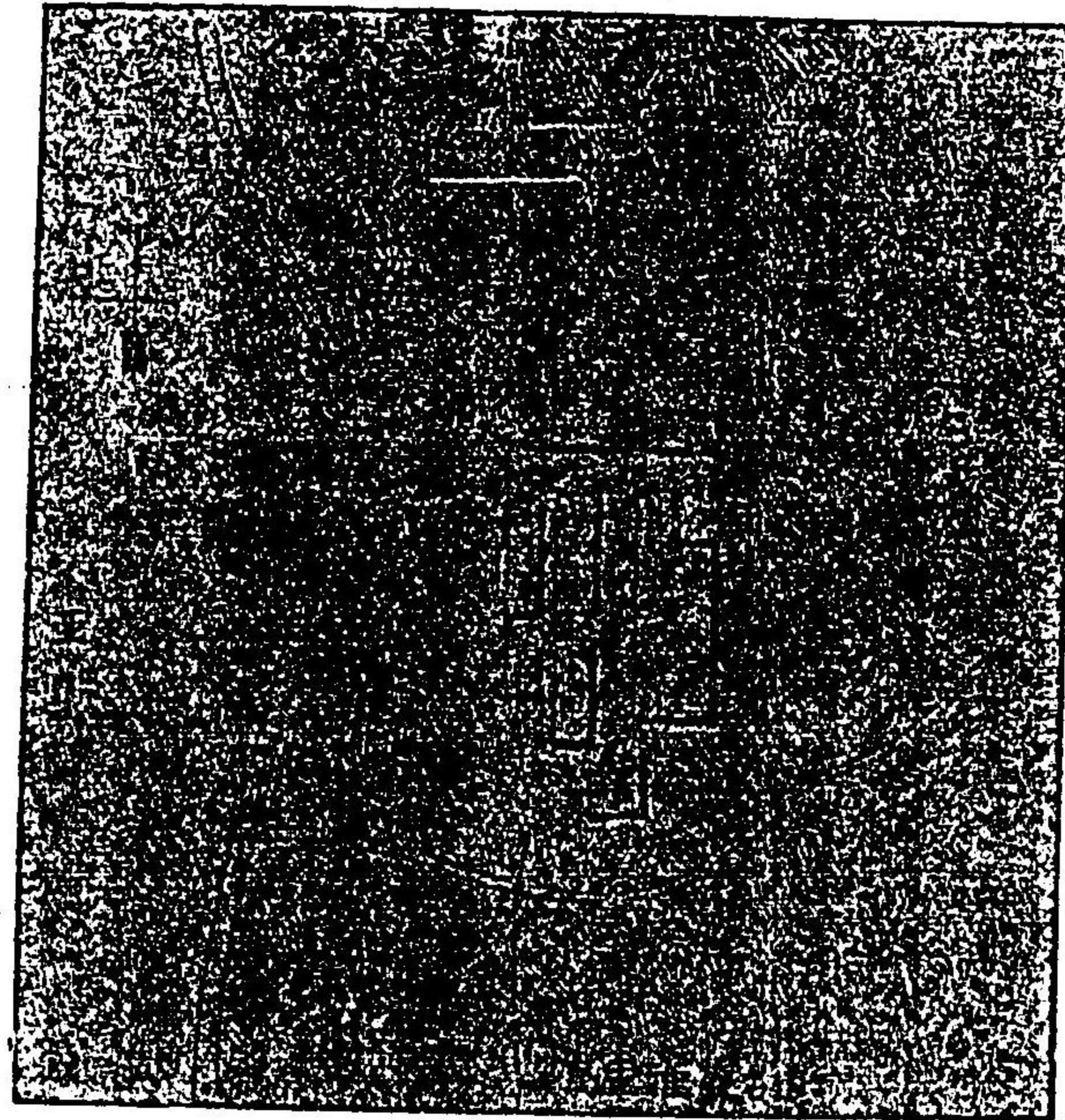
蒙古の部落遷移會て定處なく道路亦隨ひて變じ部落より部落に至る毎に必ず更に嚮導を雇はざる可らず途中屢嚮導を代ふる毎に亦多く時を費し煩擾少からずアサノフ氏曰く予れ請ふ參贊大臣衙門に至り每部落一嚮導を出さんことを謀

百九十二

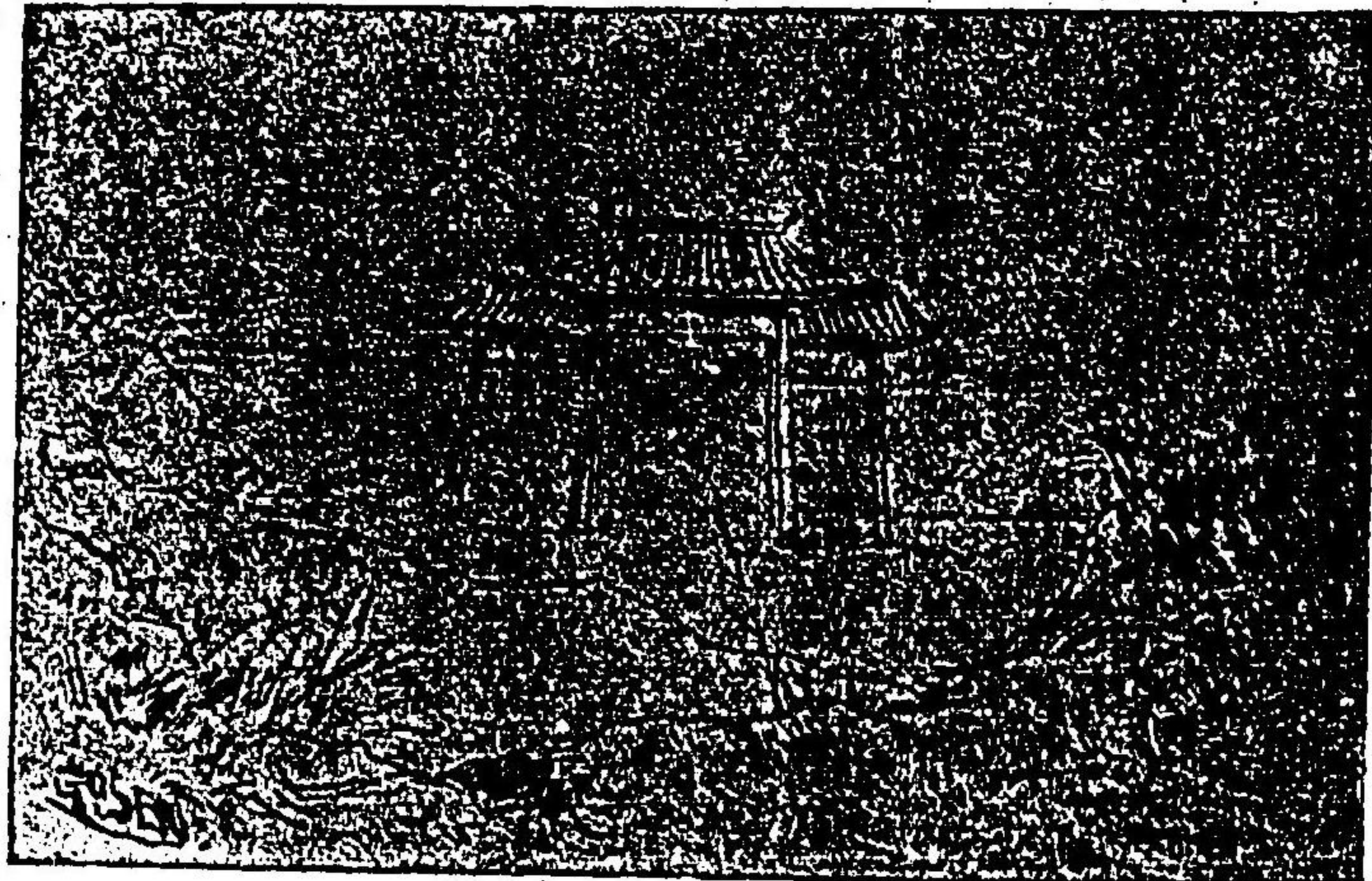
らんとて護照を携へて衙門に至り之を大臣に謀りけるに彼は護照中此の事を記せずとて拒絶しけるをアサノフ氏縦説横論に其請ふ所を許されけり去れば科布多烏里雅蘇台の間復た途中嚮導者を呼ぶの煩なし但更に一蒙古人の支那語に通ずる者を得て調査に便にせんと欲す亦アサノフ氏の好意に因て適任の者を得つ是に於て吃爾噶子の二嚮導に一人十八留を與へて之を返しけり時に巴に初冬寒威漸く甚しく曩に塞米巴拉丁斯科に於て製せし所氣の吃爾噶子外套は蒙古に入りて後寒を防ぐに足らず是に於て一羊裘を製す裏は毛表は章蒙古人の着る所なり穿つ所の靴亦薄し乃ち一長靴と駱駝の毛の厚き靴足袋とを買ひけり燕麥を買ひ蹄鐵直し準備全く成りければ十月五日午前十一時を以て程に上るアサノフ氏及び吃爾噶子二嚮導送りて數里外に至る時に上加米諾哥羅斯科の一馬は忽然首を轉じて科布多の方に馳去り捕へんと欲すれども得ず逐ひ至れば馬はアサノフ氏の廐に在りけり彼れ必定二日の滞在に飽食の樂忘れ難く前程の苦に堪へずして群を離れて逃げ歸りしものなり既にして馬を引き來りければ人々に別れて嶺を登る

鞏固雄門

科布多城之圖



湖斯烏喇喀望遙上山



イ 經文
ニ 光緒二年科布多委費大臣多倫布建立

遂に嶺上に達すれば一大門あり自ら凱旋門の形を成しけるが上に扁して鞏固雄門と云ひ落款には光緒二年科布多參贊大臣多倫布建立と書し門柱文あり右は曰く經文左は曰く緯武蓋し清朝が威を荒微に示し文を邊塞に敷く所以の者か雄門より望めば嶺の下遊に一大湖光の荒野の中に激瀼たるを見る是れ喀喇烏斯湖なり湖東峻嶒一帶雪を戴きて聳峙し遙に相掩映して自ら是れ一幅の好畫圖なり門の傍には高く石を積み石の間に布片を木に結びたるをいくつも挿み又馬の鬣毛其間に散亂せり是れ蒙古人が佛を奉じて福を求むる所以の者山嶺嶺上に到る處皆然りと云ふ

喀喇烏斯湖

嶺を下りて一部落を得喀喇烏斯と云ふ科布多を去ること三十二露里時に午後六時なり遂に帳中に宿す此の地帳幕七八湖畔に散在す喀喇烏斯湖は一名を伊克阿拉克湖と云ふ科布多河及び溪間群流此に會注し東西は狭く南北は長く幅員甚大南岸帳幕の地より遙に北方を望めば水天漂渺涯溪を見ず湖邊一樹木なく湖上一舟筏なく光景蕭索たり然れども湖畔皆水草に富み尤遊牧に適すと云ふ康熙年間準噶爾清軍と戦うて破れ其酋長噶爾丹逃れて喀喇烏斯湖畔に至り索居年を

經たりしは此の地なりけり中佐の嚮導は厄魯特蒙古にして準噶爾の遺族辨髮の尾分ちて四と爲し耳に銀環を附し以て今猶喀爾喀と區別すとかや次日午前八時幕を出で湖岸を行く馬展沼澤淤泥の中に陥り騎行便ならず湖東に至りて遊に一帳幕を見る是れ支那行商の人馬を休憩せしむる者なりけり帳中に入りて小憩し又去りて怪石醜岩の上を行く雄門外見る所の峻嶒險巖踰ゆ可らず迂回して其東麓に達す是を薩克部落と云ふ此の日行程五十六露里

蒙古風俗

中佐蒙古に入りてより既に十三日蒙古人と接し帳幕中に宿し稍其人情風俗に慣れけり今此に其一斑を掲げて蒙古の旅行を想像するの便に供す

辭儀

○辭儀 蒙古人途上相遇へば互に「メンドー」と云ふ猶我が御機嫌よろしうと云ふが如し喇嘛の僧と僧と若しくは僧と知人と相遇へば互に「メンドー」と云ひつゝ、掌を相觸るゝを禮と爲す客幕に入りて「ノンブルワイノ」と云ひ主人又「メンドー」の挨拶をも爲さずして之を迎ふ是も亦御機嫌よろの意あり幕を出るに當りては一言の挨拶をも爲さずして立去るを禮と爲すとかや

帳幕

○帳幕 幕の四壁は木を蠟の形に組み其組目孔を穿ち孔に革紐を通して括

幕内

りつけたるが一組の長さ三四尺幾組をも継足して圓形に壁の骨組を作る其壁を解けば組みたる骨は疊ひことを得べく開闔自在にして移幕に便にすさて木の骨組既に成れば其の上に柱を幾本となく結びつけて柱の末を上なる輪に集めて天井と爲す輪にはいくつも穴ありて穴に柱の末を貫ぬき幾十本の柱を集めて同じく草紐もて括り既に天井の骨組成れば駱駝の毛布を壁の骨組に張り周圍を二段或は三段に毛細もて縛り更に大なる駱駝毛布をもて天井を張り天井の上を毛細もて縦横よからげ括るなりさて天井の大きな輪は烟筒空気取り明取に兼用するものなれば我が引窓の如く晝は開きて夜は閉づ開かんとする時は輪を覆へる毛布の綱を取りてぐるりと後邊に廻り閉ぢんとする時は又も綱を取りて前に廻り以て其開閉を自由にす入口の廣さ三尺高さ四尺ばかり戸の木暖簾は駱駝毛布の刺したる者戸は夜閉ぢて栓を卸す是れ人を防ぐにはあらで犬を防ぐものなるべし如何となれば人は幕外より手をさし入れて栓をあげつ出入自由なるを得ればなり如此にして帳幕成る

○幕内 圓き幕の内の大なるは直徑四間小なるは二三間に過ぎず幕内駱駝毛布を敷き中央に爐あり爐に五徳ありて鐵鍋を置く湯を沸かし茶を煎肉を煮焼酎を

家具

製する皆此の銅を以てす入口の正面には箱あり上に佛壇を作り喇嘛の佛像を安置す佛壇の一方に又は左右に高さ一尺廣さ一疊敷ばかりの臺あり主人の寢臺と爲す爐の周圍に富めるは木の敷居を作れるも貧しきはなし貧幕に至ては寢臺もななく只佛壇の下に一枚の破駱駝毛布あるのみ皆土の上にごるがれり彼の壁の骨組ある木の突出たるは乃ち物掛にして四壁に衣或は肉なんを吊せりとぞ

○家具 五徳銅皿茶筒杓子手桶火箸椀小白茶突棒草袋の酒徳利及び磚茶入幅六七寸長さ一尺五寸ばかり高さ四五寸の小机等は什器の重なるものにして貧富皆所持せざるなし但富者は酒徳利磚茶入皿なんどの鐵もしくは銅眞鍮等にて作られしのみ其餘は貧富皆木製にして絶えて陶器を見ず是れ地僻にして交通の便なく一物破るればとて之を求めんに由なく且つ遷移遊收器物往往破れ易きより皆器の堅牢を尙べばなり去れば火箸の如きも我唐鉄刀の如く二本相離れざらしむ

左圖の説明

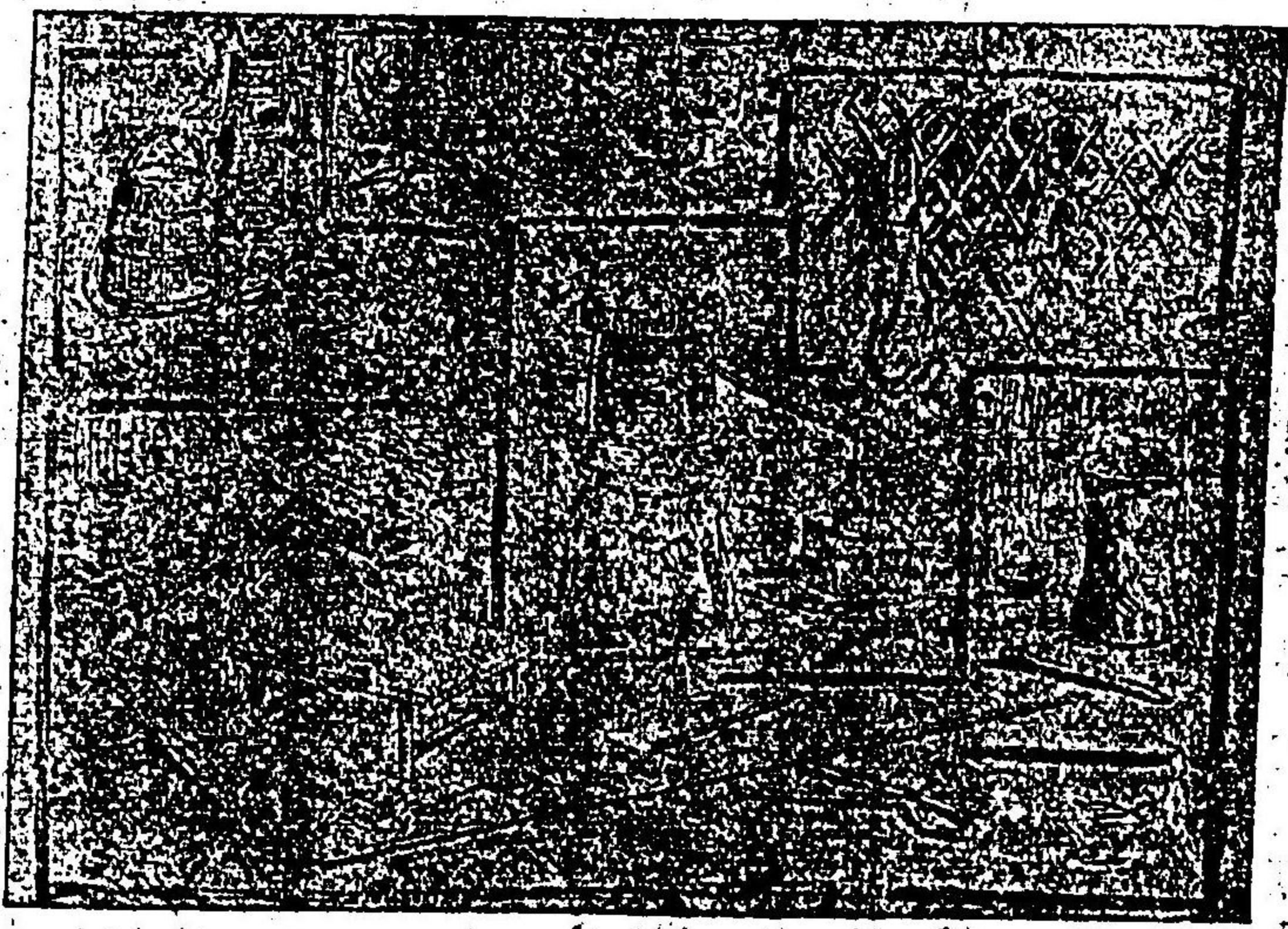
- (一) 帳幕内骨組の一部 (ロ) 牛乳酒入革袋 (ハ) 磚茶入革袋 (ニ) 燒酎製造の圖 (ホ) 木碗 (ヘ) 木臼 (ト) 茶突棒 (チ) 杓子 (リ) 机 (ヌ) 火箸 (ル) 手桶 (テ) 駱駝毛布 (ヤ) 鐵籠 (カ) 喇嘛草入 (コ) 喇嘛草入栓 (ク) 小刀 (ケ) 鐵中有支
- (シ) 婦人帽 (ソ) 念佛器 (子) 數珠 (ナ) 木葉佛經 (フ) 經文 (ム) 捕鳥棒

事業

○事業 張幕七八若しくは九十もある部落には大約羊四五百頭馬百頭内外牛四五十頭あり羊を牧する者は十四五以下の少年馬を牧する者は壯夫にして一群二人を要し牛を牧する者は概皆老翁なり平生草野の間に放牧すといへども一日一回必ず幕邊に召集して其數を點檢す蒙古男子の事業如此に過ぎざるのみ婦女は召集點檢の際出で馬牛羊の乳を搾り且つ衣物の破ぶれしを綴り駱駝の毛もて糸を績むを業と爲すのみ

文字

○文字 字頭十二變化して種々の文字と爲り種々の音聲言語と爲る其字を書するや左より書す其音は我五十音に似たり只我アイウエオをアイエオウと云ひカキケコをカキケコと云ふに過ぎず博言學者人類學者等をして聞かしめば其發明する所蓋妙からざるべし文字頗る簡易なること如此しといへども民族皆游牧を是れ事とし字を識る者殆んど希に臺吉猶且つ丁字を知らず況んや其他をや只一部落毎にザンゲの職を執る者あり喇麻僧もしくは喇麻の爲に教育せられし父兄を師として文字を習ひ文字を知れるよりザンゲと爲りて公文の往復を爲し且つ布告を讀聞かせるなをとするのみザンゲは猶部落長と云はんが如し



犬

○犬 帳幕の外必ず犬あり犬の狀我邦固有の犬と相似て其色盡く黒く眉毛は茶色なり蒙古到る處無數の犬を見る白犬は僅に三四頭に過ぎず舉動遲鈍眠るが如くなりといへど見慣れぬ人の部落に入り或は我主人の幕に近づくと見るや尾を巻きて高く吠え且つ噛みつかんするさま兇猛恐るべきは殆んど豺狼に過ぐ其兇猛人を噛まんとするは洵に故あり蒙古の俗人死すれば屍を山嶺嶺上に送りて禮を終りし後は棄てゝ顧みず無數の犬をして群集肉を啖はしむ中佐山嶺に登る毎に屢人骨の散亂するを見しこれ爲なり故に彼の犬の人を見て吠ゆるは嘗に之を怪しむのみに非ず人肉の味を知りて垂涎措かず直に其肉を啖へんとするなり中佐聞く露商の庫倫に在る者一日銃を携へて出で獵す途中數十頭の

待客

犬に遇ふ犬群吠止まず露商恐れて河上の一樹木に攀ち登り銃を放ちて之を打ち
 數頭を斃せしも群犬猶散せず樹を圍み毒牙を鳴らして高く吠ゆ如此き者一日一
 夜逃げんと欲するも路なく援を乞はんに人なし進退維れ谷まり危急漸く迫りし
 折しも蒙古人の一隊葬を送りて河岸を過ぐるに會ひ群犬之を見て屍を得んこと
 を思ひ其の後に隨うて山に上りければ纔に其難を逃るゝを得たりきとぞ其兇獍
 概皆如此し犬は只其主を辨するのみ部落中の人といへども他人を見れば必
 吠ゆと予幕を守るに尤妙にして行旅の危険更に甚しと云ふ

○待客 蒙古の帳幕低くして凹地に在る者遠く望みて其幕たるを知る可ら
 ずまして夜は燈火なきより其部落の在る所を知る可らず去れども先づ其帳幕あ
 るを告ぐる者は犬なり犬吠ゆれば主人客あるを知り幕を出で、犬を制す客曰く
 ノンプルワイノ主人曰くメンドワイノ遂に投宿の談判を爲し其許諾を得て
 幕中に入る主人客の貴きを見れば佛壇の傍に赤座蒲團を敷きて之を請す赤色は
 支那と同じく慶事に用ゆる者なり客坐するにも寝轉ふにも佛壇を後にす可らず
 必ず斜に壇下に坐すべし赤座蒲團の前に小机を置く是れ食卓なり客貴ければ机
 も亦赤し客座に就けば先づ喫煙草を出し尋いで茶親客には酒をも出して之を饗

喫煙草

○喫煙草 喫煙草は蒙古人嗜好の隨一にして其壺尤善美を盡して裝飾す主
 人先づ喫煙草の壺を出せば客も亦壺を出し互に相分つを習と爲す壺口に栓あり
 栓に耳挿大のヒを附けたりヒもて煙草を盛り取りたるを左手の拇指人指との間
 につまみ取りて鼻を擦りつゝ喫煙なりたどひ煙草を好まざる者も手に煙草を受
 けて少時壺をながめし後返すを禮と爲すこと猶我邦茶人の茶を飲んで茶碗をな
 がむるが如しとかや

茶

○茶 磚茶は塵に埋もれ馬矢の煙に煤けし革袋に入れて幕壁に吊せしを取出
 し膝の上に置きて小刀もて削り其を木の小白の中に入れ楢木大の棒もて突潰し
 粉末にせしを鍋に入れ馬矢もて煎じて手桶の中より移し鍋中の茶糟を杓子もてす
 くひ取り其跡へ羊乳牛乳を投じて沸騰せしめ煮立てば桶の中なる茶を入れて牛
 羊乳と和し杓子もて交返して加減を見つゝ煮立てよき比にトンプとて細長く底
 深き小桶に入れて客の前なる机の上に差出す小桶は大抵木なるも富家は銅鍍
 もて作れるもあり客は皆懷中に木の平碗を携ふれば其を取出して巾もて拭き茶
 を汲みて幾盃とぞ打飲む此の碗を拭ける巾は顔も拭き汗も拭き又不潔なる手

菓子

をも拭き肉汁を盛りし椀をも拭くものなれば其垢れたるは味噌漬の如しさて茶と與に菓子をも出す

○菓子 牛羊の乳もて作りたる菓子をウルム、エツケと云ふ、ウルムは牛乳を鍋に入れ遠火に煮ること數時間鍋の中の周圍堅まりし頃鍋を卸し乳を引あげて二つに打合す其大きさは我神奈川煎餅ほどにして厚さは五六分外は乾き内は和かに甘うして旨く蒙古の食物中尤美味なるものにして富幕の多く牛羊を畜ふ者に非ざれば食するを得ずエツケは牛羊の乳を煮て小さく切り堅くはしかためし者其堅きこと我勝栗の如く臭くして味亦甚だ美ならず中には味羊羹の如く堅くして旅行の携帶に便なるもありと云ふ

○酒 蒙古の酒に三種ありアイリツクは牛乳製、タルヒは羊乳製アラヒは牛乳酒を焼酎となせしものにして蒙古人の尤喜ぶ所なり牛乳酒、羊乳酒は牛羊乳を數日間革袋の中に入れ置き屢掻廻して醗酵せしめし者色白くして滓多く我酒の如し蒙古人は例の椀にて飲み飲了れば舌にて椀を舐めすり底深うして舌達せされば手もてすくひ取りて打舂め跡は例の垢れし巾にて拭き其ま懐中に收む焼酎は多く寒冷の時候に醸造す先づ彼の濁酒を鐵鍋の中に入れ鍋の上に底

酒

肉

の抜けし桶やうのものを置き其上に雪又ハ氷を入れし鍋を置き桶の腹に孔を穿ちて一本の管をさし蒸溜して管に傳ひ來るを壺に受く此は富幕ならでは得易からず濁酒は冷飲焼酎は或は冷或は燂

○肉 貴賓を待つには必ず新に一頭の羊を割き鮮肉を進むるを禮と爲す羊肉は尤股を貴び一股肉の價支那の一錢我十四五錢尋常の客にはかねて幕内に吊して蓄ふる者を用ゆ鮮肉はよけれども吊せしは馬矢の烟に煤けたり其を取りて塵をも拂はで膝を俎として唾をつけて靴を砥石として磨きたる小刀もて切る、膝の上の衣は巾ともなり俎ともなり馬矢の上にも坐り牛の糞をも拭きしものなれば垢染みて不潔あること言ん方なしさて切りたる肉を湯煮て木の皿に移し先づ客に出す富めるは皆眞鍮の皿にして叮嚀にもてなさんには馬矢もて皿をみがき塵を吹去りて肉を盛る

○飲食 蒙古人は箸筴庖刀は必ず腰にさせり主人肉を客の前に出せば客はやをら腰なる小刀を取りて左手に骨附の肉を握り右手に切りて食ふ肉堅ければ左手の手を持添へて口に啣へ右手にて肉を少しづつ切りて食ふ客は其の殘餘の肉を主人を初め幕内の人々に分與するを禮とす去ば一櫛の肉を幾人も食廻すなり終

飲食

よは下女などの番となりて肉は大方盡きて股の骨のみとなれば骨を割きて髓をも食ひ骨は犬に與ふ斯く我れ獨り飲食するを恥ぢて烟草なり肉なり皆座中に分ちて諸共に食ふ習なれば旅人の糧を携ふる者も亦幕内に分たざる可らず去れば中佐科布多を出るに當り露商の好意にて麵包を携へ十數日の糧を爲しけるが獨りかくれて麵包を食ふを得ず幕に投ずる毎に幕内の人分ち分たざるも亦我にも餓頭を與へよ我にも我も乞はれて言ふがまゝに取らせければ幾日ならずして盡きけりさて肉を湯煮し汁は鹽を投じて肉汁と爲す藪重なる馳走には汁の中に小麦の粉を入る蒙古にて野菜穀物は夢にも見難ければ一握の小麥粉もいと貴しとなり斯る飲食の晚餐の時のみ朝は茶と冷肉晝は茶幾盃となく飲みて腹を膨らす是れ蒙古の生活なり

燈火

○燈火 夜は佛壇に燈を點す油の牛油羊油を煮詰めし者燈心の蛇毛の糸なり一穗の佛燈光微にして幕内を照すに足らず爐火明滅轉岑寂に堪へず寢に就んとすれば火を消し天井の覆をなす爐火まだ消えやらぬうち天井をふさげば馬矢の烟幕内に充滿し臭さ烟たさ堪ふ可らず夜間不意に來客ある時は先づ爐火を撥して火あれば其が上に馬矢を振りまくにパツと燃立ち火なれば煙をさりと乾き

念佛讀經

し馬矢を附木として燒きつくるに時を費さず
○念佛讀經 夜間詳々と何やらん唱へ婦人の時に幕外に出で、幕の周圍を幾度となく廻りつゝ唱ふるが如く歌ふが如きは念佛の聲なり主人は晝さへ談笑の際常に珠數を爪繰り話の切目々々には念佛の聲を絶たず棒の末に八角ばかりの箱めけるものをつけ其兩邊糸に小球をつけしものあり念佛を唱ふる時は其棒を打振るに兩傍の小球は箱と共にくるゝと廻る何と云ふものにかあらん幕毎に晝は佛壇に飾れりと云ふ蒙古人の酒を好み佛に候して武事を修めざるに已に清朝建國の初に始まり歳を積みて益々怠り柔弱俗を成し往々武器を藏する者あれば罵りて破戒無漸と爲し部落中人の長上たる者は皆念佛讀經囑々世を終るのみ復た當年慷慨勇猛の氣なし而して彼等口能く念佛を唱ふるも誦經を知らざる者多く喇嘛を師とし又ハ喇嘛に教育されし父兄を師として稍文字を識る者の佛經を讀むを得るも其は十の一二に過ぎず普通の佛經は蒙古語をもて之を記し其林裁折手本の如し次は蒙古語と西藏語と對譯の經あり尤高尙なる者に至ては盡く西藏語を以て之を記す其林裁は木の薄板又は厚紙に書して綴ぢず是れ直に西藏より來る者にして喇嘛僧の能く之を誦するあるのみ蒙古人の此經を讀み得る

者殆んど稀にして二箇月間の旅行中二三人を見るに過ぎざりきとぞ

○就寝 蒙古人の寝に就くや衣服は脱ぎ棄て、赤條々ど爲り羊の裘をまといて、何畔に打臥す幕中の名産は風なり中佐亞爾泰驛以東幕内に宿すること十數夜、風既に衣袴に滿ち往々煩悶眠る能はず且つ天既に寒く夜半風幕隙より至り温度殆んど幕外と同じく冷氣肌に通りて夢覺むる者數なり中佐蒙古人の何畔に熟眠するを見て思ふに蒙古人防寒防風の法蓋し自然に出る者あらん請ふ我も亦彼の爲す所を學ばんと乃ち衣を脱ぎて裸となり裘套を横に被り肩をも手足をもまといて寝に就きけるに四肢密着して温度相通じ裘は冷氣を導かすして夜寒を防ぐことを得つ風は毛の上を這い廻ること自由ならざるより思の外に其責をも逃れて熟眠することを得けり彼の蒙古人が裸體の上に不導體の毛衣をまといて熟眠するは誠に自然に出でし防寒防風の良法なりけり幕隙より吹透す風針の如きより冬は幕の駝毛布の隙間に牛糞を塗りて風を防ぐとなり佛壇燈明既に滅ぬて馬矢の爐火猶明滅とし群幕人定りて天地亦靜かなる時遠く聞ゆる犬の遠吠には行旅の腸を断たざるなく左らぬだにものすとき夜半大風忽作り山を激して雷の如く砂塵幕を打つ時孤客夢を驚さざるなしとかや

○起床 天井の覆を取らぬうちは夜は明けても日は出で、幕内暗黒覆を取るや光線の入ると共に中に晒ひし馬矢の烟不潔なる種々の臭氣忽ち天井より洩れ出で、いと心地よし朝先づ起出づる者は婦女なり先づ天井を開き尋いで爐火を檢し餘燼あれば更に馬矢を投じ火滅ぬし時は煙をさりと火を起しつゝ鍋に湯を沸かすやがて幕中の人々皆起出で油の浮ける鍋の湯を椀に酌みて口に含み口の湯を兩手に受けて顔を洗ひ又も湯を椀に酌みて口に含みて手を洗ひ彼の雜巾と手拭とを兼ねたる布片にて手をも顔をも拭ひ茶出來ればエツケ或ハ冷肉を食して茶十數盃を飲みて朝飯と爲す

○厠 さて難儀なるは兩便なり固より厠をければ幕外に於てせざる可らず去れども我幕を去ること遠ければ兎犬來りて嚙むをもて我が家犬の保護線内に於て用を辨せざる可からず故に厠は即ち幕外十歩を出でず男女皆草野の上にしやがみ廣く裳を披きて入目を包むもの皆是なり固より紙を中佐は我宿りし幕の犬にさへ吠ねらるれば落部中の犬皆敵にして幕外一步即ち是れ敵地なり去れば其厠に上るや幕中の人其後に立ちて之を保護す蒙古數と榮なくして便秘し輒く事を了る可らず營後の保護者老人ならんにはさして苦しからぬと十七八の

捕馬

娘など立ちたらん時は氣の毒なりきと打笑ひぬ
 ●捕馬 朝は必ず牧場の群畜を召集點檢す又乗馬の入りかきありて捕へんとする時は捕馬棒とて棒の末に綱の輪をつけたるを携へ追掛けて輪を馬の首に引掛くるなり一騎は捕馬棒を携へ一人は龍頭を携ふ牧場に入るや馬悟りて逸す逸するも曾つて群を離れず騎者の馬は群馬中の尤健なる者疾驅して追詰め棒末の輪を引掛くるや一人は馳寄りて龍頭を掛けて牽きて歸る

男子風俗

●男子風俗 毎暮男子一人は必ず辨髪なるも其餘は兄弟幾人ありとも皆喇麻の徒弟と爲り剃髪圓顔なり去れども妻帯は其自由に任す概ね皆髪を蓄へず辨髪者は毛帽剃髪者は毛帽の頂に黃布をつく帽尾に垂れし布は皆黃色或は紅色なり衣裳は冬は皆裏毛の羊裘にして或は表に淺黃の布をつけ上もあり支那服に似て裳長く垂れ袖も亦長くして廣し胸は各せて右肩の傍にて紐を用ひ帯を結ぶ先づ帯を尻の邊に結び衣裳もろともにくつと引あげて腹と背とを膨らして囊の如くならしむ袖の長さは手袋を用ひずして寒を防ぐに足る可く其廣は手の出入自在にして風を捫ねるに便なる腹背に衣を膨らして囊の如くならしむるは風の直に皮膚に迫るを防ぐなるべし帯には燧小刀燧烟草入を附く此は男子の尤貴重す

婦人風俗

る者にして貧富に應じて銀珊瑚珠玉などもて裝飾せり靴は支那風の布靴にして冬は牛革の靴をも用ゆとなり
 ●婦人風俗 婦人の衣裳は殆んど男子と同じきも其異なるは肩なり双の肩には裳と色を異にせし布を縫ひつけて高く縫ひしむ其色は多く萌黃又は赤なり帯の結びず裳は披けり髪は二に分ちて三組に編みたるを肩より左右の胸に下げたるが其末には二錢銅貨ばかりの銅錢を結びたり靚装せし時の胸に垂れし双の髪を袋に入る彼の銅錢は髪を袋に入れ湯からしめんとてなり袋には銀珠玉などせを飾り頭には大なる銀環を穿つ其狀鉢巻の如し銀環には珊瑚珠玉などせの裝飾を施せり髪には牛又は羊の油をつけて薄く平たく張出し髪挾をいくつも挟みてつゞれざらしむ去れば女の髪は扇子をひるげたらんが如く髪挾は扇子の要に似た少斯く双の髪の張れる結びやうなれば仰向に寝る外は右へも左へも傾ぶかれすいと窮屈なるべし是れ既婚の婦人の風俗なるが處女は髪を編みて後に垂るのみ其他に異なる節なし耳には皆耳環あり荒原帳幕の中に在りて馬矢の烟に煤け垢れ果てゝも湯に入らざれば一見して孰れか其男たり其女たるを知る能はず其格は極めて強壯に見ゆとなり其容色想ふべし

○音樂 嚮導の蒙古人なま馬の上聲高らかに歌ひつゝ馬の足並に合する節いとをかしく我追分節に似通ひ音調は流石に悲壯なりと云ふ彼等が祖先の勇猛は總に俚歌の中に残れるにや游牧人種は皆音樂を好みりと聞けども斜陽芳草の下牧笛を牛背に弄ぶをだに聞かず帳中幕壁絶てて樂器を掛けしをも見ず只二三月餘の旅路のうち嘗て一帳幕に入りて粗造なる一樂器あるを見主人に請ふて彈じ且つ歌はしめしとありしのみ其樂器は胡弓の類にして其端は馬首を刻めりと云ふ土地相應の樂器とや云はん

○家族 蒙古の俗長者を貴び所謂長幼序ある者の如きは美風と謂ふべし去れば親の子に對するも甚だ嚴ならず子の親に事ふるや從順にして言葉は背くことなを希にして互に聲高に叱り罵るを聞かず夫婦は支那人に比して婦人の位最高したとへば夜間婦人は寢臺の上に臥し夫は寢臺の下なる破駝毛布の上に寝ぬるが如きこと多し同じ帳中に生れ父子兄弟夫婦皆終身雜居なれば其情相狎れてや男女嫉妬の念薄きに似たり去れば兄弟三人同妻の家族を見しともありと云ふ道に蠻俗なり斯く男女一帳幕の中に雜居して帳中の事會て憚る所なきより少年兒童なんぞ淫猥の事を解すると早く其口にする所耳を掩はまはしき事多しと也

○社交 四隣部落の相去ること甚遠く一部落の帳幕七八點の人は殆んど生死を同じくし苦樂を與にすること一家人の如く且つ一部落の群畜を放牧するにも毎幕代るく看守して共有財産の如きものなれば其交情自ら親密なり彼等は游牧肉を食ふの外に人間復た快樂あるを知らず快樂を知らざるが故に世事の煩擾をも知らず蒙昧無智にして慾望希圖する所限あるが故に平原荒野の中に在りて巻帳敗幕の中に坐しつゝ照々として世を面白う喜し復た人生懊惱の事あるを知らざる者の如し土各風を異にし地各俗を殊にして一縣一郡猶且習慣の同じからざるが如く部落相去ること遠きより各部落皆風習を殊にし或は親切或は不親切皆相同からざりと云ふ

○喇麻 喇麻は佛教の一派にして而して西藏に起りて蒙古に行はれ其由て來る所久し今や番に宗教の事のみならず文學教育醫療の事に至るまで其權皆喇麻僧の手に歸し勢威甚猖狂なり蒙古人蒙昧字を識らず而して獨り字を識る者は喇麻僧もれば子弟の書を讀まんとする者皆之に師事す茫々たる蒙古の野醫藥を求めんに所なく而して喇麻は西藏の藥方に通ずるより病む者皆就て草根木皮を乞ひて之を服す其藥は皆西藏より來る者往々効あり庫倫は蒙古第一の大都會にし

て露商の此に居る者男女老幼凡一百人而して一歐醫なし此をもて露人も亦病めば則喇麻に請うて之を療す喇麻僧中二人醫を善する者あり草根木皮能く疾病を治すと云ふ去れば喇麻の勢力は全蒙古に震ひて神の如く佛の如し勢力の在所即ち弊害の伏する所にして之が爲に生ずる弊害亦一ならずとかや
 其他蒙古の風俗記すべき事多し中佐の鞭影を寫すに方り次第描出以て細大遺さるべし讀者先づ其大略を知りて而して後蒙古の紀行を讀まば思半に過さん但冠婚葬祭の事申佐の旅行中未だ一たびも見ず書中の記する所を見土人の語る所を聞きし事なきに非ざりけるも其事實を誤らんことを恐れて語らず故に略す

病者乞藥

十月七日薩克を發し東南に向て山を上り山上遙に一大湖を見る即ち是れ都爾根諾爾なり諾爾は蒙古語にして猶湖の如し又一高山の下を行く山上雪あり過る所水草も富み水邊矮樹あり行くこと十餘里日爾噶朗都に至る馬を駐めて小憩す蒙古人群集して種々の談話を試みけれども通せず彼の蒙古の一嚮導支那語に通ずと稱せしも好不好を解するに過ぎざれば其舌も亦多く用ゆ可らず時に一蒙古人幕内に入りて中佐に揖す年の頃二十四五顔色蒼白身に疾める者の如く何や

らん嚮導と語り嚮導又其意を中佐に通せんとすれども言語通せず彼の病夫は堪兼ねけん面をしがめて陰部を指させば蒙古嚮導不好々々と云ふ扱は麻病に悩めるか荒原平野の中去て醫藥を求めんやうなく來りて藥石を乞ふなるべしと悟りければも一片の砂糖を取出し湯にて飲むべしと教へて授けけるに彼れ痛く打喜びて立去りけり哀とや云はん既にして東に向ひて山を下り馳すること數里帳幕遠からず二時ばかりにして達すべしと聞きけるも日將に沒せんとして猶部落の所在を知らず一小嶺を踏えて細流を得其傍火を燒きし跡いくつもあり導者驚きて曰昨日此に帳幕ありしが思ふに今日他に移り去りけんどて茫然たり詮方なければ又も溪間を行き日已に暮れて哈爾干那に至る行程五十一露里なり此は果して今日移り來りし者ありけり此まで部落に達せし時馬に草を與へんとするに帳幕附近の草は皆牧畜に食荒されて遠く幕外二三露里の外に水草を求めざる可らず部落より部落に至る嚮導は氣心知れねば馬を任されざるより常に自ら馬を率ひて看守しけるが今日ハ幕を移せしばかりの地なれば幕畔猶草あり遠く去て馬を放するの勞なく稍暇をも得て幕に入り休憩して後小冊を取出で、滿洲賦涉の里程日數なんど調査し線を引きて要を録しなせしけるに蒙古人集り顧みて怪

評に堪へざる者の如くなり此の日の嚮導は十一二の少年なりけるが善く騎馬して山阪を上下すること平地を行くが如くなりけり

漠外隊商

翌八日早天幕を出で、東に行く地勢漸く低く砂磧路亦く馬蹄尤困しむ行くこと三十露里にして都爾根諾爾に至る此の部落直に湖水の南岸に臨めり湖は前日遙に望む所の者漠北蒙古大湖水の一なり喀喇烏斯湖の海面を抜くこと三千六百四十尺にして都爾根湖は三千七百七十尺喀喇烏斯湖の水此の湖に注ぐ其形亦相似て東西は狭く南北は長く南岸より望めば水天と連り砂を際なし此の日風あり波濤岸を打ち洶涌海の如し湖畔一帶砂磧相連り絶えて樹木なく亦良草に乏しく部落稀跡喀喇烏斯湖に比すれば遼索尤甚し湖北大約直徑百露里の地に又一湖水あり吃爾噶子諾爾と云ふ喀都二湖の水又此の湖に落つと云ふ此の三湖は之を西にして亞爾泰國境の諸山に發し之を東にして烏里雅蘇台城北の諸山に源する衆流群溪の會注する所にして漠北蒙古水域の尤大なる者吃爾噶子諾爾の水は復た注ぐ所なく滙然湖と成れる者なり湖南部落の地氣候稍暖に正午寒暖計を檢せしに列氏十三度に上り砂上の草間に蚊を見けり又も馬に上り湖東に連れ

る山嶺の中に入る山は皆流砂一滴の水なく一株の樹なし風あれば則飛砂天に漲りて漠然地を掩ひ行旅前む能はずと云ふ此日幸に風なかりけれども峻嶺を上下する殊に馬蹄深く砂中に没して疾驅す可らず時に數群の駱駝隊を成して來る者に遇ふ駱駝三四十頭一群を成し一十人ばかり或は騎馬し或は駝背に在り是れ所謂蒙古の隊商にして西より東より縱橫跋涉蒙古内地に行商する者幕中の家具什器等皆隊商の交易する所ありと予行くこと又三十露里午後六時十五分巴哈諾爾に至る亦水草に乏しくして馬に食はしむるを得ず馬疲るゝこと甚しかりけり翌九日砂山を上下するもの三たび砂上往々草あり惜むらくは水なし山を下りて水を得小憩乃發す又砂磧の中を行きて午後七時波克部落に至る行程六十五露里暮時水あり惜むらくは草なし

困于砂磧

次日河流の左岸を行くこと數里水を渡らざる可らず此の河の源を烏里雅蘇台城北の諸山に發し群流を合して遂に都爾根湖水と與に吃爾噶子湖に注ぐ實に漠北の一大河と爲す河底皆細砂水分れて數條と爲る其最深者殆んど騎渡す可らず前岸帳幕二三あり一蒙古人駱駝を率ひて立ちけるを中佐嚮導をしてさし招

きて渡頭を問はしめければ彼れ駝背に騎して左岸に至り導いて淺處を渡らしむ
 露銀貨五哥を與へて去る右岸の丘陵亦皆細砂往々矮樹の紛披するを見るのみ
 行きて砂山の下なる一部落に達して小憩亦水草に乏しく馬を飽かしむる能はず
 又行く數里草を得て馬を駐む時にブリエヌナヤの一駄馬平生は善く食ひけるに
 今日草を口にせず首を伸し後足を擧げて頻に腹を打ちけるが果は腹痛に堪へ
 兼ねけん忽ち地上に打臥しけり因て鞭ちて起たしめ負ふ所の蕪麥は更に亞爾泰
 にぞつけゝる此の馬腹は痛めども群を離るゝに忍びざりけん遂はねども隨ひ來
 けり曠原砂丘を踰ゆる午後六時行くこと四十四露里にして巴噶的斯に至る病馬纒
 に幕外に達して又も地上に打倒れ其狀いと哀なりければ破駝毛布を借りて打被
 せけれども腹痛みて苦しさに堪へで蹴飛して被らず中佐藥を與へんにも無かり
 ければ虎列刺地方通過の時に求めし阿片劑の小壘を取出し試みに數滴を小口に
 移して服せしめけるが馬は煩悶に堪へず地上に展轉して死なんと欲する者の如
 し是れ砂磧を渉る者數日水草に乏しかりしと此の馬ブリエヌナヤの平地に産し
 て山阪に慣れざるに因りて斯くは疲勞を極めしものなり中佐例に因りて馬を
 幕外の草野に引きゆかんとするを見て病馬も亦起んとして又仆れけり憐むべし

此の夜大風作り怒號雷の如し彼の病馬は必定今宵は起たじと思ひて涙を吞
 みて首を撫でつゝ慰め且つ訣れて後眠に就きけるが夜半馬の嘶く聲聞ゆるに起
 出で、見れば彼の馬病やおこたりけん幕外に起てり嚮導を起して水草を與へけ
 れば喜びて食ひけり彼の阿片劑の効なりけんかし次日猶風あり砂飛んで天暗く
 寒威更に甚しく氣燥にして唇 裂け呼吸又迫りける嶺を踰ゆる者三たび四山
 皆砂磧遠く連り水草を得可らず嶺上遙に烏里雅蘇台の方を望めば群山皆雪を
 戴きけり此の日は病馬の爲に徐行して午後五時伊厄的斯部落に投宿す行程二十
 一露里なり部落草あれども水なく終夜馬に飲ふ能はざりけり次日又砂磧を行く
 こと數里一井を得て小憩し又砂丘を上下して行くこと數露里良艸を得ければ馬
 を駐めて飽くまで食はしめ故國へ土産にとて草數莖を摘み河溪を下だりて行く
 前面の山を望めば前日見て以て雪と爲せしもの雪にはあらで白砂の嶺に
 ぞありける午後五時一部落を得波爾保と云ふ此の日行程四十五露里幕外艸なく
 馬を率ひて草を求むる者數露里

入定邊城

翌十月十三日八時半發程路は常に河流の右岸に在り河岸樹木あり水草に富みて

帳幕處々に散點せり一部落に小憩して又河岸を行く兩岸山あり左右相迫り石礫磊々たり溪澗きんとする處に至りて遙に一族の人烟を望む是れ烏里雅蘇台城外の市塵なり中佐此の山間に入りて始めて知る前日此の嶺一帯を望みて雪と見しも亦是一昨日砂と見しも亦是なるを山上風甚しく雪を巻き砂を飛ばし砂雪相交りて紛々山に満ちけり上加米諾哥羅斯科の馬又疲困進まず嚮導率ゐてやうく市に入りしは午後六時なり此の日行程五十露里初め科布多を出るや露商アサノフ氏烏里雅蘇台の露商フセフ氏に添書しければ先づフセフ氏を訪ひけるが露商此の地に在る者毎年露曆四五月に來りて十月一日比斯克に歸るを例と爲し中佐の到着せし日即ち露曆十月一日なりけるもフセフ氏幸に荷造の爲に日を費していまだ歸途に上らざりけるより其家に投宿するを得けり其家多く枯草を畜へ此地又燕麥を産するをもて馬は數日の勞と飢渴とを醫することを得つ去れども彼の上加米諾哥羅斯科の病馬は遂に起つべくも見ぬざりけり

將軍駐節

烏里雅蘇台は海面を抜くこと五千四百尺科布多の東四百二十九露里我百十四里の地に在り道路は四通八達し西は直に科布多に至るべく西北は多摩斯科州の比

斯克に達すべく北は唐努烏梁海蒙古を経て悉比利に出づべし此の道數條あり其一を庫蘇古爾湖岸に出で、義爾克斯科に出るの道と爲す此の湖は海を抜くこと五千五百尺南北の長さ百二十露里漠北第一の大湖なりさて又東は直に庫倫に至るべく南は烏魯木齊、安西、甘肅等に通すべく西南は伊犁、塔爾巴哈台に至るべく東南は直隸、張家口に出づべし帳家口の道を亞爾泰軍台と云ふ清朝の初め準噶爾征討の役兵馬糧食を轉運せんが爲に設けしもの毎台今猶馬若干を備ふ此の道及び喀爾喀の北道を除くの外は沿道部落稀疎行旅皆自から糧食帳幕を駱駝に駄して携へざる可らず北方悉比利の路は冬期冰雪道を塞ぎて行く可らずと云ふ此の地山間に在りて險要に非ずと雖も道路四通八達交通往來の衝に居る如此きをもて清朝城を此に築き定邊左副將軍をして節を駐りて以て守らしむ市東川あり橋を渡りて行くこと二露里許木を編むこと柵の如く以て障壁を成す者を定邊城と爲す規模太だ小唯一廓を成すのみ防禦に便ならず定邊左副將軍は喀爾喀蒙古四大部の兵馬を總統し札薩克圖汗、三音諾顏兩部の政務を兼理す土謝圖汗、車臣汗兩部の政務は庫倫辦事大臣の兼理する所なり將軍の部下に蒙古兵百六十人あり内九十六人は常に此の地に在り其他毎年若しくは毎期交代す直隸宣化府山西大同府

四通八達之
要地。殆無
兵備。

氣候可人

氣候は寒熱の變甚しからず冬期尤寒きは列氏零下廿五度夏期夜間冷涼往々
裘を着るることありと云ふ山間峡谷水草に富み又樹木あり毎月皆木を編みて
壁を成せり支那人烏里雅蘇台河岸の地を耕して大小麥及び燕麥を播種す但野菜
を生ぜずと云

買賣不好

城西一簇の人家を市廛と爲す狭き道路一條あるのみ其長さ僅に四百メートル計
路傍の市店皆雜貨を陳列す皆支那人にして多くは山東より來る者蒙古人は市外
帳幕の中に栖息して家居を好まず家は皆支那風にして露商の一店も亦其中に在
り露商は比斯克の人四五人の合資に成る其内二人は妻女を携へければ中佐久振
に歐洲婦人の款待に遇ふて旅愁を慰めける露人の商店陳する所の貨物ハ布匹
尤多く其餘は烟草鐵鍋木梳等蒙古人日用の雜貨なり中佐市上を散歩し支那人
の店に入りて屢之を語りけるが支那人皆曰く蒙古人沒有銀子買賣不好と蒙古
人歳を遂うて益を費しく生氣日に消すること誠其言の如しとなり露商の交易
して以て比斯克に輸す者は皆獸皮にして其買ふや賤しく其賣るや貴く去て歐洲
市場に入るに及びては暴騰尤甚し此の地交易は夏に在り冬に至れば蒙古人
來往杜絶す是れ露商の五月來りて十月去る所以なり此の地より蘇阿克を経て比
斯克に至る大約一千三百露里沿道部落稀薄なるより自ら駱駝を備へ帳幕を携
へざる可らず駱駝日に行くこと二十五露里に過す故に其行四十餘日を費すどか
や

更理旅裝

調査の便を圖りて科布多より支那語に通ずる蒙古の一人を携へつるも彼人多く支那語を解せず且つ從者の助勢あるより部落に入りても土人忌憚する所あり輒ち其真を見るを得ず却て不便なりければ如かず自ら蒙古語を習ひて單身深く入り親しく暗近く接して蒙古人の實情を探らんにはと思ひ定め彼の蒙古舌人を科布多に還しけり烏里雅蘇台より庫倫に向ふ道は亞爾泰軍台に非ず地圖にも記せざる道路なり水草の有無固より知る可らざれば燕麥を準備せんことを要す之を経験に徴し里程日數を測算するに少くも燕麥十一布度を携へざる可らず十一布度は駄馬二頭或は三頭に非ざれば駄するを得ず而して上加米諾哥羅斯科の馬疲る、甚しく必ず更に二新馬を買はざる可らざるより之を露商ワセネフ氏に謀りけるに氏曰く我に一健馬あり乞ふ疲馬と交易せんと中佐強めて清銀七兩と疲馬とを與へて之を得此の馬蒙古の産五才駒にして興安亞爾泰に比すれば小なり既に一馬を得尙一馬を要すワセネフ氏曰く此より以東道路尤悪しく殆んど分明ならず一人能く新馬二頭舊馬三頭を御せんこと太だ困難なり予れ請ふ定邊左副將軍に面し每部落一丁一馬を出さしめん復た馬を買ふを用ゐずとて去て將軍

を訪ふ立談の下車輒ち決せず面晤數回二日を閉みして纔に其一諾を得けり是を以て中佐馬を烏里雅蘇台に駐むる者二日燕麥十一布度の價清銀十一兩露貨に換算すれば大約三十六兩なり銀塊亦乏し乃ちワセネフ氏に請うて露貨百兩を清銀と交換す此の地支那の鐵工あり支那風の蹄鐵の事を知りければ助手と爲して亞爾泰興安二馬の蹄鐵を代ゆ是に於て旅裝漸く成りけり

侮慢交至

明くれば十月十六日なり一蒙古人定邊左副將軍の一札を帯びて至る其札蒙古字を以て之を書す士謝圖汗の出す所沿道の各部落に命じて一丁一馬を出さしむる者なり此の日午後二時を以て馬に上るワセネフ氏贈るに麵包砂糖菓子等を以し且つ騎して數露里の外に送る川を渡りて溪に入り溪尤狭き處より右折して山を上る山に草木あり時に日將に没せんとす馬丁の乘馬疲勞進まず命じて鞭たしむるも蹙馬行く能はず中佐先づ山を上りて顧みれば馬丁を見ず待つ者少時駄馬に乗りて至る曰く我馬山腹に斃れたりと烏里雅蘇台近傍草太だ乏し蒙古人賣にして燕麥を買ふ能はざるより其馬飢えて骨立せざる者稀なりけるが果して途上に斃るゝものさへありけり日已に没し星を戴きて雪を踏み岩石の間を行きて山

二百二十四
 版の一部落に達す之を徳爾克爾部落と云ふ帳幕小く且不潔なり未だ蒙古語にも慣れざる中佐は今宵始めて嚮導もなく通辯もなく單身帳幕中に入り怪しげなる言葉もて投宿を乞ひけり斯る野蠻人の常として中佐が孤影榮々援助なきを見て復た忌憚する所なく群集嘲笑侮慢交至り烏里雅蘇台に達せしまでとは待遇一變して別天地に入るもの如くなりけり此迄は彼の蒙古の舌人擁護する所ありければなり去れども蒙古人の眞面目は今日よりこゝろ知らるれと思ひて如何ならん罵詈雑言も忍びけり幕中一露商あり十五の時より此の邊に在り賣買に従事し今此處に支店を出せるものなりけるが蠻地の習俗に染みてや此の男はへ禮義をも知らざりけり此の夜はやうく馬矢火を燒ける土間を借り外套を着しま、鞍を枕にして一夜をぞ明しける眠に就かんとして銀塊を土人に與へ夜中四馬の看守を頼み明日早天馬を此處にとやうに命じければ其意を解しけん嘲み笑へるが如く歸きて去りけり翌十七日午前八時過ぎて立出づ山を踏えて左折し溪水に沿うて上る愈々行きて愈々高し山に樹木あり溪流潺湲草あり牧すべし此の間谿谷縦横孰れか其進路たるを知らず馬丁に導かれて行くこと二十五露里一部落を得哈魯斯魯特と云ふ投する所の帳幕兄弟三人同居す伯仲剃髮し季は蓄髮せり伯は

妻あり此の夜幕を出で、馬を看守し仲は兄の妻と同衾して臥し嬉戯憚らざりけり蠻俗悪むべし初め中佐の幕に入るや數人群集し復た喫煙草交換の禮をも執らず指笑して以て俄魯斯と爲す一人進んで問うて曰く子ハ何汗かと中佐答へて曰く日本汗と彼等相顧みて首を傾ふけ皆曰く解せずと彼等の頭腦には支那と魯西亞あるのみ其他の天地を知らざる怪しむに足るなきのみ彼等支那帝を稱して滿洲汗と云ひ露西亞帝を稱して俄魯斯汗と云ひ其地位勢力蒙古の諸汗と同じと爲すとぞ因に云く蒙古人は支那人を稱してヘタツテと云ひ露人は支那を稱してキタイと云ふキタイの蓋し蒙古語の轉訛か時に帳幕の主人中佐が烏里雅蘇台にて得し馬を見て曰く此の馬弱し遠行に堪へざらん我に健馬あり之と交換せんと中佐其馬を見るに頗る良し乃ち約して曰く三馬相易へて且つ與ふるに清銀三兩を以せんと明朝天秤を取りて銀塊を量る彼れ滿囊中の銀を見て約を變じて曰く五兩に非ざれば不可と中佐怒りて遂に交換せざりけり

喇嘛勢焰

此夜中佐蕭然として幕隅に在り一喇嘛僧來りて幕中に宿す主人惶然出で、迎へ之を上座赤蒲團の上に延き茶を捧げ肉を爇し優遇甚する僧傲然として且飲み且

食ひ明朝部落の馬を出さしめ、一錢の謝金をも投せずして去る、其勢力の熾んなる如しとなり

鐵中録々

翌十八日午前九時發程山を越ゆる者三、其尤高き者は海面を抜くこと殆んど九千餘尺所々雪あり冷氣衣に透り正午列氏七度に下れり行くこと二十露里山下一部落あり那里と云ふ海面を抜くこと七千五百尺なり時に午後二時日猶高きも前部落遠きをもて此に宿す帳幕の主人は剃髮の一老翁にして能く蒙古の字を書し書を讀む其子蓄髮年猶壯し前夜哈魯斯魯特部落に於て一見せし者既に歸りて中佐の至るを待つもの久しく至れば則之を台幕に延きけり台幕は每部落に一あり特に喇嘛官吏の爲に設くる者平日は人其中に住せず是を以て幕中清潔閑靜なり壯夫中佐の爲に羊を割きて鮮肉を進め待遇禮あり老翁も亦來りて珍客に侍す中佐が露人に非ざるを知り問うて曰俄魯斯滿洲可か否かと中佐答へて曰く今日は可なりと曰く明日は答へて曰く知らずと老人喜ぶ色あり拇指を擧げて中佐に謂て曰く諸君猶閣下の如し善哉と蓋し中佐が今日は可し明日は知らずと云へるを聞きて其真情を喜べるなるべし中佐蒙古に入りて以來此の夜の待遇の

如きは未だ嘗て有らざりきと云ふ翁父子の如きは其れ鐵中の録々たる者か

馬斃于途

次日午前九時に幕を出て溪水に沿うて行き直に一峻嶺を踰ゆる嶺を下りて一部落を得的爾部落と云ふ帳幕山腹に在り部落長の幕を訪ひけるに直に馬を呼びて鞍を命じ其長子年十八なる者をして送らしめんとす時に既に午後三時なり中佐問ふて曰く部落遠近如何答へて曰遠し去れども山おしと山だになくば今より一鞭して行かれぬ事あらじとて馬を叱して山を下れば直角に一大溪に遇ひ左折溪水に沿うて上り行くこと大約二十四露里溪水を渡る馬疲れ且つ喘ぎて飲まんことを欲す鞭ちて之を驅り漸く前岸に上り行くこと未だ數歩ならずしてブリチスナヤの一馬鼻口粘液を出し呼吸尤迫り困憊疲勞忽ち地上に倒る中佐驚きて馬を下り鞭ちて疲馬を起たしめ其負ふ所の燕麥を卸すや馬は眼々として行きて又倒れ手足硬張殆ど死す此の馬稍老いたりけるより中佐常に乃爺と呼び馬も亦其意を解しけるが今其遂に起たざるを見て驚き且つ悲しみつ、馳寄りて馬首を撫し乃爺を々と呼びけるに其聲耳に通じけん殆んど死したる馬忽ち鬣を振りて目を睜かりつ、遂に死しけり時に午後六時半日既に没し四顧冥然たり中佐固より熱血滿

腔の武人、尤馬を愛し、深く荒陬に入りて殆んど死生を託す而して其馬或は病み或は疲れて屢之と訣し、今乃爺も亦中佐を荒野に棄つ、漠烟慘澹、朔風悽愴、曷ぞ成傷に堪へん殊に惆悵を増し、悄然去る能はざる者、久しかりけり遂に涙を呑んで馳す日落ちて天暗く冷氣漸く加はる此の日午前九時は零下九度正午は七度暮に及んで零下七八度にもや及びけん溪水氷結して玲瓏鏡の如く地滑にして騎行に便ならず星を見て氷を踏み行くこと數里午後十時半哈布多加烏拉に至り帳幕中にす投じける帳幕の主人中佐の馬を失ひしを聞き其不幸を喜びて馬を賣りて價を食らんと欲す中佐問うて曰く此の地良馬一頭の價幾何ぞと主人曰く二十兩中佐大聲一喝して曰く汝子を欺かんとするか予れ當に一書を定邊左副將軍に致して之を訴ふべしと彼れ惶恐且つ謝して曰く十兩にして可なりと中佐曰く明朝群馬を相して其一を買はんのみと翌朝一馬を擇び主人に謂て曰く此の馬八兩乃ち可ならん主人曰諾と乃ち銀塊を囊に取りて之を量る主人其銀多きを見て曰く九兩を與へよと中佐怒りて將に銀を收めんとす主人曰く八兩にて可なりと因て一馬を此に買ひけり

犬捕穴鼠

廿日午前十時幕を出づ昨夜幕に入りしこと遅く人馬俱に疲れて遠く草を幕外に求むる能はず今朝早起馬を牽きて草を求めいたく時刻を移しければ斯く日高きし昇りてぞ立出ける此の日部落より出せし人夫は婦人にして馬に乗り犬を牽きけり溪に沿うて上り山を踏ぬて野に出づ山は海面を抜くこと八千五百尺野には草少なく砂多し砂磧の上處々に小穴あり是れ穴鼠の居なり穴鼠の大きき尋常の鼠と異ならず其の穴を穿つこと太だ巧に穴中に階あり樓の如く中に土柱を作して障壁を爲し以て群鼠分居の處と爲す其結構の密なる殆んど人工を壓す其穴口二寸許以て出入すべし各穴相距る數弓同族往來以て樂む往來の道分明に跡を印し縦横相通すること殆んど輪痕の如し人馬偶至り穴鼠倉皇道を誤れば忽ち穴口を失ひて道上に徬徨す然れども其足尤疾く捕捉す可らず中佐途上屢之を見ざるを得其形米國の荒原狗に似たりと云ふ蒙古の犬好んで穴鼠を食ひ又巧に之を捕ふ此の日途上又屢穴鼠を見る婦人牽く所の犬馳逐捕捉旅途の奇觀なりけり其之を捕ふるや或は穴鼠の道に迷ひて徬徨するを逐ひ或は草間岩側に潜伏して其將に穴口に入らんとするを待ち一躍して之を掴み牙を鳴らして之を食ふとなり山を下れば野草萎々近來見ること稀なる所なりけり午後四時吟波爾部落に至

穴鼠巧技
殆歴人工

る吟布多烏拉を距る二十五露里なり帳幕ハ溪東山腹に在り主人中佐を台幕に延き羊肉を煮之を饗し此の邊にはいと貴き小麦粉を少許取出で、其子供等をして練りて小さき團子を作らしめ其を肉汁の中に入れて進めけるが垢れ果てたる手もて麥粉を揉みつ練りつ白き粉は鼠色に變りて折角の馳走も胸わるかりけり主人の子供三四人付添ひて給仕をもなし馬矢火を燒きなせしければ中佐露商の贈れりし菓子麵包を取出して分け與へ我身も食ひけるに早や部落中の者共聞きつけて老幼訪ひ來り幕中に群集して我にも饅頭を與へよ我にもと乞ふこと切なるより皆分け與へて囊中の半は一夜に盡きけり夜深けて五六騎の得物を打振りて幕外を馳せ廻るさま只事ならぬ何事ぞと問へば隣部落の犬亂入して或は牧羊を噛殺し或は小兒を傷けしより撲殺さんどて搜索するなりと答へける此の邊にて斯る事共はいと珍らしからずとなり彼の蒙古犬人を食ひ獸を噛む兇猛怖るべし

破氷飲馬

翌廿一日午前八時馬に上り山を踏めて溪流を得昨夜の部落水乏しく馬に飲ふ能はざりければ水を與へんとて流に臨めば堅氷一帯流水を見ず乃ち鐵鞭を揮ひて

氷を搥き氷上に穴を穿ち砂石を撒布して以て馬足に便にし一馬毎に穴に臨みて飲ましむ馬渴する甚しく馳せて氷上に至り更に足を以て氷を破りて快飲し殆んど氷上に轉蹶するを覺ゆざりけり東又向て行き遂に亞爾分布特達巴を踏ゆ達巴ハ海面を抜くこと八千五百尺地已に高きをもて之を望むに一丘阜の如し此の地水草に富み牧畜尤盛なり溪水悉皆結氷し冰面鏡の如く路滑にして蹶かんと欲す行くこと三十露里雜克部落に投す此の地高さ七千三百尺次日溪に沿うて左折し嶺を踏ゆる者四其最 高き者を烏鎮達巴と云ふ海面を抜くこと八千二百尺蒙古人の愚言ふに足らざるも 甚しきは燕麥を馬につくる道だに知らず荷の馬腹に赤り落ちんとするを付直しなせして途中時を費すと屢々なりけるが是日も之が爲に道抄取らず行くこと三十露里にして午後六時半伊拉特に投じけり此處は海面より七千尺なり

二大水域

二十三日午前九時發程左折山を踏ゆ水を渡り貝他利克河溪に抵る左岸松樹數株を見る漠北の老幹以て目を怡ばすに足る行くこと數里川を渡りて左折一高山を踏ゆ海面を抜くこと八千五百尺山下は 則 一大高原此の山脈ハ是れ漠北蒙古の

二大水城を分つ所以の者二大水城とい曰く大湖水城曰く貝加爾湖水城是れなり此の地烏蘭達巴以東の最高所にして此處を下りて悉比利國境貝加爾湖に向うに隨ひ地勢漸く低し亞爾泰山東過る所の地皆萬里の山嶺其高さは概皆八九千尺部落の地も亦已に六七千尺を下らず是をもて雨雪極めて少く空氣乾燥地形は北に高山を負ひ南に沙漠を控ゆるをもて其氣候亞爾泰山西に比して温暖意外に出で十月の末に及びて猶列氏零下十度を下らざりけるが此の一帶の分水嶺を跨ゆるや地勢氣候全然一變し地は漸く水草に富み天は漸く寒冷を増しけり此の日正午列氏八度日暮烏蘭幾喇部落に投す伊拉特を距ること三十露里

腸胃疼痛

此の夜車臣汗部の一官吏公事を以て烏里雅蘇台に至る者帳中に同宿す官吏傲然禮を知らず既にして喇麻の一行庫倫に赴く者も亦至る部落の土人彼等を台幕に延き深夜羊を屠りて之を饗し雜沓喧騒安眠する能はざりけり次日も亦官吏喇麻を饗し且つ送らんとて部落を擧げて奔走周旋して復た幕中に中佐あるを忘れし者の如く茶をも進めず馬をも牽來らず中佐命ずる所あれば其蒙古語に慣れざるを嘲り嗤笑止まず中佐遂に纜に一丁一馬を得て將に幕を出去らんとす主人始

めて心付きて銀片やはしかりけん強めて再び之を幕中に延き進むるに冷茶を以てす中佐叱して曰誰か喫餘の茶を喫する者ぞ主人逡巡して更に牛乳餅を進む亦皆を決して一喝して曰く敢て殘餘の物を以て手に食はしめんとするか主人惶恐出る所を知らず中佐驟然幕を出で馬に上り去る東北に向て行き直に二山を踰ゆ一は曰く班該達巴一は曰く班米爾達巴其高さは皆大約八千七八百尺嶺上積石堆然高さは二三間棒の末に黄紅の布片を挿みたるをいくつも打棄て鬣毛其傍に散亂せり時に車臣汗下の二蒙官烏里雅蘇台より歸る者鞭を擧げて至り嶺上に達するや馬を駐めて鬣毛數莖を剪り積石に向て何やらん大喝一聲して鬣毛を空中に投じ將に去らんとして中佐が馬を駐めて小立其聲に倣はざるを見て之を怪しみ鞍に據りて顧みて謂て曰く汝此處を知らざる乎と蓋し彼の爲す所道途の平安を祈る所以にや嶺を踰ゆれば則一大高原地已に高きこと八千餘尺行くこと數里峻坂を下ること三百餘尺一溪水を得溪水東北に向て流れ水草萎々尤牧畜に適し幾簇の帳幕水濱に散在せり中佐此の朝茶をも飲まず肉をも食はず山坂を奔馳して飢渴交至りけるも衰ひ所の麵包已に盡きて囊中僅に一塊の砂糖を餘すのみ乃ち砂糖を取りて之を舂りつゝ行き纜に飢を醫して又行くこと數里腸胃をや

損じけん頭痛甚し午後一部落を得て馬を下りて暮を訪ひ茶と牛乳餅とを乞ひて之を食ひ銀片を興へて之を謝す時に部落中の男子皆牧場に在りて幕内の人は皆婦女なり外國人の部落に入りしを聞きて群集來觀つゝ其牛乳餅と銀片と交易せしを見るや衆皆幕に歸り牛乳餅を椀に盛りて携へ來り銀片を得んことを乞ふ乃ち皆與ふるに小銀片を以し餅を得て暮を出で馬上之を人夫にも分ち與へて食ひ盡しけるは頭痛猶止まず食する所の牛乳餅皆嘔吐し目眩めき耳鳴り殆んど昏倒せんと欲す午後四時加羅特部落に達す行程三十五露里幕隅に打臥し汗巾を冷水に浸して頭を冷すも猶岑々として痛みけり斯る折に投宿せし帳幕の老主婦が蒙古人にも似ていと親切にいたはりて羊肉汁に麥粉なき入れ進めけるこそ幸なりけれ

途遇喇麻

廿五日午前十時幕を出で直に一溪流を渡る溪流岩石多く水未だ盡く氷結せず氷或は厚く或は薄し堅氷と思ひて馬蹄を立つれば薄氷碎裂馬蹄岩石に觸れて殆んど蹶かんとし若し一步を誤れば人馬水中に墜して傷かざらんことを欲するも得可らず危険尤甚し流を涉りて一丘を踰ゆ丘上は則高原平坦山脈其南北に連り南方の重巒鬱然として翠を積む者は則落葉松にして彼の分水嶺以南見るを得可らざる者水草多く牧畜に適し帳幕隱見し牛羊其間に出没す此の日途に喇麻の一行に遇ふ喇麻は台馬に跨り蒙古人二名之に隨ふ一馬には衣物を入れたる革囊を鞍につけ嚮導之を率ゐて進めり蒙古人は牧畜を業とするにも似て馬を保護する所以を知らず山をも阪をも顧ちて只走に走りて每部落繼ぎ代へく一日能く三台四台を過ぎて百露里ばかりを行くを常とす馬は每部落の間一時も休まずで斯く駈け續くるも左まで疲勞せずと云ふ是れ蒙古馬の強健天下に聞ゆる所以あるべし午後四時松摩特部落に投す行程二十七露里此の夜海面を抜くと七千尺

鼠輩横暴

此の夜投する所の帳幕不潔尤甚し蠻民男女幕内に群集し中佐を圍みて嘲笑罵辱し其携ふる所の衣物を手に取り名を問ひ價を問ひて群盲の器を評するが如く或の與へよと云ひ或は牛羊と交易せんと云ひ應答の煩に堪へず帳幕主人は剃髮して喇麻に歸依せし者念佛讀經福利を祈るにも似て殘忍無漸絶ゆる慈悲の心なく其子が殊勝にも茶を煖めて進めんとし鮮肉を煮て饗せんとするを彼れ却て侶

照河水に映じ風光尤佳なり遂に帳中に投ず此の日行程三十露里なり此地幕外
 水草多く復た遠く馬を牽くを用ひず幕中の夫妻年猶少し羊を屠りて鮮肉を饗す
 妻中佐に向ひ珊瑚珠ありやと問ひ珠玉の珊瑚に似たる者ありと云へば見せよと
 云ふ明日見せん其一を與ふべしと約しければ一入懸にもてあしけり此の夜一
 喇麻僧中佐の至るを聞き幕を訪ひて進み揖して曰く愚僧卿の爲に利益を禱らん
 請ふ少許の銀塊を與へよと中佐笑つて問うて曰く汝子が爲に利益を禱らば此の
 行果して平安なるを得んか曰く固より然りくとして堅く請うて去らず遂に銀塊
 を與へければ僧合掌念佛し且つ歸院の後當に謹んで福利を佛前に祈るべしとて
 出たりけり

佛院蓄娼

廿七日午前十時幕を出づ今日の人夫は少年二人あり所詮途中にて荷の付直しな
 んと間に合ふべくもなければ一人壯者を出し呉れよと乞へば部落の距離遠きが
 爲めに行かんやと云ふものなしとて部落長自ら隨ひげり塔米爾河を渡り楊柳樹間
 を過ぎて北の方道に一市街を見る家は皆木造にして中央一高閣あり之を問へば
 高閣は喇麻廟にして近傍家屋は僧侶徒弟の房十の七八商戸は一二に過ぎずと云

以讀經之
場爲賣淫
之地

は行くこと數里後に鞭を揚げて來る者あり至れば則昨夜幕内に相見し一少年
 なり少年廟を指さして中佐に向ひ彼の寺院に遊び玉へと勸む中佐一覽の暇なし
 と云へば少年彼處は當に讀經念佛の場たるのみならず實に娛樂の地なりと云ふ
 娛樂とは何事ぞと問へば扱も解らずやとて言ふに忍びざる手様して此の事ぞと
 云ふ猶更解らずと云へば馬を牽きし少年傍より道の壯年にして未だ人道を知
 らざるにやと嘲り且つ笑ひけり嗚呼喇麻の勢力熾んなんと與に弊賣百出して神
 聖なる寺院は娼閣酒樓と變り讀經の場を以て賣淫の地と爲す醜も亦甚しと云ふ
 べし彼の蒙古人長幼男女一幕に同居し猥褻の事を見聞して春を知ること尤早
 きより彼の少年の如きも亦之を口にして恥ぢずと云ふ喇麻の寺院僧房は蒙古の
 内地交通轉運の不便なるにも似て皆瓦を以て之を葺き木材を以て堂塔を築き朱
 金を以て柱棟を塗り規模壯麗外觀煌耀以て蠻人の信奉を買ふに足れりとぞ清朝
 蒙古の入寇を患へ其をして深く喇麻教の阱中に陥らしめ以て其心血を消し氣骨
 を耗す是を以て邊患絶に去りて而して藩屏恃むに足らず悉比利國境寂寥備なし
 彼の壯殿煌耀の喇麻廟は消耗衰弱の一紀念碑と做して觀る可きのみなりとかや
 既にして東に向つて行き溪水に沿うて下る山に落葉松多く水濱は芳草に富み帳

幕相望めり此の朝は寒暖計零下五度なりけるも正午天晴れ空暖に上りて七度に
至る途上駱駝隊商の庫倫に至る者と遇ふ荷は皆例の毛皮なり行くこと四十五露
里日將に没せんとする頃には鄂爾坤河を渡り午後五時摩哈爾部落に入る

蠻婦之贈

鄂爾坤河の漠北貝加爾湖水域に屬し色楞格河に會する六大河の一にして河西は
三音諾顏部に屬し河東は土謝圖汗部に屬す摩哈爾は河東第一部落なり海面を抜
くこと五千貳百尺部落の人心温順投ずる所の帳幕夫妻も亦善く之を待ち肉汁に
小麦粉を入れて羹し茶を煮て松實を進む小麦粉は漠北の太牢松實は蒙古唯一の
菓なりと云ふ翌くれば廿八日なり早起寒暖計を検すれば幕内は零下五度幕外は
零下十度其差五度のみ深夜火滅し風幕隙より入る時は其度相同じきを知るべし
將に發せんとす主婦中佐が昨夜喜びて松實を食ひしを思出で、や途上の用意に
とて一碗の松實を贈りければ中佐乃は薄荷劑一小壺を與へて之に報ひけり蒙古
の旅行中蒙古人より斯る珍物の贈を受けしは前後一人なりと云ふ

一喝辟易

東に向て溪間を行くこと凡そ十五露里左に一喇嘛寺あり左右山脈相連り野に芳

蒙古人之性
凌弱怖強

草多く地柔かにして騎行頗る便に帳幕隱見風光も亦佳く天氣晴朗極めて爽快を
覺ゆつ、馬を駐めて小憩し又一峻嶺を上る高さ六千五百餘尺山を下りて左折す
道左亦一大喇嘛廟あり僧房之を圍む皆木造なり最高處に岩窟を穿ちて一堂を構
ふ所謂内院なる者か壯麗觀る可し一水に遇うて氷上を渡り丘を上れば亦喇嘛廟
あり直に懸崖に臨む崖を下りて數條の溪水を徒涉し堅泥を踏みて行くこと數里
薩勒部落に達す投ずる所の帳幕不潔駝毛布土を掩ふに足らず外套をまとひて幕
隅に横臥し以て天明を待ちけり時に夜深けて犬大に吠ぬ既にして馬至る主人起
きて幕を開けば三土人入り來りて茶を命じ主人と何やら論争止まず一人中佐
を指さしつ、彼れは俄魯斯ならんとて散々に罵り無禮にも中佐の膝の上に腰打
掛けて亂暴を極めけり中佐今は堪ぬ兼ねて無禮者と一喝しつ、足を擧げて蹴飛
しつ憤然鐵鞭を取りて起ち眼を怒らして之に向ひければ彼れ逡巡辟易敢て仰ぎ
視す既にして立去りけり蒙古人の性他の弱きに乘じて暴を加ふるも我れ憤然勇
を示せば悚然震慄敢て害を加はずと云ふ蒙古旅行中斯る事共は數ふるに暇あら
ずとなん復た盡く紀せず

群蛙評天

廿九日山路に入る降積りし雪踏分れば草いと茂れり昨夜の部落草悪しかりければ少時馬を駐めて草を食ましめ又も水を渉り山を踏めてゆく溪間雪多く満目一白去れども深さは一尺に満たざりけり此の日天曇り風烈く正午列氏三度に下れり荷の付様あしく途申四度も付直しいたく時刻を移しければ六時間三十五露里を騎りて午後四時蘇比阿特部落に入りけり此處は海面を抜くこと五千尺なり夜間一喇麻僧鳥里雅蘇台より來りて幕中に同宿しけるが主人と與に中佐が胸に掛けたる勳章を見ていと訝かしげに打注視り何と云ふものぞ何の用にか立つなぞ問ひけり中佐此は云々の物にて此の獨乙汗の勳章此は白耳義汗の勳章なぞ一々指教しけるに彼等は固より井底の蛙天の廣さを知らず滿洲汗俄魯斯汗の外に復た衆汗あるを知らねば手を拍ちて打笑ひ日本汗と云ひては呵々獨乙汗と云ひては呵々呵々の聲は拍々の聲と相交りて輒然抱腹するさ始て荒誕無稽の大言を聞ける者の如くなりけり次日午前十時に立東東北東に向て行き山を踰ゆる者三雪は山野に滿ち一望望々たり地は水草に富み帳幕簇々道右の山に樹木を見る行くこと三十露里巴音烏拉部落に至る巴音烏拉は猶山岨と云はんが如し日猶高きも前部落の里程道路を詳にせざるより遂に此に投す帳幕頗る不潔老主婦

中佐の至るを見て喜びざる色あり火をも焼かねば茶をも進めず焮焮毛布なきより駝毛布を持來れど乞ひてやう／＼座を得けり既にして一老人幕中に入り來る老婦と晤語して去る其幕を出るや卒倒人事を辨せず土人環視して扶けんどもせず中佐走りて幕を出で扶起して雪を噴せしめさま／＼にいたはりければやうやう甦生しけるが老人の一言の禮をも言はずして立去りけり土人覺ぬすも聲を放ちて曰く嗚呼三音君よと三音猶善人と云んんが如し土人環視是れ義を知らず老人謝せずして而して去る是れ恩を知らず以て積俗を知るべし須臾にして主人歸り來る但見れば二日前薩勒部落に於て夜中佐の膝に腰打掛けし暴漢即ち是なり彼れ當時の勇氣にや辟易しけん前夜とは一變して待遇尤恭しく妻に命じて茶を進め鮮肉を爨しけり彼れ亦勳章を指して訝り問ふ中佐一々細に答へ且つ地球畧圖を畫き符を以て邦國を劃し以て之を示しけるに彼れ滿俄の外猶數多の汗あるを聞きて驚嘆措かず土人の入り來るものある毎に汝世に幾汗あるを知る乎なぞ得意に語り出で、地圖を示し其新智識を誇る者の如くなりけり

牝鷄司晨

三十一日午前九時東南々に向て行き左折して溪に沿ひつゝ東に馳する者數里又

東南々に轉じて一大溪間に出づ地大に開け水草離々道路平坦騎行始めて便なり此の日天晴れて風なし正午列氏十三度に上る行くこと四十露里午後三時半巴音鄂爾部落に達す巴音鄂爾は猶河涯と云はんが如し海面より五千尺なり此の夜台吉の幕に投ず時に一喇嘛僧部落を過ぐ台吉敬業を著て四品頂戴の官帽を戴き出でて幕外に迎へ自ら僧帽を捧げて之を幕内に延き禮を執ること甚恭し僧は猶數里を行かんとて間もなく出たりけり台吉は固より蒙古の貴冑なれども此の幕の小さく且つ不潔なること多く其比を見ず台吉中佐が俄魯斯汗に非ざるを聞き可憐に待遇さんとす時に其老婦外より歸り來り眉を蹙めて嗷嗷彼れ外人に對して何ぞ鄭重惻切なるを用ひんとて推止むるを台吉聽かず遂に夫婦喧嘩と爲りて彼是れ言争ふうち其三子も亦歸り來り老母を扶けて中佐を罵り且つ無禮を加へけり中佐此の部落の名を巴音鄂爾と云ふとは已に聞知りけれども試に台吉に問ふ中佐時に磁石をながめ居けるに台吉直に磁石の名をもて答へけり貴族猶且人を欺きて恬然たること如斯しとなり

始見胡樂

明くれば十一月二日なり午前九時東南々に向て行くこと數里一溪水に逢ふ水面

氷結して一目氷の厚薄水の深淺を知る可らず水涯を徜徉しつゝ鐵轡をもて氷を試み涉らんと欲するに馬怯れて進まず人夫先づ馬を乗入れしに氷破れて水中に陥りしも水幸に深からず馬に鞭ちて前岸に達しければ他皆之に隨ひて渉るを得けり雪を踏みて東北に行き一部落を得て小憩す時に幕壁に一樂器を見る前章記する所の胡弓是なり主人をして之を彈せしむ中佐音樂を聞かざる者五十一日漠北始て胡樂を聽きて稍必耳を怡ばしめて昨夜の不快をぞ慰めける蒙古の旅行六十餘日間樂器を見且つ其聲を聞きしは前後一回なりけり時に積雪四五寸馬蹄踏破山阪を馳驅す時に日已に没して月色雪に映し滿眸皎々景色尤佳なり月に乗じて騎行數里午後七時半拜爾汗部落に至る行程六十露里此地海面を抜くこと四千九百尺此の日天晴れ風なく氣候は正午三度朝夕零下數度

便秘太苦

二日午前九時馬に上り溪山の中を行くこと廿五露里烏蘭不少部落に投ず時に午後一時なり蒙古の地五穀なく葉菜なく唯肉と茶とあるのみ去れば中佐蒙古に入りてより以來穀菜以て稀通せしむること能はず且つ最初は肉の座に埋もれ馬矢火に煤けていと不潔なるより多く食ふを得ざりけるも慣れては食慾日に進み遂

に一日二回、一股肉を盡すに至りければ、大便秘結して、腸胃病を醸し、頭痛、岑々、頗る不快を覺ゆ。けれ、斯くは日高きも、此に投宿し、けり、我邦に在りては、都府は言ふ迄もなく、片田舎にても町あらん處には、賣藥あり、一劑を服せんには、悉くゆべき微恙なるも、蒙古の山中、醫なく、藥なく、喇麻僧の草根、木皮を得んとするに、此處より七十餘里を行かざる可らず、去れば、心地如何にあしくとも、只天命に是れ從ふの外なし。中佐は、此まで牛乳を飲めば、下痢する癖ありければ、せめて經驗によりて、自ら療治を試みんものと思ひ、牛乳を乞ひけるに、主人惜しみて、一椀の外、與へずいと、不快に堪へざりけり。此夜、風大に作る。

遙表祝意

明くれば十一月三日、我が天長節なり。早起、幕を出て、遙に東天の一方に向ひ、謹んで、天皇陛下の萬歳を祝し、奉りけり。天涯遠征の客、此の佳節に、遇ふて、心旌搖々、紫關に馳するを、覺ゆざりけり。

風雪滿地

夜來の暴風未だ止まず、大雪亦至り、風山谷に入りて、反響雷の如く、天地鳴動、砂塵雪に和して、一天黯澹、暮地冥蒙、殆んど咫尺を辨せず、斯くすまじき天氣なりければ、

人夫に出んと云ふ者なかりけるがやうく、人に勤められて、駄馬を牽きつゝ、隨ひし、二婦人なり、其年紀一は三十八、一は十九、健馬に鞭ちて、風雪の中を行く、意氣の壯なる流石は、蒙古の女子なり、時に寒暖計、零下三度、寒威骨を刺しけり、行くこと數露里、一溪流を得、感さ、大約二十間、水已に氷結しけるが、暴風雪を拂うて、氷面鏡の如く、馬驚きて進まず、流尤、狭き處を擇びて、馬を鞭つゝも、脚踏進まず、馬を下りて、牽いて、涉らんとす、靴の裏に釘あり、氷滑、よして、厥かんと欲す、乃ち靴を脱ぎて、氷を踏む、馬猶驚きて却歩し、中佐は之を引き、一進一退、暴風忽、至りて、氷上に吹倒さる、如此き者、數、時に十九の少婦、漸く馬を牽ひて、遂に前岸に達しければ、乘馬之に隨ひて、氷上を涉るを得けり、進むに隨ひて、雪益、深し、一部落を得て、小憩し、又風雪を冒して、山を上る時に、山下雪を蹴て來る者あり、顧みれば、則、前日、烏蘭幾喇にて、遇ひし時、傲然禮を知らざりし、車臣汗部の蒙古官吏にして、彼れ既に、烏里雅蘇台に至りて、公用を終り、居る者、二日にして、歸り來れるものなり、相去る十二日、淹留二日を除けば、往來九日にして、其里數は、烏蘭幾喇より、烏里雅蘇台まで、二百四十五露里、烏里雅蘇台より、此に至るまで、六百七十二露里、往來すべて、九百十七露里にして、一日程、平均百零二露里なり、台馬を驅りて、旅行する官吏の足跡、神速なる實に、驚く可し、彼

今古之感

等の生活は常人の艱苦堪へざる所に於て之に居ること安如馬に騎ること履を穿つが如く嶮巖を渉ること平野を馳するが如く而して其馬強健天下比なし彼等の祖先は彼等の氣骨膽略ある者宜なるかな其昔日四隣を震動せしや而して今は膽略消して氣骨衰へ其中既に亡びて其外後に存するのみ其中を充すに祖先の氣骨膽略を以して其外と相副はしめ之に教ゆるに新式の訓練を以し之に授くるに新式の銃砲を以せば曷ぞ其四隣を震動する今猶昔日の如くならざるを憂へんやなと思ひついで感慨淋漓覺ゆるも鞭を風雪の中に揮へば馬は躍りて山下溪間に在り時に日既に没し寒威益甚し雪を冒して夜行くこと十數里午後七時十五分鳥鎮沙班部落に達す鳥蘭不少を去ること五十露里海面を抜くこと四千五百尺分水嶺以南急行きて地愈低し此の夜中佐より先に駆抜けし蒙古官吏の部落長に告げて中佐の宿泊をや妨げん良幕を得る能はず極て不潔なる一小幕に投ずるを得けり幕中には六十ばかりの老女と三十餘の男子と二人住みけり男は剃髮して跛なり羊肉を乞ひけるに箱の中より一樹の肉を取て湯煮て進み見れば肉には大きな脊骨つき居て羊にはあらで馬か駱駝かの肉と覺ゆるも知らぬことよけれと思ひて問はず彼の跛の男は蒙古人には珍らしく字を識り書を讀むものなりければ馬矢火の邊に蒙古語の質問をさし途上必用の數語を習ひ得けり

烏知雌雄

四日午前九時半發程東北東に向ひて一丘を踰え一溪に遇ふ四邊山嶺兀然たり行くこと三十露里午後二時鄂哥加部落に至る海面を抜くこと四千一百尺時に寒暖計零下五度なり便秘の爲に心地益あしかりければ先づ牛乳と一握の粟を乞ふ主人多く與へず主人は台吉なり其妻痘痕滿面醜老猿の如く一見して其悍を知るべし佛壇に向て蒙古字の經を誦し又喇嘛僧を招きて同じく西藏字の經文を誦しけり蒙古の女子にして能く此の經を誦する者殆んど希ありとかや時に犬あり幕隙より入り幕内を嗅延りけるに妻怒りて立ち焼火箸押取りて犬を搏んとす犬は主人台吉の愛する所之を見て怒り木片を取より早く妻を打ちけり妻憤然として立ち木椀二個を取るよと見えしが忽ち台吉の面上に投げつけ果は互に相殿打して犬の事より犬も食はぬとやら云ふ夫婦喧嘩をぞ始めける中佐幕隅に在りて抱腹に堪へず腹の心地あしきをも打忘れて絶倒しけり蒙古にて口先の喧嘩は絶えぬも互に暴力に訴ふるを見ず以て勇氣の衰へしを知るべし之を見しは獨り夫婦喧嘩のみなりと云ふ亦好笑柄ならずや夫妻性皆極めて鄙吝銀片を強請し

土人至れば相顧みて中佐を嘲笑しけり

恐慌禮災

夜半夢覺むれば部落を擧げて騒然人あり幕に入り台吉夫妻を搖起して何やらん物語りて慌だしく立去りけるが夫妻の之を開くや急に起ちて衣を着慌然として數珠を取り燈を佛壇に點じて讀經少時去て幕外に出で又歸りて讀經念佛時を移して再び枕に就きけり跡にて聞けば此の夜月蝕あり月蝕は天の凶兇を人間に示す所以なりと信じて恐慌災を禱ひしものにぞありける漠北曆日なく唯水草の榮枯寒暖の變移を見て時を知るに過ぎされば斯る蒙昧の習ひ固より怪しむに足らずとなり

劍影膽寒

五日東北東に向て行くこと三十五露里悉勒特部落に投ず海面を抜くこと四千四百尺此の日正午零下七度六日馬首一轉東南南々に向ひて行き山を踰ゆる者三道左邊に一水を望む土喇河是なり土喇河は庫倫城外を流るゝ者朝來雪風亦甚しく正午零下四度寒風骨を刺しけり便秘の爲に疾驅する能はず雪を溪間に避け屢馬を下りて之を試み遂に纜に通ずるを得けるも肛傷きて血出でけり行くこと三

唯以禱壽

十露里薩顏德爾斯部落に投ず海面を抜くこと三千五百尺翌七日天曇りて且つ寒く零下十度に及びけり午前九時四十五分發程東南南に向ひて行き山を踰ゆる者三行くこと三十露里鄂斯加部落に達す海面を抜くこと四千尺なり此の日正午零下五度腹の心地あしきより早く宿を求めけるが帳内の不潔殆んど名狀す可らず主人は剃髮して喇嘛に歸依せし者一孩兒あり病身と見ゆ主人病兒の爲に讀經念佛時に小兒の面上に唾し以て其壽を禱りけりいとさたなき祈禱とや云はん病兒屢下痢すれば幕外の犬を呼びて甜り盡さしめて以つて掃除せずむさくろしと言ん方なし中佐牛乳を乞ふ亦た惜しみて多く與へず古びたる牛肉を羊肉ありと欺きて進めけり土人群集して主人と與に中佐の單身撥なく且つ病めるに乗じて皆侮慢を逞らし嘲笑止まず指さして罵りて曰く彼れ蒙古語を知らずと中佐蹶起して叱して曰く予が耳實に蒙古語を知らず然れども予が目は能く蒙古語を解す汝等若し不良を爲さば予豈に黙止せんやと衆皆悚然更に進んで温言中佐に向ひ請ふ此の庖刀を見せよとて軍刀を手に取りけるを直に奪ひ返して是れ肉を切る者に非ず悪人の頭を斷つ者なりと云ひつゝすらりと引抜きて明滅たる馬矢火の爐畔に圍繫せし土人の前に出せば三尺の秋水蛟潛み龍蟄し一片の流星電奔り霆飛

二百五十二
び光焰万丈の下に不動明王の立ち玉ふかど見えて一揮閃然以て魑魅罔兩をして
遁藏せしむべし舉慕愕然肌に粟を生じ魂悸き膽寒く語なき者少時逡巡して去り
けり快と謂ふべし

不能疾馳

八日早天將に幕を出でんとす馬未だ至らず命じて牽き來らしむ肯かず此迄中佐
怒を示せし時は彼等正面抵抗せず裏面にて種々の小惡を爲して不便を興ふるを
常としけるが今日も昨夜の怒に報ひんとてあるべし屢主人に迫りてやうく
牽來らしめけるも馬は常にもわらでいたく疲れたり多く草を興へざりけん午前
九時東北々に向て行くこと數里土喇河を渡りて右岸に出づれば左の方遙に一大
喇麻廟を山下に見る其下を過ぎて行く腹内の不快益甚しく馬馳する毎に鼓動
を感じて痛を覺ゆるより徐々馬を行行展下馬して之を試ひるも通せず此の日
の工夫意地悪くも馬に鞭ちて馳す中佐徐行せよと命するも肯かず昨夜の肉にて
腹を痛めたれば疾く馳する能はずとて之を止むれば彼れ其口眞似していと嘔
出しけり午後二時行くこと二十五露里波爾奔他部落に至る海面を抜くこと三千
五百尺彼の工夫憎さも憎しと思へども例に因て酒手の銀塊を興へけるに部落の

蒙人貴絹

主人剃髮せるが工夫を欺きて汗巾大の絹片と銀塊と交易しけり絹片は蒙古地方
の通貨に代用する者にして垢れ且破れても絹ならんには其價を失はず一枚の價
位凡そ露貨一哥ばかりなりと云ふ中佐幕に入りて直に爐邊に横臥し先づ牛乳
を乞ふて飲む主人其病めるを知り藥を進らせんがと云ふ彼等の藥固より草根木
皮効なくとも害あるべくもあらねば乞うて牛乳をもて之を服しけり藥は果して
木皮の粉末なり妻は笑うて止まず夫は佛壇に向て念佛す蓋し親切らしう欺きて
銀塊を食りしものなるべし去れども彼の藥さしたる効はあらねども些少腹心地
よく覺えたり

稍解世情

九日午前十時土喇河の左岸に沿ひ東北々に向つて行く溪間草多く土柔らかにし
て騎便なるも劇動腹部に感じて疾馳する能はず片手を鞍の上に置きて尻をおさ
へつゝ徐行して午後三時大里阿他部落に至る行程三十里海面を抜くこと三千六
百尺此日の朝は零下十二度正午は上ること一度に過ぎざりけり此處の部落長は
嘗て蒙古官吏に従ひて清國北京に在る者數年善く支那語を解しけるが長く旅情
を嘗めて稍箇中の辛酸をも知りけるより孤客病あるを見て深く同情を表し之を

台幕に延き牛乳を與へ煎粟に熱湯を注ぎしをも進め心を盡していたはりけり

喇麻來診

十日午前十時發程寒氣尤烈零下十七度に下り正午も亦零下十五度に及べり途上一老人と遇ふ彼れ人夫と耳語し代りて馬を牽めて隨ひけり行くこと僅に二十露畢鳥蘭哈的爾部落に投ず腹痛堪へざりければなり老人中佐を我幕に延きけるが其妻老夫の歸るを見るや佛前に向て三拜九拜し更に老夫に向て三拜九拜すれば老夫は手を以て軽く妻の頭を拍ちけり是れ老夫遠方より歸來せるを喜び迎ふるにやわらんと面白き習慣と云ふべし此の日腸胃益々悪しきも夫妻路人を視るが如く土人群集嘲笑例の如し中佐此處に喇麻の醫者ありやと問へば有と云ふに試みに人をして之を招かしむ既にして僧醫馬に鞭ちて至る年五十餘一革袋を携へけり定め

帖藥ホ 紙= 刀と匕ハ 袋小藥ロ 籠藥イ



僧而醫

て是れ藥籠なり袋の周圍に數多の小革袋を附し每袋蒙古字を以て藥名を記す中佐告ぐるに數日便秘して腸胃の不快なるを以しければ彼れ左右の手を以て中佐が左右の手首を握る是れ診察なるべし他皆診する所なし袋中より一藥匕を取出すは煙管の膈首の如く柄の端に刀あり其狀羽の如し刀を以て紙を刀り匕をもて二三種の藥を小革袋の中より盛りて紙に包み五六貼を與ふ皆草根木皮にして西藏より來る者蒙古人の生命一に此に係る其煎方は牛乳二盃を一盃に煎じ更に牛乳一盃を温めて之に和し以て之を服す此の夜數服やがて腹鳴りて放屁す蓋し微効あり翌朝又來り診す双手を握ること前の如し藥を與へて去る中佐謝するに銀塊を以しければ喜ふこと甚しかりけり

天象變幻

十一日午前十時東北々に向ひ土喇河の右岸に沿ひて行く地小起伏あるも土柔らかにして騎便なり既にして山を踰ゆる者三此の日正午零下十四度天晴れて風穩なり仰ぎて天象を観るに雲にもわらず霧にもわらず一天濛々として日光を遮蔽し太陽の兩傍に光線反射して別に二日を生じ反射せし日影を貫きて虹を生じ虹尖りて鐘の如く其光又反射して虹を生せず之を望むに雲中の電氣燈の如し理學

書往々此の現象を説くも今實景を目睹して漠北寒時の天象太だ奇なるに驚きけり

一喝出幕

六時間三十里をのりて午後四時沙爾哥布部落に入る此の邊已に庫倫を去ること遠からず露人の來往頻繁なるより土人銀を旅客に得べきを知りて周旋待遇に慣れ先づ中佐を一幕に延き頼まぬに駝毛布を進め煎りたる麥粉を出し土人群集して種々の談話を試みけるがやがて剃髪したる部落の書記來りて曰く諾顏君は宜しく台幕中に延くべしと土人を睥睨して強めて台幕に誘引しけり幕中既に蒙古の二官吏あり須臾にして二蒙官亦庫倫より至りて同宿するに會ひ蒙官を上座に延きて中佐を幕隅に坐せしむ蒙古官吏固より禮法を知らず孤客を見て嘲弄指笑侮慢狀なし中佐隱忍知らざる者の如くす既にして彼れ故らに其僕をして中佐に背きて面前に坐せしめければ今は堪兼ねて劍を按して起ち無禮者を一喝して幕を出で去りて書記を呼び責むるに無狀を以て書記其事を生じて幕を開がさんてとを恐れ倉皇狼狽之を我幕に延く幕固より小にして不潔台幕に至りて例の赤座蒲團を持來りて上座に請じ唯命是れ從うて優遇措かざりけり

土人驚喜

中佐牛乳を以て喇嘛の藥を服し横臥して爐邊に在り土人群集環視す中佐蒙古旅行の用意にとて藥罐茶碗等を携帶しけるが思ふに庫倫より恰克他に至る迄は蒙古の大道にして非常の不便を見ざる可きは明なり去れば此の品々不用なり分與して荷を減さんとして圍引にして土人に分ち與へけるに中に未だ見も知らぬ物あり圍引の新法只分與するなんぞ意外なるに驚喜せざるはなく此の夜より翌朝にかけて衆皆争うて馬の世話なぞをなしけり

霍然如洗

十二日午前十時山を下りて東北東に向ふ時に零下十五度天曇り風烈しく寒威針の如し腹痛又起り殆んど堪ゆ可らず屢馬を下りて野原を厠に代ゆれども通せず徐行數里腹鳴りて且つ痛むこと甚し又馬を下りて之を試む通せんぞ欲して能はず釣上げし魚を水際にて落したらんが如く敵に追付きて引つかみたる兜の綴の断れたらんが如く口惜しきも力及ばず今こそと思ひて滿身の力を極めつゝ手もて肛門の前後を抑へ且つ張つて纒に通せしめしに力を得つ肛傷れ血出るも猶力を極めて攻めかけ一騎切で落しては一騎を切り遂に叱咤して盡く敵の首

級を得、十數日間の便秘忽ち霍然として洗ふが如くなり庫倫に着れば醫を招きて療治せんと思ひけるに山腹に踞して庫倫を眼下に見晴らしつゝ、全通して霍然爽快を覺えし時は日本晴の心地して其快言ふ可らず已に馬に上るや天曇るも晴天の如く風寒さも身に染まず十一日間尻をおさへて徐行せしもどかしさ一時に拂ひのけて一鞭疾馳直に庫倫に入りけり時に午後二時なり前日は三十露里を六時間より早く乗る能はざりけるに今日は行程同じく三十露里にして四時間に達するを得けり既に庫倫に入るや旅館なきに困ふと果けるが此の地露國の領事館あれば其助力を乞はんとて往きて之を訪ひけるに領事は休暇を得て米國に遊べりとて在らず代理書記生出で、迎へ之を待つこと惻切遂に領事館内語學生の室に宿せしめけり

庫倫風色

庫倫は四面山を繞らし土喇河の右岸に瀕し一溪東西に連り漠北第一繁華の地と爲す此に喇麻教の巨刹あり西藏の靈地に亞ぐべき者にして胡土克圖其座主たり胡土克圖は僧官喇麻大僧正と云はんが如し清朝之を保護して漠北蒙古人心收攬の中心と爲す規模宏大結構壯麗遠く來りて禮拜する者雲の如し露人は此地を稱して

てウルガと云ひ蒙古人はターフレと稱すターフレは巨刹の意なり本堂の前面堂房相連り屋宇楹比して一大市街を成す本堂の前なる數多の小堂の中八角曰の如き者を柱頭に貫ぬきて佛前に置き禮拜者をして廻轉以て念佛を唱へしむ老若男女柱下に群集し且唱へ且つ誦し時に或は地上に伏して遙に本堂を拜して念佛誦經以て冥福を祈る其聲群蟬齊しく鳴くが如し房は皆僧侶徒弟の居る所自餘の屋宇は皆商戶市廛支那人あり露西亞人あり本堂の南朱門燈々たる者を土謝圖汗の宮殿と爲す土胡克圖の居辦事大臣の官舎等建築の尤大なる者家皆支那風なれども中に二三の洋館あり市街の中處々帳幕あり蒙古人家居を好まざるを知るべし東の方市を去る凡そ三露里丘上巍然たる者を露國領事館と爲す館の東凡そ二露里繞らすに木柵を以てしたるを賣買城と爲す支那商の居る所昔時賣買城の外に在りて貿易するを准さざりけるも近時其禁解け城と市と自由に居を占しひと云此地氣候極寒零下二十五度を下らず夏も亦甚だ熱からずと云ふ

庫倫兵制

庫倫實に邊防通商の要地と爲す是れ清朝辦事大臣を此に駐むる所以なり辦事大臣又土謝圖汗東臣汗二大部の事務を兼轄す前章既に札薩克圖汗三音諾顏二大部

二百六十
の兵備を説けり今茲に土車二大部の兵備一斑を掲げ以て漠北喀爾喀蒙古四大部兵備の概を参照せしむべし土謝圖汗部は分ちて二十旗と爲し士卒大約三千四百人佐領五十八人之を分率す東臣汗部は分ちて二十三旗と爲し佐領四十三人之を分率す此の地昔時防備の兵を置かず僅に巡邏兵數十人を駐むるに過ぎざりけるも前年邊防多端變將に測られざらんとするや吉林の歩兵二大隊直隸の騎兵二大隊を派遣せしめけり厥後之を撤去し今唯舊營の敗壞殘礎を荒烟蔓草の中に見るのみ但喇嘛本堂の傍に一兵營あり吉林分遣の歩兵三百人此に駐成す其餘蒙古人を以て編制せし巡邏兵大約二百五十人ありと稱すといへども殆ん其實なしとなり

庫倫商況

露國商人の庫倫に在る者皆妻孥を携ふ男女老幼大約百餘人支那人妻孥を携ふる者なし蓋國法の禁する所と云ふ往々蒙古女子を拉りて妻と爲す市と城とに在る者を合して大約三萬を下らす此の地の貿易品茶を以て最と爲す清國漢江に一大製茶場あり露商の有する所其茶天津に船運し天津より駝背に依りて張家口を経て此の地に轉運する者毎年二十萬箱を下らす庫倫より牛車以て恰克他に送り恰

貿易以茶爲最

庫倫露館

露國領事館は市東の最高處に在り層樓巍然繞らすに白柵を以し外觀太た佳なり露國が領事館を此に置きしは實に清國咸豐十年に在り清國當時南は長髮賊猖獗を極め北は英佛同盟軍天津を陥れて北京に迫り遂に城下の盟を結び外患内訌一時交も起り國事多端なり露國は更に當時の條約に據りて郵便局を此の地に置き支局を張家口北京天津に置き庫倫より戈壁の沙漠を横斷して張家口に達する驛路は四十四站大約四千清里北の方恰克他に達する路は十一站大約八百清里毎月三回郵便物を發送し二回は書簡にして毎站蒙古人支那人の遞送に係り其一回は金圓物品の郵送に屬し哥薩克二名之を監護す庫倫より北京に至る廿日を以て達す可しと云ふ露國領事の任に此の地に在る者二十五年蒙古の事情に精通し物を盡に探るが如く土謝圖汗及び辦事大臣と交情頗密なる者の如し郵便局長も亦此に在る者二十五年なりと云ふ館員は書記官一人譯官一人領事館附武

庫倫之驛傳

官陸軍中佐一人哥薩克兵下士一人兵卒四人あり館内又語學校あり生徒凡そ十人皆恰克他附近の中學校を卒業せし者蒙古滿洲支那等の語を習ひ毎年夏期二三箇月は内地旅行を爲して實地修練せしめ他日業成れば皆之を國疆官衙の吏員に採用すと云ふ

駐馬庫倫

亞爾泰驛以東始めて郵便設置の地に達するを得ければ馬を駐むる者五日蒙古旅行の概畧を本邦に報告す書記官館側の一空屋を掃除して中佐の寓居に充てけり食事は其官舎に會食するを常と爲す十四日は宴を領事館に張り館員及び露國紳商等來會す中佐は其正客たり後三日郵便局長譯官等の饗に赴き微送殆んど盧日かく談笑談治蒙古道途の艱を慰むるを得けり此に哥薩克騎兵あるより新に亞爾泰興安二馬の蹄鐵を更へけるが蒙古の二駄馬は峻峻を踏ぬ冰雪を踏んで其爪少しくも缺けざりけり其健能く可し囊中の銀器盡く交換せざる可らず而して跋渉漸久しく深く蒙古人の嗜好にも通じけるより復た銀塊を携へず更に輕便にして携帶し易く土人の嗜好に投すべき雜貨を買うて腰纏と爲す乾葡萄酒更紗風呂敷數珠小刀鏡婦人髮飾等は是なり價廉にして輕便なり以て蒙古語に通じ其事情に習

北走八日

ひし者二三人伴を結び兵器を携へて旅行せば容易且愉快にして多く資斧を費さす益を得ること却て多きを知るべし報告書既に成り旅途の準備も亦整頓しければ將に庫倫を發せんとするや書記官譯官等の妻女麵包肉汁罐詰等を贈る

庫倫より恰克他に至る大約三百露里即ち我八十里八日にして乃ち達す其間地勢山嶺起伏漸く北して漸く低く庫倫海面を抜くこと三千七百七十尺恰克他に至れば二千六百尺なり水域皆貝加爾湖に屬す氣候も亦愈北して愈寒く正午零下十五六度を示すに至り積雪地に逼り堅氷河を鎖し寒風凜冽針砭を下すが如し馬發汗すれば毛未氷を結び長鬣亦白く鐵蹄雪を噛みて緊着行を妨ぐ馬を下りて氷を拂ひ雪を去る者數なり路は山坂多し甚だ急峻ならず且つ岩石少く亦水草に富むこと庫倫以西の比に非ず部落往々草を蓄ふ故に原上草なきも復た遠く去て馬を牧するを須る途上日に數隊の駱駝及び牛車又遇ふ皆庫倫より茶を恰克他に運ぶ者行く者は一駝背能く四箱を駄し一牛車三四箱を載す蹄る者は空車背空時に或は牛駝を草野に放ちて休息す往來纒るが如く途上絡繹たり亦庫倫以西の道途寂寥行人を見ざるが如きに非ず庫倫以西行旅甚だ稀に情俗固より險なるも

食肉而便
秘食穀
而下痢

以。北。一。路。露。人。の。往。來。頻。繁。な。る。よ。り。土。人。客。を。待。つ。に。慣。れ。て。復。た。侮。慢。を。加。ふ。る。者。な。く。每。部。落。粟。麥。の。煎。粉。及。び。肉。を。困。難。殊。に。尠。かり。けり。其。庫。倫。を。發。せ。し。一。十。一。月。十。八。日。午。前。十。二。時。半。な。り。氣。候。は。零。下。十。一。度。時。に。日。漸。く。短。か。く。夜。行。二。時。間。バ。かり。飛。雪。霏。々。と。し。て。野。を。掩。ひ。四。顧。冥。然。部。落。の。所。在。を。知。ら。ず。馬。上。大。に。呼。ぶ。も。聞。こ。し。て。答。ふ。る。者。な。し。且。つ。呼。び。且。行。く。時。に。馬。首。一。點。の。微。光。明。滅。燧。を。切。る。者。の。如。き。を。認。む。蓋。し。幕。扉。を。啓。閉。す。る。毎。に。馬。矢。火。外。に。洩。る。ゝ。な。り。之。を。望。ん。で。行。く。遂。に。克。伊。部。落。に。入。る。時。に。午。後。四。時。四。十五。分。庫。倫。を。去。る。こ。と。三。十。露。里。是。よ。り。先。き。肉。を。食。う。て。便。秘。す。庫。倫。に。至。り。て。穀。菜。を。食。し。遂。に。下。痢。し。けり。其。効。相。反。す。る。こ。と。如。此。し。十九。日。午。前。八。時。四。十五。分。發。程。山。を。踰。ゆる。者。三。行。く。こ。と。四。十五。露。里。午。後。四。時。四。十五。分。薩。爾。部。落。に。投。す。此。の。地。の。高。さ。庫。倫。と。同。じ。廿。日。八。時。十五。分。發。程。亦。山。を。踰。ゆる。者。三。波。露。河。溪。に。出。で。始。て。著。草。を。見。る。又。水。あり。庫。倫。以。北。河。水。冰。結。馬。に。飲。ふ。能。は。ず。小。憩。し。て。水。草。を。與。へ。又。三。た。び。山。阪。を。踰。ゆ。て。行。く。と。總。て。四。十五。露。里。午。後。五。時。哈。拉。額。爾。部。落。に。投。す。地。高。さ。こ。と。二。千。七。百。二十。尺。廿。一。日。午。前。九。時。四。十。分。零。下。十五。度。二。小。山。を。踰。ゆ。山。樹。木。多。し。日。已。に。暮。る。雪。を。踏。ん。で。夜。行。く。寒。殊。に。甚。しく。汗。馬。冰。を。結。び。けり。五。十。五。露。里。烏。爾。莫。克。對。部。落。に。至。る。馬。丁。之。を。不。潔。の。幕。に。誘。へ。り。中。佐。曰。く。台。幕。は。何。く。に。

か。在。る。馬。丁。曰。諾。顏。君。亦。之。を。知。れる。か。と。笑。う。て。更。に。台。幕。に。延。き。けり。此。地。高。さ。三。千。二。百。二十。尺。廿。二。日。午。前。九。時。四。十五。分。發。程。正。午。零。下。十五。度。二。山。を。踰。え。て。一。溪。に。出。づ。山。に。松。樹。多。く。其。下。に。一。喇。嘛。廟。あり。帳。幕。其。傍。に。在。り。風。光。畫。の。如。く。庫。倫。恰。克。他。間。の。勝。地。と。爲。す。部。落。の。名。を。克。伊。頓。と。曰。ふ。時。に。午。後。一。時。半。遂。に。宿。す。行。程。二。十。露。里。次。日。午。前。八。時。四。十五。分。發。程。山。を。踰。ゆる。者。四。一。高。原。を。過。ぎ。る。伊。魯。河。溪。に。至。る。冰。を。踏。ん。で。渡。り。伊。魯。部。落。に。入。り。て。台。吉。の。帳。中。に。投。す。行。程。三。十五。露。里。尤。水。草。に。富。み。牧。畜。甚。盛。な。り。此。夜。馬。を。幕。外。に。繋。ぎ。牛。車。數。輛。を。以。て。之。を。圍。み。終。夜。草。を。食。は。し。む。此。日。尤。寒。く。朝。は。零。下。十九。度。正。午。零。下。十六。度。此。の。地。高。さ。二。千。三。百。六十。尺。廿。四。日。午。前。八。時。半。發。程。山。を。踰。ゆる。四。行。く。こ。と。三。十。露。里。伊。比。地。克。部。落。に。投。す。高。さ。二。千。五。百。三十。尺。此。の。日。亦。寒。く。其。度。昨。日。と。殆。ん。ど。同。じ。其。翌。廿。五。日。午。前。九。時。零。下。十。度。正。午。零。下。九。度。行。く。こ。と。三。十八。露。里。遂。に。露。領。恰。克。他。に。入。けり。

蒙古餘論

中。佐。蒙。古。の。山。河。を。跋。渉。す。る。者。六。十。餘。日。一。千。九。百。六。十六。露。里。家。居。は。則。科。布。多。二。日。烏。里。雅。蘇。台。二。日。庫。倫。五。日。其。餘。は。皆。蒙。古。の。帳。幕。中。に。投。宿。し。躬。其。居。に。入。り。て。親。し。く。其。人。に。接。し。精。覈。密。察。得。る。所。尤。多。く。且。つ。蒙。古。人。其。單。身。援。な。き。を。見。て。忌。憚。す。る。

二百六十六
所あく其天眞を暴露して敢て其情を掩蔽せず是を以て深く蒙古の百事に通ずるを得けり中佐曰く一言以て蒙古の事情を盡さん人智蒙昧にして俗信義なく唯喇麻教の陷阱中に醉生夢死するのみ時に眼前小利の爲に一身を忘るゝとあるも絶えて進取の大望なく小悪を陰微の中に營むも赫然として大勇を奮ふ能はず漠北の兵備數千ありと號するも到處の懐内一兵器を見ず昔日慄悍勇歐亞を震盪せし勇氣は漸然として消滅し復た祖先の餘唾をだに嘗むるを知らず人口漸く減じ日に益貧困蓋し衰亡に傾ぶく者竟に天下の活劇に參して一技を演ずる能はざるべしと

入恰克他

曩に中佐比伊地克部落に入るや蒙古人斷髮露語を善する者出で幕外に迎へて曰僕ハブリアツト人にして古人恰克他の豪商ミシネノフ氏の商店に仕ふる者主人僕をして貴下を此に迎へしむ待つ者一日昨夜一蒙古人來り告げて曰く一外國人今夜伊魯部落に投すと因て今朝此の幕の兄弟二人をして道を分ちて馬に鞭ちて途に迎へしめたりき貴下之と相遇ひしや如何ん中佐曰く知らずと時に一人歸來す之を見るに今朝途上相遇ひし者言語善く相通せざりしより互に相知らざ

ゆしなり既よして一人亦歸る此の兄弟二人屢恰克他に往來し稍露國の事情を知り待遇懸絶なり幕の傍一木造の小屋あり是れ倉庫なり蒙古人の木造小屋を有する者前後只此一字を見しのみ蒙古の帳幕に宿する此の夜を以て最終と爲す故に囊底散餘の雜貨及び準備の器物盡く兄弟に與へて而して去る次日ブリアツト人に導かれて行く車道の溪に沿ひて平坦にして遠く間道は稍峻にして近し中佐問道より進み雪を踏みて山を登り山上遙に西北を望めば眼界忽ち開け一帯の松林鬱然遠く連ると十數里遠山の麓雲烟縹緲の中高塔兀然之を土魯斯薩威斯科府の寺院と爲す塔の南一簇の人烟土魯斯薩威斯科府の屋宇と相去る遠からざる者を恰克他と爲す形勢甚壯眺闕絕佳客心之を望んで覺えすも暢然たりけり山を下りて林に入り始めて車道と相會す林を出で一小部落を得部落長官帽を戴きて出て迎へ之を台幕に延き茶及び牛乳餅を進む此を蒙古部落の盡る處と爲す帳幕不潔と雖も六十餘日風殘露宿を免るゝ所以の者別に臨みて愾然たりけり去りて一小阪を上げば土魯斯薩威斯科府の警部長正服馬に上り來りて此に迎ふ行くこと二三露里馬車二輛馳せて迎ふる者あり之れを恰克他の豪商ミンチノフシニツェン二氏と爲す車を下り帽を脱して大呼して安着を齎し且つ其勢を慰

二百六十八

めて曰く請ふ車を同らせんと申謝して曰く此の行山祖水涯亦曾て少しも馬を棄てざらんことを期すと道分れて二と爲る其一は賣買城を過ぐる者乃ち此の道を取りて行く賣買城は支那人の國境貿易地にして家屋連亘道路狭小にして汚穢實に支那人の居に負かず城の北門を出で、五十サーヂエンの中立地に出づ之を清露の國境と爲す表なく門なく往來誰何せず地稍高し馬を留めて四顧すれば南は則賣買城眼下に在り城南山嶺淡遠風光太だ佳北は則翠巖白壁樓閣林立道廣く且つ大南北全然觀を殊にし兩國劃然境を成す所以人爲に非ざる者の如し警部長中佐を顧みて笑て曰く此一步猶是れ清國今の一歩既に露國に入ると中佐忽ち想ふ島蘭達巴に於て露國の山川と別を叙したるを今復た境北一步露西亞の土を踏んで覺えすも心裏獨語して曰く健在萬福と how do you do 既にして恰克他に入るや學校を以て旅館に充つ學校の傍に紳商俱樂部あり食を旅館に送り俱樂部の使丁長一人及び使丁の獨語を善くする者給仕しけり此の夜紳商の浴室に二箇月間の垢を洗ひ虱を以て理めし掃掃を更へ壯麗なる學校を占領して温度十七度の室に入り鐵寢臺の上に安眠せし樂の蓋筒中の艱苦を知る者に非ざれば與に語るに足らざる可し

恰克他

二百六十九

恰克他の人口大約四千地に豪富多く大厦軒を連ね道路宏潤市の中央に遊園あり華帽翠袖此に挑達し園側巍然たる者を寺院と爲す廣大壯麗人目を驚かすに足り悉比利中罕に見る所なり貿易茶を以て最と爲す庫倫より牛車此地に輸し此地より馬車内地に送る馬車數十輛一列と爲し日毎陸續たり此地北風常に烈しく寒氣極めて甚しく此時朝夕既に零下廿五度強に下りけり天常に晴るゝも一天濛々雲に非ず霧に非ず物あり天日を蔽ひ日光太だ薄く圓虹日を環り日光の反射する處又一日を生ずる者の如く虹又之を環る天象尤奇冬時往々之を觀ると云ふ恰克他の市外森林鬱然尤熊多し冬時熊を獵するに一日五六頭を獲べし恰克他の商はミンチノフ氏を以て最と爲す氏の豪富を以て悉比利第一と稱せらる各地金坑を有し茶毛皮等貿易尤盛なり之に亞ぐ者をシニツエン氏と爲す氏も亦富を以て聞ゆ其妹は名聲東部悉比利に赫赫たるシペリヨフ氏の妻なり二豪商中佐の蒙古跋渉の艱を想ひて之を郊に迎へ之を學校に館し待遇惻惻を極めたり恰克他を去る二露里を土魯斯哥薩威斯科府と曰ふ人口大約五千家皆木造なるも市街整然たり庫倫に對する國境要地にして戰時編制歩兵一大隊此に駐成す又貝加爾

哥薩克第十三聯隊の幹部を置けり其他師範學校あり女子中學校あり郵便電信局博物館等あり博物館の創設日猶淺く未だ全く整頓せず然れども館内蒐集する所の悉比利の礦物植物及び陳列する所の蒙古古今の器物衣服等觀るに足る者あり中に就き唐の時元祖の漢北に都せし和利に建つる所の石碑及び寺院家屋等の寫真奇古驚く可く人をして感慨禁する能はざらしむと云ふ中佐馬を恰克他に駐むる者三日大隊將校團の夜會大隊長及び紳商俱樂部の晚餐ミンチノフ氏の夜食等に赴き盛宴厚饗復た虛日なし時に衣服猶薄く寒を防ぐに足らず初め義爾克斯科に至りて更に裘套を製せんことを期しけるも寒威既に酷烈骨を削るが如し途中の凍苦知るべしシニツン氏毛皮靴ヤクソック製のダハ裘を贈るミンチノフ氏亦蒙古産の野羊毛を表とし毛布を裏としたる裘袍を贈り以て夜間の寝具と爲さしむ因て防寒の具を得て着る所の衣物の垢れしは哥薩克兵僕に與へ蒙古にて買ひし二駄馬の一即ち哈布多加烏拉の一馬は俱樂部の使丁長に與へて使役の勞を謝しけり

貿易街道

十一月廿九日恰克他を出づ時に午後一時なり恰克他より具加爾湖岸のムサバヤ

驛に至る二道あり一は則セルレンギンスク、ウエルフチウヂンスクの二市を経て色楞格河に沿ひて下る者三百九十二露里一は則ち色楞格河を渡り直に北に向て行き哈馬爾達崗嶺を越えて湖岸に出る者僅に二百零一露里に過ぎす前者は郵便本道にして後者は恰克他の豪富等通商の便を圖りて近時新に開きし者なり故に後者を稱して貿易街道と曰ふ沿道の宿驛も亦其建つる所其修繕管理は恰克他市長に屬す中佐は本道を棄て、貿易街道を取りければ市長沿道驛舎に命じて一夫を出さしむ既に馬に上るや紳商數人馬車を驅りて土魯斯哥薩威斯科の市場に送り其健康を祝して別れ歩兵大隊長及び大中少尉總べて五人は皆騎して送り上恰克他驛に至り同じく此に宿しけり此の驛恰克他去ること二十五露里

始達湖上

其翌三十日の午前九時は零下廿五度寒さ骨を截るが如し色楞格河の右岸に沿ひて下ること八里河上に至る河の廣さ二百メートル許烏里雅蘇台以東恰克他に至るまで渉る所の溪水河流皆此に會注して貝加爾湖に入る時に河水氷結乃ち氷を踏んで渡り行くこと數里山間高原の中を行く曠原迢々行けども盡きす翌くれば十二月一日又高原の中を行き哈馬爾達崗嶺の南麓に次る次日直に山中に入り日

全く暮る時に月明に雪白し馬を白糢糊中に鞭ちて哈馬爾達嶺を踏ゆ嶺は海面を抜くこと四千四百尺貝加爾湖より高きこと二千八百尺實に湖上の一峻嶺と爲す嶺上馬を立つれば萬木雪を衣て月其上に挂り枝々樹々皎々金剛石を以て飾れる者の如く萬籟止みて天地寂寥々として仙やらんと欲す翌三日山を下りて森林を穿ち始めて貝加爾湖上のサムバヤ驛に至る恰克他を去ること二百零一里騎行五日驛舎に入りて午餐す貿易街道は新開の一路人烟稀疎驛亭の在る所も亦數戸に過ぎず其道此に至りて郵便本道と合す

氣候之變

恰克他を出るに方りては朝夕の寒暖計零下廿五度以下に及び正午も亦十五六度を上らず連日皆然り寒氣凜冽汗馬水を結びけるも馳せて貝加爾湖岸に出るや雪極めて深しといへども氣候甚だ暖に零下五度を下らず是れ湖水未だ氷結せず空氣湖を渡りて水温の爲に和らげらるゝを以てなり

湖上來往

ムサバヤ驛は湖上汽船發着の埠頭にして庫倫恰克他を経て露國內地に入る數十萬斤の茶は皆盡く集まり汽船湖を渡りて北岸なる安牙爾河口に入り以て義爾

克斯科に輸送す河口より義爾克斯科に至る陸路六十一露里なり其餘行旅貨物の義爾克斯科に至る者皆便を汽船に取り河湖盡く氷結し船路杜塞するに及んでハシハ驛より橋馬以て湖上の冰面を渡る其結冰期は毎年一月十五日より四月十五日に至る三箇月間なり故に陸路寂寥人跡殆んど希なり但毎年結氷前後氷結んで未だ堅からず船便既に絶えし時昔水を棄て湖岸の一路を取るのみムキバヤ驛を去る二十五露里ハシハ驛と云ふ此の夜中佐此に投ず

路上設欄

十二月四日ハシハ驛を出て行く者三日計百四十五露里クルツク驛に至る其間八驛投する所概皆湖岸の一寒舎のみ記すべき者なし中にハシハ驛を去る七十露里をスニエズナヤ驛と爲す戸數僅に十餘郵便電信局あり驛外の小流を後貝加爾州及び義爾克斯科州の境界と爲す此を去る七十五露里即ちクルツク驛なり中佐クルツク驛に至る頃は日全く暮れ雪を踏んで夜行數里午後八時半始めて驛に入りけり時に街上一欄横断して行通を妨遮す欄側一卒あり銃を肩にして立ち誰阿馬を止む繩おろ路傍の人家に通す繩を引いて鈴を鳴らせば一人燈を把て出來り携帶品を點檢し且つ問うて曰く支那人に非ざるか中佐示すに旅券を

以しければ彼れ始て其然らざるを知りて放行しけり是れ税關にして支那商人の義爾克斯科に往來する者を検査する者なりと云ふ遂に關を出で、クルツク驛舎に入る此の驛貝加爾湖の最南端に位し直に湖水に臨み三面開け氣候温暖零點を下らす道路雪解けて泥濘砂礫に交り騎行便ならず戸數大約四千家屋相連り自から一街を成す亦郵便電信局あり

貝加爾湖

此の間八驛百四十五露里は皆貝加爾湖の南岸を行く貝加爾湖は東西に狭く南北に長し故に幅最廣きは我廿五里に過ぎざるも其最長き處は大約我百七十里面積殆んど我南海道の二倍なり天下大湖多しといへども其水往々皆鹹水清くして而して大なる者は貝加爾湖を以て天下第一と爲す中佐の經過せし所南岸の一部に過ぎざるも空濶海の如く浩蕩際なく南岸の山嶺沿没半螺を見ず眼界三面蘇渺汪洋水天相交り皆巨洋に決するが如し南岸一帶萬疊の山脚皆湖水に入り樹木鬱然たり山に熊尤多し夏此を過ぐる者時に或は其毒牙に罹り尤危險と爲すと云ふ時に積雪既に深く熊復出ですして一たびも相逼はざりけり道路は丘陵起伏し山嶺相連り且つ上り且つ下り或は湖光を眼下に賞し或は蹄痕を水濱

貝加爾湖上

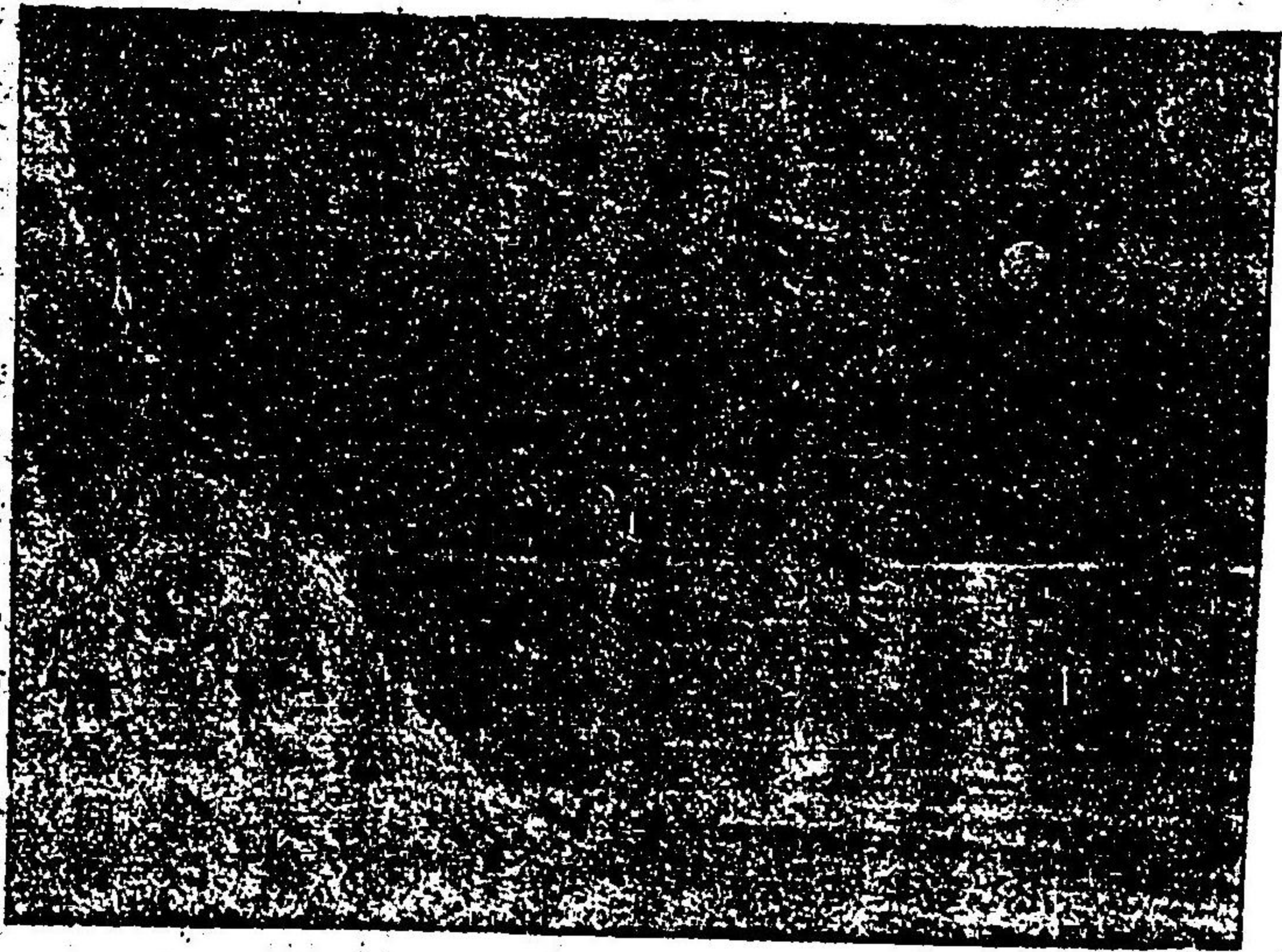
に印し時に或は深林鬱樹の中を穿ち又日に屢溪流を渡る溪流皆木橋を架せり時に北方短晝の極にして日出午前九時日没午後三時日中甚だ短かく夜行くこと常に數里時に月あり毎夜馬を湖上に馳せ時に或は蹄を丘上に立て、首を回らして明月の東方に昇りて影は湖水の上に落つるを望む湖水未だ氷結せず一面の波光月色と相映して溶漾激盪玉龍の盤に躍るが如く環湖の山皆雪を載きて萬木花を生じ玲瓏透徹一點の紅塵を着けず天地岑寂萬籟闐如月ハ明に水は碧に山は白く天は青く眼界澄徹心神洗ふがごとし時に或は遠く饑狼の聲を寒山明月の中に聞く聲烈帛の如く颯然風を生じ山悲しみ樹震ひ湖光月色之が爲に悽愴荒涼馬も亦驚き鬣を振うて長鳴し忽ち岑寂を破り萬象皆動く中佐顧みれば則四顧人なく孤鞭單騎獨り空明の中に立ち江山の勝を占領し恍然自ら畫中の仙かと疑ひ流連低徊して去る能はざる者久しかりけり嗚呼天下の巨湖に臨みて宇宙の勝區に立ち天地秀靈の氣を吸ひて空明澄徹の中に嘯くこと如此き者固より夫の遠征壯遊の客に私する所以のみ山靈水伯豈尋常江湖の士の足跡を印することを許さんや此の百四十五露里間情俗夷ならず猛悍風を爲す道路の里程表往々刀痕を印し伐りて之を棄て十其一を見ず故らに火を森林に放つ者あるに至ると云ふ湖邊ブリ

ヤット人多し驛夫馬丁皆然り彼等頭髮
衣服露人と異ならず亦日用の露語を解
し希臘教を奉ずるものありといへども
其種族の言語は略蒙古語と同じ其人口
總計十五萬乃至廿五萬の間に在りとか
や

入義爾克斯科

七日午前九時クルツク驛を出で直に
北へ向て行き湖水と別れて一峻嶺を上
るククンスキーダバンと云ふ高さ二千
八百尺嶺北雪深く山野に堆積し落木疎
疎枝上の雪氷結して玉の如く花の如し
山を下りて復た潮水を見ず寒氣嶺南に
比して殊に甚し正午零下十度は氷
面を離れしを以てなり山中孤屋ありクル
ボマルチカヤと云ふ小憩して又山を下

自貝加爾湖南岸山望北岸安牙奈河口圖



る夜行大約二時間にして山下のペランスカヤ驛に投ず此の日四十四露里翌八日
溪間を行く地稍平坦なり數溪流の氷上を渡りモトスカヤ驛に小憩し夜行二時
間ばかり遙に燈光數點相連るを見る是れ義爾克斯科府の街燈なり行くこと四十
四露里午後六時義爾克斯科の市外なる安牙爾河に至る河に橋あり橋は渡税を課
す橋を渡りて市に入り黒龍驛に投ず遊旅主人獨語を善す其遠征少佐なるを
知り進んで其勞を慰め且つ旅券を得て警察署に報せんことを乞ひて去る既にし
て軍務知事は警部長をして來訪せしめ巡查一人を附し參謀部長陸軍中將も亦一
士官をして同じく來りて訪問せしめ且つ命じて東道たらしめ更に兵僕一人をぞ
附しける

駐馬觀光

義爾克斯科は安牙爾河の右岸に瀕し人口大約四万七千悉比利の中心に位し亦第
一都會の地として光を觀覽を察する此地に如くなし故に中佐馬を此地に留む
る者十日哥薩克騎兵豫備步兵大隊營專門器械學校陸軍病院候補士官學校小學校
博物館等を巡覽しけり此地駐屯する所の騎兵は哥薩克一中隊のみ時已に嚴寒道
路氷結尤騎兵の運動に便ならず特に參謀部長の厚意に依り騎兵を參謀部門前

に召集して密集運動を演じ以て中佐をして觀せしめけり路皆氷結動もすれば滑走厥かんと欲するにも似て驅馳頗る熟練しけり歩兵大隊は豫備軍にして五中隊に成り兵員一千二百人あり器械學校は九年を以て卒業す生徒二百人許學術應用の組織にして校内教場あり工場あり一面學術を研究し一面實業を練習し機械器具を製造す製造堅牢にして其價低廉なるより人民の注文尠からざと云ふ蓋此地必要の學校なり陸軍病院を觀し時患者百人許あり院内看護夫學校あり生徒六十人三年業を卒り六年役に服す候補士官學校は歩兵大隊騎兵聯隊の士官候補者を選んで養成する所生徒現に歩兵科二十人騎兵科九人あり二年にして卒業し見習士官として本隊に歸り缺を待ちて士官に採用せらるる府内の小學校總て十五其一に就て總覽しけるが此の校資本金は豪商の寄附金に成り授業料を徴收せず煉瓦を不朽にせり此の地博物館亦悉比利第一と爲す建築壯麗樓上藏する所の書籍支那書多し又た各國地學に關する雜誌を藏す樓下には悉比利古代の器物及び植物動物を蒐集せり陳列する所の古今の貨幣外國品少く亦觀る可き者なし就中注意す可き者は礦物なり悉比利金の採掘高は千八百九十年に六萬三千四百三

十二封度、翌年六萬零五百五十七封度、悉比利中義爾克斯科、後貝加爾、黑龍三州の如きは尤も金坑に富むと云ふ交通未だ開けず機械未だ全からずして獲る所既に如此し一朝大鐵道全通して機械工夫の運搬便利なるに至らば其採獲殆んど測る可らずとなり此の間參謀部長軍務知事等の鑿に趨き俱樂部歩兵大隊の夜會に列しけり十二月十八日は露國皇太子殿下の祝日なり寺院に至りて其式を觀此夜歩兵大隊立食の祝宴に列しけるが此夜酒を兵卒に與へ參謀部長先づ盃をあげて殿下の健康を祝し一席の演説を爲して兵氣を鼓舞しけり會散するや兵卒歡呼して參謀部長と中佐とを椅子に乗せつゝ、胸上をなしてを送りける此地常に風雪あり寒氣酷烈零下廿五度に下ること數なり一日露國風の蒸風呂に入て室外に出るや内外寒暖の差甚しく呼吸壓迫していと苦しかりけり

○ 今昔之感

西曆第十六世紀露西亞が歐洲の一方に屹立して始めて帝國の鴻基を建つるや虎視眈々漸く東方に注ぎ屢遠征軍を出して深く荒陬に入り遂に驛站を設け又要塞を築き一千六百五十年に至りて一隊の遠征軍土人を驅逐して向ふ所前なく勇往奮進地を略すること六千餘露里遂に驚旗を太平洋海岸に樹つるを得たり爾來二

二百八十

百四十年の久しき土人の北地に逃避せし者極北の寒氣に堪へず半は皆凍死し其餘移住露人と生存競争の大渦中に戦ふて優勝劣敗自然に消滅し日に其數を減じ露人移住する者月に益増殖し今や其差七分の六に居り漸々たる貝加爾湖岸空しく石器時代人烟繁殖の跡を寒雲荒草の中に留むるのみ今高原三州を除き悉比利各州の人口を算せんに多波爾斯科州百三十餘萬多摩斯科州百三十萬義爾克斯科州四十二萬後貝加爾州五十五萬雅克斯科州二十八萬也尼賽斯科州四十六萬黑龍州九萬沿海州十萬薩哈連島二萬合計四百五十二萬餘其餘移住者年々益多近年東部飢饉の爲に其數殊に多し他日人口増殖亦將に測る可らざらんとす且つ露國毎年人口の増加二百萬而して悉比利の野廣く其地味南方尤沃饒にして寒氣凛冽羊積往々凍死すといへども夏月暑氣又甚しく水瓜を産する地方あり北緯五十五度の地に至るまでは穀類を産す其以北も亦往々穀物を産す故に南部人烟愈増して而して物産愈殖し物産愈殖して交通益盛なり現今悉比利の河湖を往來する者汽船百三十四艘帆船二百四十艘にして其内汽船四十餘艘は黑龍江烏蘇里河に屬す露都聖彼得堡より烏拉西俄斯德港に至るには汽車新諾哥羅都に至り汽船河によりて比耳摩に出で又汽車を買うて烏拉山を越え朱爾より汽船多波

爾斯科を経て多摩斯科に入るを得此の間船運くして日を費すより旅客驛車を驅る者多し多摩斯科より義爾克斯科に至る驛路大約一千六百露里水運の便なし義爾克斯科より斯特勒丁斯科に至る大約一千二百餘露里は汽船貝加爾湖を渡るの外亦船を借る可らず斯特勒丁斯科より黑龍江烏蘇里河の二大水を下りて以て烏港附近に達するを得可し一朝鐵道の全通を得ば其便舉げて言ふ可らず人増し地墾け富今日に數倍せんこと固より知り難からざるなりと中佐云ふ

復出湖南

十二月十九日馬に上りて義爾克斯科を發す曩に此の地に至るや直に裏毛の軍服外套を製すミンチノフ氏贈る所の裘袍は携帶する能はず發するに臨みて逡巡に與え秋服外套は兵僕に與え烏里雅蘇台にて買ひし一馬は紀念の爲に哥薩克中隊長に贈りけり義爾克斯科の東北方道路なし此地よりムサバヤ驛に至るまで二百六十露里間隙を旋して復た湖南を行かざる可らず警部長送りて安牙爾河の橋南に至りて別る此より以南一條の熱路興安に跨り亞爾泰を率き風を冒し雪を踏んで行くこと四十四露里モトスカヤ驛に投ず次日驛南直又哈馬爾達崗嶺を上る途上興安を下りて亞爾泰に乗代へんとしける折しも亞爾泰逸し興安之に隨ひ疾馳

止まず中佐重裘雪を踏んで之を逐ひ汗流れて寒を知らず二馬は驛舎の前に立ち待居けり行くこと二十一露里グボルスカヤ驛舎に投ず山中の孤屋なり廿一日山中を行く是より先き恰克他にて蹄鐵を打つ時鐵工誤りて深く亞爾泰の左後足に釘し流血せしめけるが前日湖南の積雪を踏みて足痛みて跛ど爲り將に此の嶺を踏えんとするや腹帯弛び鞍馬腹に轉じ馬驚きて疾走止まず林木に觸れ巨岩に躓き帶断え鞍落ちて馬始めて止まりけり義爾克斯科に至りて醫治十日纔に癒えしも遂に舊の如くならず今亦た積雪を踏み峻嶺を踏ぬて左足益々悪しく乗用は堪へず其負ふ所の吃爾噠子鞍及び旅囊は更に橋を買ふて運はざるを得ず時に湖水氷結未だ堅からず船路梗塞し行旅貨物皆此の道を取り往來頻繁前日寂寥の比に非ず橋を得んこと尤困難にして到處時を費し且つ短晝の候遠く行くを得ざりけり此の夜雪を冒して山を踏ぬ午後八時ムラウキエオアムールスカヤ驛に投ず行程十七露里此の夜驛北二里途に橋に遇ふ雪路を埋む者五六尺雪中一道路に通ず狭くして避く可らず人馬忽ち雪中に轉墜し手網断れ軍刀曲りて弓の如し中佐起ちて軍刀を矯むるうち馬又逸して止まず逐ひ至れば驛舎の前に立居けり翌廿二日行くこと十六露里ウトロクスカヤ驛に投ず次日行くこと四十四露里ス

ニエズナヤ驛舎に入る驛舎に露國の一海軍中尉夫妻の島港に赴く者あり嘗て中佐と義爾克斯科に相知る者布囊中の肉汁及び麵包砂糖等を分ちけり肉汁は氷結せしめて布囊に蓄へし者なり寒地の旅行に非ざれば見る可らず又ベルミニーとて氷結肉饅頭あり湯に投じて食ふ可し富家往々蓄へて以て客に供す亦尤行旅の携帯に便なりと云ふ翌廿四日午前九時發程正午十二時ウドリンスカヤ驛に至れば海軍中尉亦在り橋なきを以てあり午後四時橋を得中尉中佐の鞍と旅囊とを載せて次驛に送る中佐同じく發せしも橋早くして及ばず與安に跨りて亞爾泰を牽き山を上る者十餘露里時に日既に暮れて天黒く夜暗し中佐亞爾泰の手綱を放して與安の後に隨はしむ亞爾泰のいたく疲れてや又は暗夜に恐れけん忽ち足を旋して元來し道に引返し呼べば止り逐へば走り捕ふることを得ず且呼び且つ逐ひ遂に再びウドリンスカヤ驛に至りて捕ふるを獲けり乃ち亞爾泰を繋ぎ鐵鞭を執りて管つ者數十再び驛を出で、行く時に夜已に深くて天黒く風雪交至り二馬又進まず幸に空橋のウドリンスカヤより歸るに會ひ亞爾泰を橋の後に繋ぎ中佐背後より且鞭り且馳せ午後九時ベルムナヤ驛に達す行程二十四露里廿五日行くこと廿九露里ミンハ驛舎に投ず此の夜一陸軍大尉と遇ふ大尉はポヤルスカ

ヤ駐屯罪囚護送兵司令官にして會此の地に來りて罪囚を點檢せし者なり中佐に謂て曰くボヤルスカヤは貴下の沿路請ふ晚餐を與にせんと翌廿六日行くと廿五露里午後一時二十分ムサバヤ驛に達す是れ貿易街道の驛路と會する所にして熟路此に盡く義爾克斯科を去る二百六十露里八日にして達するを得けり前日此の間を過ぐるや水未だ氷結せず汽船湖上を行き明月天に在り湖光山態映帶畫の如くなりけるに此の時夜行月なく湖岸氷結愈東して氷愈よ多く遂に此驛に至りて全く眼界皆氷湖水を見ず絶えて復た濤聲の岸を打つを聞かず道路雪益深く寒も亦漸く甚しかりけり

歳云莫矣

廿七日午前九時馬に上る道路高低起伏し對岸の山影漸く遠く北風面を撲ちて塞威骨に透り湖上一面盡く凍合して氷間水色を見ること稀なり途に一農夫に遇ふ曰く夏は銃を擲ふて熊を獲す今夏熊十二頭獺虎廿八頭を獲たりと以て其湖岸山中熊多きを知るべし一山を下りてボヤルスカヤ驛に至る此に罪囚護送兵三十人あり驛端司令官の官舎あり大尉迎へ入れて饗應惻切なり大尉妻と二女子とを携へて此の地に在る者既に二年猶八年を經ざれば更任するを得ずと云ふ此の地固

より一寒村湖光山色の外心目を怡す者なく兒女の高等教育は遠く義爾克斯科に於てせざる可らず其學資莫大なりとぞ大尉曰く今茲夏家を去る數歩の地にいと大きな熊徘徊し其少女殆んど食はれんとしたりと又一日驛車來掛りしは大熊前より至り馬恐れて進まず熊も亦去らず御者短銃を手に携へざりしより逐ふを得ず聲を放ちて叱咤時を移して熊去り馬始て進み郵便の定期時間を誤りしと云ふ既にして中佐辭して出で又馬に上り湖岸の電柱に沿ふて行くこと數里百一號柱に至りて貝加爾湖と別れて森林中を行き午後六時半ボリセリエチンスコイ驛に投す行程四十二露里廿八日正午零下十二度なりボヤルスカヤ以東色楞格河の水域にして地尤開け人烟繁殖し村落相望り行くこと二十五露里午後一時カバンスカヤ驛に投す戸數大約六百郵電局あり警察署あり林中の一驛と爲す郵電局長來り訪ひ翌日朝餐の招請をなして去る此日頭痛岑々たり廿九日昨來の頭痛稍去りしより午後一時發程道稍平坦雪深く風甚し行くこと二十四露里タカラノブスカヤ驛に投す此の邊猶太人尤多しと云ふ翌日風雪を冒して行く氣候零下二十度なり色楞格河の氷上を行く溪間漸く狭く兩山相迫り夜行くこと久しうして五十一露里ボウキンザスタバ驛舎に投す河岸山麓の孤屋なり其翌日一日

又色楞格河の氷上を馳す寒氣益甚しく零下廿五度に至れり行くこと廿三露里餘午後一時ウエルフチウヂンスク市に達し悉比利亭に投ず此市第一の旅館なり此の夜宵に廿六年の除夜なれども露國の曆異なれば天涯客館突然燈を守りて歳を送る者中佐一人のみ但館内清潔室中温暖充分の食を得て愉快に堪へざりけり曩に恰克他の豪商ミンチノフ氏の手代と一たび貝加爾湖岸に邂逅し再たび義爾克斯科に會しけるが三たび悉比利亭に相遇ひけり奇遇と云ふべし

烏府光景

ウエルフチウヂンスク府は烏達河と色楞格河との合流する所に位し海を抜く一千八百尺南の恰克他東南はベトロフスカヤ東北は知他の道路皆此の地を過ぐ交通往來の衝に當り通商稍盛んに人口大約四五千中に支那人の商戸多し市甚だ大ならざるも建築觀る可き者なきに非ず市の入口に小高き處あり皇太子殿下巡遊の紀念門を立つ門後の二層樓は監獄署なり此に哥薩克騎砲兵一中隊を屯し大砲六門を備へ又罪囚護送兵百五十人を置く亞爾泰駝と爲る復た馬を買はんと欲し且つ人馬休息せんが爲に此に留まる者三日

遙賀新正

明治廿六年一月一日早起襟を正し遙に東天に向て新正を奉賀し魂帝城を馳するを覺えず此の日警部長の午餐を赴き翌二日收税長の晚餐に赴く悉比利亭の前に一豪商あり來り訪ふ曰く往年黒田伯の來遊するや予が家其旅館たりと因て出して伯の寫眞を示す又曰く伯一行の家に入るや言語通せず何れが其伯たるを知らずして挨拶にも困りしが既にして通辨至り髯鬚を繞る一偉人の伯たるを知れりなご物語りけり時に寒暖計二日は零下三十三度三日は零下三十六度に下り復た凍雀の戸外に舞ふを見ず義爾克斯科にて製せし裘套の價百四十留餘頗る不廉なるにも似て品質粗惡裁縫亦拙にして既に破綻を生じ寒を防ぐに足らず因て更に一裘套を製す中佐が馬を買はんと欲すと聞きて馬を牽き來りて一見を請ふ者多し良馬なきを以て之を知他に求めんと欲し遂に買はず

寒威漸甚

一月四日ウエルフチウヂンスクを出で烏達河の氷上を馳する者大約四十四露里オンホイスカヤ驛に投ず氷上本道に比すれば稍遠し此の日風雪背後より來り夜に至りて暴風作りけり五日又烏達河の氷上を行くこと十三露里風益甚しく寒威凜冽馬毛氷結して驪も亦白馬と爲る行くことすべて四十四露里クルヂンスカ

ヤ驛に達す舍内に入りて長椅子の上に横臥するや覺えず一睡頭痛忽ち岑々遂に嘔吐しけり他なし室内煖爐の瓦斯毒に中りしなり露國の民家は丸木を井戸側積にし四角或ひは長方形にして處々窓を穿ち窓は皆な二枚硝子二枚の中間に綿を置き紙の造花かんごを散し内硝子は目張をなし入口の戸には駝又は羊の毛布を張りて密閉寒氣を防ぐ室内中央に土又は煉瓦もて造りし暖炉を置く室内を區劃して一炬能く數室を煖むべし爐は毎朝薪を燒き爐熱すれば薪を去り烟散するを待ちて烟筒を塞ぎ炉腹の小孔を開きて炉中の熱氣を室内に引く室内の密閉如此にして熱氣充滿し熱氣と輿に爐中を出し瓦斯洩るゝ處なく慣れざる者往々毒に觸れて悶絶すとかや中佐乃ち入口の戸を開きしに熱氣外に洩れ寒氣内に入り流通の間蒸發氣の昇騰するが如き現象を見けり露人は斯ばかりの瓦斯毒にも恐れず爐上に段を設けて老人など其上に横臥すと云ふ六日地勢漸く開け路は高原に連れり暴風雪を吹きて霏々紛々日暮れて風雪益甚しく濼々路を辨せず目印の電柱を誤り馬蹄積雪中に没して困頓顛覆せんと欲しやう／＼五十一露里を行きてタルバカタイ驛に達せしは午後八時なりけり七日風又甚し山間の高原を行くに雪少く土凍り滑走尤危し既にして暴風砂雪を捲き眼前數歩冥濛辨せず幾

に電柱三本を數ふるを得時に零下二十六度風に向て進めば呼吸甚苦しく手足殆んど凍り馬亦喘々鼻涕氷結全身皆白じ馬上鉢腰を取り履下馬して氷を拂ひつゝ行く積雪に躓ぐさ深溝に落ち艱苦言ふ可らず途上流囚護送の轎八臺に遇ふ護送兵は轎を下り徒歩して暖を取るも囚徒は覆もなき轎の中に繋かれ風雪の爲に埋りらる其狀憐むべし行くこと二十七露里クリスカヤ驛に投ず八日又山間高原を行く原上沙多く草あり夜行數里寒威二裘を透して全身氷の如く四肢及び指頭疼痛甚しく遂に感覺を失ひ我身に非ざる者の如し行くこと三十一露里餘グリエドスカヤ驛舍に投ず時に零下三十一度九日高原益開け左右山遠く淡墨を天末に抹するが如し朝は零下廿九度帽底衣襟呼吸の觸るゝ所皆氷結し眉睫亦氷を結ひ眺便ならず行くこと二十七露里餘ホレチエナヤ驛に投ず十日地勢稍波狀を成し丘阜起伏せり午後一時半ハグラミンスカヤ驛に小憩す人家稍多し此より以北地勢益開け雪は野草を埋り眼界皆白し寒威前日に比して益甚しく帽底衣襟軍刀小刀墨池鐵鞭悉皆氷を結ばざるなし行くこと四十七露里半ツクル驛に投ず此の驛郵便電信局あり海面を抜くこと三千二百尺上るともなく上りて漸く也伯倫諾威山嶺に近づきしを知りけり

躑嶺向東

前日來途上屢亞爾泰與安の蹄鐵に緊着せし氷雪を拂ひけるに馬蹄凍りて痛みに堪へざりけん遂に手を觸れしめざるより到處蹄鐵工の有無を問ひ蹄下の氷を去り跡に蠟を埋むるを常としけるが此の驛蹄鐵工わりと聞き翌十一日蠟を蹄下に城めしむ蠟は上より流し込むべきを誤りて蠟を蹄下より置き熱鐵をもて壓しけるを中佐驚きて之を止めけり斯くて時刻移り正午發程す驛外左方に一帶の氷田を見る是れを薩斯諾威湖と爲す即ち巴羅伊河の水源なり過ぐる所皆曠原草あり纒に丘阜の小起伏を見るのみ電線一直線に遠く平野に連れり行くこと二十七里ドムナヤ驛に達す高さ三千三百尺なり十二日高原中の森林を穿ちて馬首漸く仰ぐ林木半皆落葉松なり行くこと三十露里コンダンスカヤ驛に投ず次日波狀の地を上ること大約十露里又一丘を踰えて遙に一山脈を望む是れ雅布羅諾威山なり雅布羅諾威は猶外興安嶺と云はんが如し此の日風なく天稍暖なり行くこと十三露里ベクレミセブスカヤ驛の一民家に投ず嶺北高原中の一大村なり翌十四日十時半發程左右山嶺漸く迫り上るともなく雅布羅諾威山の頂上に達す頂上に一堂宇あり堂中に十字架を置けり前面萬山遠く連り眼界快濶なり此の山海面を

馬首向東

振と三千八九百尺もやあらん貝加爾湖黑龍江二大水域の分る所なり嶺東の水皆東流して日本海に入る中佐の日記に曰く明治廿五年二月十一日より今日に至るまで三百三十九日行程九千六百六十二露里即ち一萬零三百餘吉羅大約我二千五百七十五里又貝加爾水域の水を飲むこと八十五日にして始て日本海に注ぐ黒龍水域に出て馬首直に東方に面せしは恍然夢の如く壯快に堪へずと其快真に想ふべし此日行くこと二十六露里嶺下のドムノクルチエブスカヤ驛に投ず驛舎に一露國士官の土魯斯哥薩布斯科より來る者に遇ふ士官携ふる所の麵包冷肉等を分ちて之を饗しけり十五日山腹に沿ひて河溪に下り左折して山間の高原に出づれば起伏波の如し行くこと十九露里正午チエルノハ驛に小憩す此より知他に至る二道あり一は夏道と云ひ一は冬道と云ふ冬道は本道を棄てて河水氷上を行く者稔遠き山阪上下の煩なし故に冬道を取りて氷上を蛇行す山下遙に家屋の相連るを見る是れ知他府なりチエルノハより二十七露里知他府に入るウエルンチウチンスクより知他に至る總て四百四十五露里十一日にして達す其間地勢漸く高く愈上りて愈開き遂に高原に出づ嶺東群山重疊平坦の地少し例年雪少く冬時極殆んど通せず今年の如く雪多くして橋を通ずるはいと稀なりと云ふ此の間

二百九十二
ブリヤット人尤多く主人僕夫皆ブリヤット人のみなる驛舎もあり頗る不潔にし
て甚だ親切ならず食物も乾肉黒麵包を得るに過ぎざりと云ふ

知他風物

知他府は山を繞らし石勒喀河に瀕す人口凡そ壹萬三千貝加爾州の首府にして軍
務知事民務副知事此に治す南は車臣汗部に對し東は大興安嶺を踰えて滿洲の齊
々哈爾城に對する要地なるより哥薩克司令本部を此に置き又貝加爾哥薩克騎兵
一聯隊及び騎砲兵一中隊戰時編制歩兵一大隊を駐屯す元是れ行政上必要の地に
して通商の衝に非ず市中一銀行なきを以て知るべし故に亦役人町と云ふ此の
邊雨雪少く風常に多く健康に適せず眼病殊に多しと云ふ中佐新馬購求の爲に此
に駐する者四日

知他清塵

翌十六日軍務知事參謀長副知事警部部長等を訪問す參謀長は任に上るの前中佐と
與に同日ガチナの離宮に參内して露國皇帝陛下に謁見せし者其後清國北京等に
遊びて此の地に赴任せしは數月前なり相見て久瀾を叙し兵營一覽馬匹購求踏鐵
打易等の事を依頼しけるに直に騎兵聯隊副官を遣はして其打合を爲さしめけり

哥薩克司令本部

旅館馬を留るに便ならず副官の助言に従ひ聯隊樂手の廬にぞ預けたる副知事ク
一ベ氏は眼を患ひて殆んど明を失ひ近日賜暇歸國して加療せん筈なりけるが赴
任の際貴國長崎を経たりとて其雅致を賞し且つ曰く既に露都大臣の通知あり請
ふ貴下の爲めに便利を圖らんと翌十七日副知事の晚餐に赴く警部長も亦會食し
中佐の爲に謀りて曰く今後每驛一哥薩克兵をして隨伴せしめんと時に亞爾泰既
に跋と爲りければ新に馬を買ひて此に乗てんとは思へども與安亞爾泰の交情を
割くに忍びざりけるに今此の便を得て二馬俱に幸き歸らん事に決心しけり此の
日中佐副官と與に聯隊營に至り盡く軍馬を點檢して四十頭を抜き更に六頭を
選み精査熟試して其二を抜き遂に一白馬を買ふ烏蘇里是なり初め義爾克斯科を
出るに當りウエルフネウヂンスク知他黑河等各地郵便局に向て旅費を分送しけ
るより囊金多からせ馬を買ふの餘裕なきより急に烏港の二橋事務官に電報して
送金あらんことを請ひけるに此の地銀行なきを以て一商人の手を経て直に送金
を獲て馬を買ふとを得けるは偏に事務官の盡力に因れり既に馬を得聯隊長
曰く目下故兵解隊し新兵未だ熟せず訓練せし良馬なきは遺憾なりと因て騎兵の
事を語る此の騎兵聯隊ハ六中隊を以て編制す烏港の西バラバシユ駐屯の一中隊

衰弱精練
在養成如
何耳

二百九十四
は其分遣する所なり聯隊兵員の半はブリヤット人の國境哥薩克に編入せられし者なりとぞ彼等は游牧人種にして養馬騎馬に熟すること蒙古人と異ならず洵に騎兵に適する者と云ふべし此の聯隊ブリヤット人を混入するも軍律嚴肅風紀整頓し頗る勇壯の一隊と見ゆけり蒙古人固よりブリヤット人と同一種族にして生活も亦同じ而して一は則衰弱彼が如く一は則精練此くの如し其強弱固より養成の如何に在るのみ其の上たる者留意せざる可からず此の日二馬の蹄鐵を代ゆ翌十八日再び副知事の晩餐に赴き此の夜警部長の夜會に赴く警部長の妻は波蘭の人善く英佛露獨四國語を操り頗る交際長じけり其翌十九日騎砲兵兩科將校團晩餐の招請あり至れば則聯隊長以下樓下に迎へ饗應の間樂隊の奏樂あり辭し去らんとするや中佐を椅子に坐せしめ青年士官擔うて門前に至り樂隊進軍の請を奏して之を送りけり

遙拜龍光

一月廿日正午知他を發す士官六騎送りて市外に至る此より山間河流の氷上を行く毎驛哥薩克兵一名農衣を脱して戎衣を着け交代隨伴しけり行くこと卅七露里午後五時半クルチンスカヤ驛に投ず此より次驛に至る道二つに分る一は本道より

伏拜之恩
優渥之仰
荷龍光之
異數

して十六露里一は河流氷上にして廿五露里なり本道少しく雪あるも丘陵峻ならせ故に翌日近き者を取りて行き十六露里にしてマコウキエバ驛に小憩す河上の一大驛なり此より河流の氷上を馳せ哥薩克の三村を過ぎ更に行くこと二十三露里ツリナバボロシユナヤ驛に投せ翌廿二日將に驛舎を出んとするや知他府警部長使を遣ひして一書を致す中佐取りて之を見れば則郷書なり披きて之を讀むに我が叙聖文武なる天皇陛下中佐の壯圖を嘉賞し玉ひ去年十一月内帑の金貳千圓を賜ひしことを報せるものなりけり中佐感激涙下り伏て天恩の優渥を拜し仰ぎて龍光の異數を荷ひ願みて殊功なきを恥ぢ嗟嘆歎する者久しうして遂に慨然馬に上りけり嗚呼中佐の此の行豈僅に峻要を蹈み兵勢を審にし淳漓を察するのみと謂はんや内にして士氣を鼓舞し外にして國光を發揮す其關する所實に大なり聖明嘉賞恩賜格を出で以て士民をして觀感興起せしめ玉ふ誰か感激せざらん哉此の日行くこと三十六露里カイダロブスカヤ驛に投せ

漸不怕寒

廿三日行くこと五十六露里ガルキナ驛に投せ廿四日行くこと五十八露里カザノブスコエ驛に投せ驛舎に入て主人に向ひ今日は稍暖きにあらせやと云へば主

人否々昨日は零下四十度今日は零下三十九度露國に生れて此の酷寒に慣れし者すら堪へ難きに暖國の人耳をも覆はで馬上の旅行さても達者かなと舌を巻きけるに中佐は自ら漸く寒氣に慣れしを知りけり次日行くこと廿五露里半ミサノバ驛に投す此の三日間は皆音哥達河の氷上を馳せけり河の左岸地勢大に開け哥薩克の屯田屯牧の地たり翌廿六日氷河を去りて山道に入る山に樹木なく積雪稍多し此の日風なきも寒威凜冽たり行くこと三十露里午後六時にして尼爾丁斯科府に達す前日氷上の騎行は一時間八露里此の日山道に入りてより二時間五露里に過ぎ其難易知る可し

尼爾丁斯科

昔時尼爾丁斯科の猶清領たりし時要塞を此に築き尼布楚城と云ひ以て露國に備へけり厥後山川を易て城寨跡なし今の市街は城址を去る大約六露里始て基石を置けるは二百四十年前に在り山を負うて石勒喀河の支流なる尼爾丁斯科河の左岸に瀕し人口大約四千五百亦支那人の商店多し六小學校一監獄あり斯多勒丁斯科豫備歩兵大隊分遣兵一中隊を屯し罪囚の看守護送に任じ又博物館あり悉比利富源の見本を陳列す此の市近傍通商の中心にして附近多く銀鉛を産し交通

山川易主。城寨無跡。

頻繁なり東方滿洲國境なる製鐵場に通ずる築堆道あり車馬を通すべし石勒喀河の水多き時は汽船河を遊りて斯多勒丁斯科より市外四五露里の地に達すべし露國皇太子の上陸ありしは此の地なり此の地高さ三千五百尺斯多勒丁斯科は三千四百五十尺相去ると九十五露里間五十尺の差のみ水勢の緩漫知るべし石勒喀河は遠く外蒙古重臣汗部の國境より發し外興安嶺東の諸水を合せて東北に流れ後貝加爾黑龍二州の界なるバクロボスカヤ驛に至り阿爾古訥河を合して黒龍江と爲る一大流にして中佐の此より經過する所即ち此河の氷上と爲す此の地より大興安嶺を踰て滿洲齊々哈爾城に至る八百露里内蒙古の多倫諾爾に至る一千二百八十五露里北京に至る一千六百七十五露里なり氣候ハ寒氣尤酷烈にして一月廿七日の正午零下四十度に下れり此の地北緯五十一度五十八分に位し我千島の占守島に比すれば北に去ること大約二度深く大陸内地に在り海水の空氣を溫和ならしむるなく直に西北氷海の暴風に面するを以て其酷寒怪しむに足らず例へば伯林は北緯二十五度に位するも極寒の候零下六七度を下らす彼得堡は北緯六十度に有りて猶零下廿五度を下ること稀なり是れ處々海灣多きと西岸墨西哥灣流に注ぐとに基因す水温の大氣に關すること大なるを知るべし

豪華驚目

中佐此に留まる者一日警部長より巡查一名を附し且つ朝餐を饗す後博物館を一見して一獣醫の晩餐に赴き遂に一紳商に導かれて此の地の豪商夫人を訪ふ其居宏壯雄麗巍々として王侯の宮殿の如し別に一暖室を設け室内に熱帯地方の花弁草木を栽植し其規模甚だ大に四時爛熳紅笑ひ黄媚ひ菓實珠の如く一大室内宛然たる百花園なりと云ふ此の酷寒の地に熱地の花卉を弄ぶ豪華の極とや云はん蓋し悉比利中見るを得可らざる者なり往年板本公使此地を過ぐるや此に投宿し露國皇太子も亦此家を以て旅館と爲せりとかや此の夜市長の夜會に赴く紳士貴女相會する者數十人中佐と手を握りて款語し皆曰く明朝市外に送らんと既にして骨牌の戯に夜の深くるを知らず中佐夜食の饗を受けて辭し去りしは午前一時頃にもやありけん

天末鷹聲

廿八日早起装を戒む時に彼得堡のオエウレミヤ新聞通信者來訪ふ昨日彼得堡に向て日本の福島少佐零下四十度の寒天に三馬を牽きつゝ強健鐵の如く當地に到着せりとの電報を發せりなと物語りて去る午前九時發程昨夜見送らんと言し紳

士貴女の影も見ぬ骨牌に夜を深かして疲れしなるべし市外踏鐵工あり馬を留めて蹄下の氷を去り蠟を填め去りて尼爾丁斯科河の氷上を馳すること四露里左岸に一小亭あり露國皇太子上陸の跡なりけり又行くこと數里石勒喀河に會す時に零下四十度宿霧濛々寒威骨に徹し帽底衣襟金屬皆氷結して鼻頭手足疼痛に堪へず行程五十五露里ポトル驛に至る時に午後六時半なり翌廿九日又河流氷上を馳す寒氣亦零下四十度なり午後一時エビハンチエバ村に小憩す又行くこと數里哥薩克帽を戴く者轎を馳せて至る是れなん斯多勒丁斯科の村長警察署長の命を以て來り迎ふ者なりける又行く數露里河流左折溪間漸く狭し時に汽船九艘の氷上に鎖ざさるゝを見る此の船黒龍江烏蘇里河を上下する者なり前面遙に人家を見る是を斯多勒丁斯科驛と爲す行程四十五露里午後五時驛中の一旅亭に投ず此の驛尼爾丁斯科を去る九十七露里皆河流の氷上を馳す是れ所謂冬道なる者夏道は左岸の山間に在り冬に至れば驛をも河岸に移すより行人全く絶ゆとかや馬匹稍疲る乃ち蹄を留むる者二日若後一日二電信を得一は露都公使館員川上俊彦氏の健康を賀する者蓋しノオエウレミヤ新聞の報を見て後發する所氏は嘗て韓米二國に遊び今露都に在り曩に中佐と露英二語の交換講習を爲せし者なり一は

則本邦より烏港貿易事務官の手を経て至る烏港より直に歸朝を命せられし者に
ぞありける

斯多勒丁斯科

斯多勒丁斯科驛は左に山嶺を繞らし右は河流に臨み春夏の候樹翠に水清く江山
の風光尤佳絶と爲す人口凡そ三四千輩備歩兵大隊此に駐屯す此地黒龍江を遊る
汽船の埠頭にして船舶來往の期に至れば行旅貨物皆此に輻輳し繁華難查す故に
中に豪商あり百貨稍備り其便利なること遙に知他厄爾丁斯科の上在り投宿せ
し所の旅館の如き建築甚だ大ならざるも諸事整頓し露國各新聞は勿論英佛獨の
新聞數種をさへ備へて客の縦覽に供せり莫斯科以來注意周到ある如此きを見ず
旅館の主人は波蘭の人當時叛亂に黨して負傷し捕へられて悉比利に流謫せられ
苦役八年放免せらるゝを得て後苦難多年漸く今日の生業を得たりと云ふ叔悉比
利の築堆道東に向て走る者は實に此驛を盡き此より以東殆んど道路なく冬は橋
を驅りて河流の氷上を往來し夏は汽船に依りて河水を上下す汽船は五月上旬よ
り十月中旬を以て期と爲す一日警察官申佐を誘引して競馬を観る山間平地なく
夏は奔馳に便ならず冬は河水氷結一場の好馬埒と爲るが故に競馬は常に冬期河

以東無路

流氷上に於すと云ふ零下四十二度の寒氣をも恐れで觀者群集埒の如し時に一人
醉を帯びて至る須臾にして忽ち地上に倒臥す警官人をして扶けて歸らしむ傍人
曰く五六分も遅れたらんには彼れ必ず凍死せしならんと其寒想ふ可し驛外數露
里の地羊皮靴及び羊毛靴の製造場あり往て見物す又蹄鐵工をして亞爾泰興安二
馬の蹄鐵につけたる防滑釘を打ち代えしめ更に烏蘇里の蹄鐵を代ゆ此の工近村
の哥薩克子弟を養成する者なりと云ふ

氷上蹄痕

二月一日午後一時斯多勒丁斯科を發し行くこと五日百五十八露里にしてゴルビ
ツチア驛に達す此の間皆石勒喀河の氷上を馳す道路は山間に在り狭く且つ峻惡
にして車輪を通せず電柱常に左岸の山間に陰見せり處々村落あり各村民家に我
が御用宿の如き者あり僻地不便なるより豫め準備して官吏などの來往休泊に充
つ中佐の投せしは皆是なり二月三日シルキム驛に至るや驛中の一豪商人を遣り
して中佐を氷上に迎へしめ我家に延きて晚餐を饗しけり食後辭して出で夜行數
里ウストカラ驛に至る驛に郵便局あり一宿して書を託せんと欲し大村長を訪ら
て旅舎の周旋を頼みけるに驛舎にゆけど云ふ驛舎に至れば主人拒んで許さず又

村長を訪へば在らず家人亦駐宿を喜ばず去て民家に入りて一宿を乞へば老夫許さんとしけるを少女草秣なしと断りけり往きつ戻りつ人馬俱に疲れけるを遂に立寄る方もなければ夜寒を冒して行んとするに随伴の一卒疲困甚しく中佐を賤して曰く前日男女二人驛外に殺されたり夜行甚だ危ふしと中佐笑うて肯かず遂に交代して随伴しけり此の夜月を踏んでリユヂンキンスカヤ驛に入りしは夜九時半なり哥薩克村長の夢を驚かして一民家に予案内せられける此の民家の主婦いと懇にもてなしけるに漸く勢を償ひけり翌日疲れを憂起す主婦淹留を勸むるも謝して途に上りしは正午十二時半なり主婦村中の一女友を伴ひ橋を驅りて先づ次驛に至り旅宿の準備なんとして待ち心を盡して慰めけるも固より僻地の民家なれば茶あれども砂糖なく黒麵包あれども一樹の肉なく室は一枚玻璃にして室の内外寒温の差甚しきより玻璃破れて風其の隙より至り室外の寒氣室内の暖氣と戦うて蒸氣の昇るが如くなりけり此の時已に極寒の候にして一日正午零下三十五度二日の正午零下四十四度は寒暖計の示す所に因て之を知るも以下何度なるを測る能はず五日に至りては寒威尤甚しく零下四十四度以下幾度あるを知らず零下四十五六度乃至五十度にもや下りけんと覺えて中佐の強健鐵の如き

寒中人馬

も亦殆んど四肢五體の凍に堪へざりけり此の極寒の天地に立てる中佐の衣物を録するも亦蛇足に非ず下には毛莫大小の襦袢と袴下上に軍服毛表の皮袴を重ね毛裏の制服套を着てダハと云ふ皮もて製せし裘袍を襲ね表裏皆毛の帽子に耳覆をなし外套の長襟を披き襟巻もて縛りて首を包み手には拇指と四指との二袋なる手袋を用ゆ是れ五指相分つときは寒氣縫目より入るを以てなり且つ四指を一にすれば温度相通じて暖なるを得べし足には毛莫大小の靴下二枚靴は羊毛をたゝきかためし者にして縫目の寒を引くなし零下十四度迄は靴下の上を紙にて巻き通常の革靴以て寒を防ぐべく或は靴中に羅紗をつけし者或は毛靴以て二十四五度の寒を防ぐ能はざるに非ざるも零下廿五度以下に至りては羊毛靴に非ざれば防ぐ能はず衣物如此にして衣囊中の金屬猶氷結白色と爲る四肢の凍知るべし零下七八度鼻中既に氷を結び呼吸する毎に粘着する者の如く鬚眉毛帽底衣襟外套胸部荷も呼吸の觸るゝ所皆同じ睫毛亦氷を結び垂れて氷柱を成し以て視線を妨げ少時目を閉づれば氷之を鎖して直に開き難きを覺ゆ斯て遂に寒暖計を檢せざるも身邊の氷を見て其度を知るに

三百四
至りけり且つ馬を馳する毎に帽子身體に隨ひて動き動く毎に寒氣其隙より侵入し腦凍りて痛を覺えしと云ふ馬も亦行くこと未だ幾ならずして全身忽ち氷結するより少くも一時間毎に下りて之を拂ひ又鐵蹄の氷を碎去りけるが後には痛みて手を觸れしめざるを繩もて首を縛り一後足に引かけて地に離れしむる時は自由に前足を動かすを得て苦もなく四足の氷を去るを得けり斯る寒天にも魔を得る能はずして終夜露天に立たしめけるこそ哀なれ河流の氷上に幅二尺長さ二三間の穴を穿ち周圍氷を積みて柵に代ふ是れ井戸なり氷の厚さ凡そ三尺穴の傍に棒あり穴中の氷を碎きて水を得以て馬に飲ふべし穴中の水は氷結せず氷結するも薄しと云ふ

村家招飲

ゴルビツチア驛に入りし時猶正午十二時なりけれども次驛のいと遠きより驛舎に投じけるが馬を繋ぎて木の長椅子に横臥するや覺えずも一睡しけり夢覺ひれば頭岑々として痛み嘔氣を催はし脈搏百餘呼吸も亦苦し必定食前菓子を通食して腸胃を損じけんと思へど藥なし例の虎列豫防の阿片劑を數滴服用しけるに頭痛益甚し翌六日此に逗留す脈搏百餘晴雨計をもて熱を測るに百十度を示せ

村僧救護

り寒氣に中りて熱病にや罹りけんと思ふも醫藥を求めん所なければ巾を水に浸して頭部を冷やすのみ時又午後に至り村民來りて今日拙宅に宴會を催はしぬ來光を賜ひ幸なりと乞ふ今日は病の爲に苦しめり二時間も立ちて稍癒なば好意に應せんと謝して返しけるが二時間経て穩もて來り迎ふ頭痛猶甚しけれども乞ふことの切なるに黙止がたくて強ひて赴きけるに村民數多打集ひ酒飲み胡弓彈かせて騒ぎ居けり蓋し此の家の命名日にもやわらん主人中佐の爲めにシャンパンをぬき盃を擧げて健康を祝しけり田舎にては奢の沙汰なるべし酒酣に耳熱し衆皆歌呼して歡を盡しけるが座中の一人醉に乗じて中佐に侮慢を加へけり座に一僧あり氣の毒じや思ひけん中佐を救護し相抱きて接吻しけり座客之を視て肅然襟を正し復た敢て暴言を吐く者なし宗教の邊邑愚民に於ける威力如此しとなり樂手善く胡弓を彈き悽惋鳴咽過雲の妙あり中佐主人に託して五留を與へて纏頭と爲しければ樂手感謝止まず去るに臨みて衆客起ちて戶外に送り樂手は寒天帽をも戴かて胡弓を彈きつゝ門外數十歩の地に送りけり客に一老婦あり強がちに我家に來り玉へ茶一つ參らせんと乞ひ自ら美しき橋に同乗して我家に伴ひけり村中第一の豪家なるべし家財器具も見苦しからずやがて茶を命じ酒食をさ

へ進め扱妾は支那人と金坑に關して訴訟あり貴客哈巴羅夫略を過ぎり玉は妾が爲に一言の援助を賜るまじくや平に〜と乞ひけり中佐予は旅客の身斯る囑託に應じ難しと辭しけるも折あらば御口添をと乞ふて止まず又も自ら我橋に同乗して中佐の旅宿に送り重ねて金坑の事を語出で首を地につけんばかりに三拜九拜して頼みつゝ歸りけり歐洲婦人の倨傲なる風俗にも似ぬ老婦か腰の低さ怪しみて問へば彼は猶太人の女房にぞありける午前の頭痛甚しかりしにも似て午後外出してより頭稍軽さに始めて熱にもあらず胸胃にもあらず瓦斯毒に中りしを知り此の夜は爐火を滅し戸をすかして空気を流通せしめければ心地稍快復しけり

老兵出迎

七日の朝一老農來り訪ふ白髮皎髯狀極めて矍鑠自ら曰く今年百歳なりと其辭し去るに臨みて酒錢一留を與ふ一婦人之を聞きて來りて救助を乞ふ年猶壯し四十哥を與へて叱して曰く汝四肢健在力を勞して以て自活すべしと彼れ赧然として退く此の日石勒喀河の氷上を行くこと二十二露里許左岸に一塞村あり是を貝加爾州村落の終點と爲す一老兵あり出て村外に迎ふ老兵胸部にセバストポトル役

の従軍牌を掛く曰く此の役成兵と爲り尼古來夫斯科に出軍し矢石の間に出入せりと當時従軍の將卒多く皆凋落今猶此の従軍牌を掛くる者落々晨星の如し老兵時に年少の爲に當年の事を説かば其鼓舞作興の効蓋し妙からざるべし彼れ中佐を我家に延きて小憩せしめけり

七難所

老兵と別れて又氷上を行く此より東北巴古勒夫斯喀雅驛に至る迄殆ど二百餘露里我五十餘里の間一村落なく河岸唯七所に孤屋あるのみ以て橋の繼立を爲す孤屋七軒相去る甚だ遠く其間岑寂人烟を見ず世稱して七難所と云ふ皆石勒喀河の氷上を行く者なり此の日午後五時ウオスケレンスカヤの孤屋に投ず行程三十露里八日は零下四十四度氷上を行くこと二十二露里サボリンスカヤの孤屋に投ず家小さく且つ主人禮を知らず時に貨物を送りて黒河より歸る空橋數十臺一列をなして至る馬を河水氷上に放ち草秣を孤屋に得て與ふ橋の看守人病氣なりとて中佐と同室に懇ふ中佐ハ携ふる所のコンニヤク一盃を分ちて親切にいたはりけるが彼は一無頼漢と覺しく中佐の寢息を伺ひて幾度となく室内を徘徊し携帶品を探がし時計を手に取り果ハ藥用の爲に携へしコンニヤクの小壘を盗み

て飲み盡しけり九日の正午零下四十四度行程五十九露里十日は零下三十二度行程三十露里皆河岸の孤屋に投せ

氷上落馬

明くれば二月十一日紀元節にして中佐伯林發程の一周年なり早起東に向て遙に天皇陛下の萬歳を祝し伏て國運の隆盛を祈り顧みて日月の匆匆たるを思ひ征途の迢々たるを望み意氣益奮ひ飄然馬に上りて氷上を馳すること數里ノボロシユナヤの孤屋に小憩す此の間河流曲折皆灣形を成す行くこと數里日已に暮れ四願黯然三馬倏急驛を望んで疾馳汗流れて氷を結び全身皆白し中佐馬を下りて氷を拂ひ率ひて徒歩すること少時時に隨伴の一卒橋を飛ばして前驅し相去ること已に遠く亞爾泰與安二馬も亦尋いで先づ馳す率く所の烏蘇里氣益懍ぎ亦隨ひて馳せんとす中佐之を止め乘らんと欲して能はせ路傍に氷塊の堆然たるを見て其上に立ち盤を握りて左足に鐙を置き將に右足を舉げて鞍に上らんとす馬又走りて止まき中佐一足鐙に在り一足未だ地を離れず盤と鞍とを執りて逐ふ者數歩蹇重くして身輕からせ將に復右足を舉げんとす腹帶弛び鞍腹に落つ馬蹇きて騰蹄逸去し中佐忽ち氷上に墜落し頭を堅氷に觸れて痛く左の腦底を撃ち右手足

發程後一周
年。落馬傷
頭

冥然待死

の裏盡麻痺し目眩めきて起つ能はせ氷上に臥す者久し既にして厥然として起つや頭顱寒を覺ゆ帽を脱して之を検すれば則鮮血あり淋漓として帽及襟を沾はす手を以て傷を摩するに殆んど子指の指頭を没す中佐意に謂へらく大事去矣と氷上に坐して冥然死を待つ死せむ時に天地寂然中佐茫然既にして從卒橋を驅りて至る曰乘馬先づ至り鞍覆りて人なきを見其變あらんことを恐れて來り迎ふ如何んくと進んで其血潰へて頭に滿つるを見愕然扶けて橋に乘らしめんと欲す中佐肯かまして馬を求め外套の上帯を解きて綱帶に代ぬ氣を鼓して起つや眩暈して行く可からせ遂に橋に上りて馳する者七露里ウチヨスナヤの孤屋に入りけり

決死幸免

此の間河上一小舎の外村なく驛なし曷ぞ醫と藥とを得ん中佐謂へらく重傷を七難所間に得竟に治療の施す可きなく絶命今夕に在りと其孤屋に入るや直に旅囊を開き文書を收束し本邦に送る準備を爲す時に主人其傷を負ふを見て進んで曰く此を去る七露里一小金坑あり坑夫の爲に一看病夫を置く彼れ稍醫事を解すと中佐以て天幸と爲し主人をして橋を馳せて迎へ來らしむ三時間を経て看病夫至

決死不死
可謂天幸

三百十
る創を洗ひ傷所の毛を剃りて曰く傷甚だ危険ならず若し左右前後一寸の差あら
んには立ちどころに死したらんと奇薬を貼付せんとすれども血出る甚しくし
て附着せせ因て布に石炭酸を浸して創を覆ひ綿帯を施して明日早天來診せんと
言殘して去る今夜發熱熾衝は尤戒しめざる可らざるより氷塊を枕上に備へ創
を冷やさんとするも室内人なし自ら氷を頭に加へ終夜眠る能はざりけり翌日待
てどもく看病夫來らず遂に十二時に至りければ亦主人をして往きて迎へしむ
此の時始めて防腐薬と防熱劑とを携へ來り再び傷を洗ひ防腐薬を塗り綿帯を代
へて出血漸く止むを得けり出血止まざる者二十一時間全身總て蒼白色に變じ平
日壯健にして脈搏高きに著しく低下せしを覺けり二小窓を穿てる不潔の室
内に在りて外套をまとひつつ木の長椅子の上に横臥して病を養ふ者四日斯る病
中とても手助あらざれば時々自ら室外に出でて三馬を看守せざる可らざるが爲
に風邪を患ひ咽喉加答兒を生せしより看病夫に薬を乞へども忘れたりとて與へ
せ去れども頭傷は疼痛こそ止まね熾衝をも起させして漸く快方に赴きけるより
十七日は兎も角も出立せんとぞ決心しける此處の主人は親切にもして鶏肉鶏
汁肉など進め心を用ひていたはりけり嗚呼壯圖未だ遂げせ中道にして重傷を此

の險惡僻遠の地を得て而して不幸醫藥なくんば如何ん是れ此の偉丈夫天涯一坏
の土饑頭と爲らんのみ幸に一看病夫を得て急を救ひ創を洗ひ以て復た馬に上る
を得しは豈天幸と謂はざる可けんや

裏創上馬

二月十六日午前九時創を裹みて馬に上る馬馳すれば腦に響きて痛みを覺ゆるよ
り徐々として行く此道東に向ひ朝暾に面して稍暖なり午後三時三十五露里を行
きて七難所を出でバクレンブスカヤ驛に達す石勒喀河此に至りて阿爾古訥河と會
して始めて黒龍江と爲る此の驛即ち黒龍州の第一驛なり左岸地勢稍開け右岸滿
洲の地の大興安嶺脈の群山重疊直に江水に臨めり此の夜村長の家に投ず室内清
潔肉及び肉汁を得て七難所間の勞を醫しけり自ら創を洗ひ綿帯を代ゆ時に創口
稍開きて血出でけり

阿爾古訥河

阿爾古訥河は車臣汗部の克魯倫河呼倫湖貝爾湖及び大興安嶺西の諸水を合し清
露の國境を劃して北流しバクレンブスカヤに至りて石勒喀河と合し黒龍江と爲る
一大河にして西岸露領の地は國境經界の哨處及び哥薩克村相望み村落河に臨み

て星羅す東岸清領の地に至りては上流二湖の傍ら呼倫貝爾に一副都統を置き兵員少許を駐むるのみ沿岸一帶寂として人烟なく沃饒の地空しく荒草に委す此の河水量渺なからざるも中に急湍多く船を通ずる能はず又た頗る魚類に乏しと云ふ

黒龍江上

バクレプスカヤより黒河に至る大約七百七十露里即ち我二百零五里許殆んど我東京と備後尾道との如し其間唯八村落三十一驛站あるのみ其四驛は則江上の一孤屋なり其他江上一路人烟を見せ皆黒龍江上の氷を踏み時に或ハ江に沿うて岸上を行く黒龍江は清露二國の境を劃し左岸一步露領に入り右岸一步清領に入る清領滿洲の地は人烟殊に稀にして沿岸寂寥たり左岸露領の三十九村驛は此の地露領に入りてより以來新に設けし者にして其内一驛四五村を除くの外は皆哥薩克村にして黒龍江哥薩克騎兵聯隊の徵兵區と爲す七百七十露里間の各村を分ちて六區と爲しバクレプスカヤ、イグナシナ、アルパデン、チヨルニエバ、コマルスカヤ、エカテリノブスカヤの六驛を以て六區の本部と爲し毎本部に大村長小學校郵便電信局汽船定繫場を設け看病夫一人を置く故に我が二百零五里の間六小

馬始入ニ黒龍江上ニ

學校六郵便局あるのみ一醫師なく看病夫をして醫藥を掌らしむ其他小哥薩克村には各村長あり大村長に屬し又民村には百長什長あり村長に屬す大村長に隸屬せし地形はバクレプスカヤよりアルパデンに至る百九十二露里間兩岸皆山平地尤少く寒威凜冽耕作に適せざるアルパデン以南愈下りて地勢愈開け山基尤峻峻ならせ平地稍多く南するに隨ひ寒氣も亦酷ならせ以て耕作すべく人烟漸く密なりと云ふ

清曆元旦

二月十七日午前十時バクレプスカヤを發して始て黒龍江の氷上を下る時に零下廿五度なり氷上漸く廣く左岸懸崖數百丈直に大江に臨み風光壯絶是れ黒龍江水の大興安嶺を横斷する所なり徐馳三十一露里午後三時アマザル驛に投ず驛東江を隔て、滿洲の山下一小村と相對す村より歩隊一小營あり兵員少許を屯す營外數旛の黒旗を立つ賊に今日は清曆正月元旦なり彼の黒旗數旛は新正を祝するなるべし中佐聞く此村を去る二十露里山間に一金坑あり一千八百八十五年露國亡命の徒の發見する所掘掘年あり既にして清國政府之を聞き兵を出して之を逐ひ金坑を復して探掘し歩隊を置きて之を監護す今現に坑夫五十餘人ありと數年以

前滿洲金坑事件と題して新聞紙上に驚々たりしは即ち此の地なりけりアヤザル驛の人家八戸投する所の民家頗る不潔寢臺を上るや長さ五分ばかりの虫無數群をなし壁を傳ひ床を攀ぢて歩趨響あり襟に入り衣に滿つ肌膚を蝨ねども煩悶に堪へず乃ち波斯粉を撒布して之を防ぐ翌朝之を検すれば床下虫屍算なかりけり波斯粉の殺虫劑にして悉比利旅行に缺く可らざる者

漠河梟首

十八日冰上を行くこと二十二露里イグナシナ驛に次る此の驛戸數大約四十區役所あり創猶出血す乃ち看病夫を招きて綱帶を代ゆ咽喉病未だ治せず合嗽劑を得て之を服す此の日途に滿洲の漠河を過ぐ漠河は江を隔て、イグナシナと相對す此に鎮邊軍歩隊一營を屯す一營四百人は亦金坑事件後に置く所營を繞らすに難を以てすると清國內地の城堡と同一境上の懸軍常に便を露領に仰ぎ道を黒龍江の舟に借るに非ざれば直に滿洲内地に來往する能はざる所謂糧に敵に資るにや去るにても不便と云ふべし此の日營上數旆の黒旗を建つ亦新正を賀するなるべし往年東京の役黒旗兵勇敢善く戦ひ屢佛軍を破る今此の邊軍喜んで黒旗を用ゆ豈其餘勇を買ふ者歟河岸一艘の支那船を製造するを見る江上來往の便に供する

清兵往來借道於露

なるべし漠河村外黒龍江上に三脚の木を交又し中に木の籠を吊せしを見る怪しみつゝ近づきて見れば籠の中には支那人の首級あり辮子辮髮の尾を籠の上に結びつけたり日數経けんと覺しきも寒風にさらされて顔色深黒未だ腐敗せず定めて是れ梟首なるべし一葦帶水を隔て、目に觸るゝ者皆奇異ならざるなし

寒村光景

十九日午前九時零下廿六度行くこと二十七露里半スギブチバ驛の哥薩克民家に投す此驛すべて十戸河岸に點々たり投せる所の民家小にして且つ不潔窓は一枚玻璃内外寒熱の差甚しきより玻璃憂然として破れ風窓隙より至り寒言ふ可らず鶏鶩等皆室内に養ふ室外に出せば直ちに凍死すとなり夜は洋燈なし松火を燒きて明りを取る此間の寒村皆然り廿日風左岸に雪柱を見るも其下道路なし行くこと四十露里許スウエルビエバ驛に投す戸數卅餘家鶏又室内煖爐の側に在り冬時卵を産せず其戶外に在る者五六七八の四箇月に過ぎず此の地殊に寒く羊を牧する能はず夏猶殘雪あり北風起れば裘袍を重ぬとかや此の日與安脊中や痒かりけん鞍をつけしき、地上に展轉反側し旅囊中の寒暖計を折る此より黒河に至るまで寒度を測る能はず廿一日行くこと三十五露里オルロバ驛に投す亦一寒

村なり此の間河流屈曲羊腸の如し故に氷上を行く十露里左岸に上りて山路を蛇行し興安嶺を踰ゆ嶺上眼界空濶一帯の氷江脚下に曲折し風光尤佳なり山林すべて松樹林を成せり村落は大抵樹林の間に在るが多きに此の邊の村落は皆河岸に在り樹木の村を繞るなく遠く望めば砲臺なんどの如しとなり

雅克薩城

二十二日ロイノワ驛に小憩す戸數二三十支那人の商店二三あり聞く先年日本婦人二名此に來れりといふこと三十露里半アルパチン驛に次る此驛ストレンスキ以東の一大驛にして旅宿も亦清潔罕に見る所なり昔者清領たりし時雅克薩城を此に築き屢露と戮を生せしことあり今や風霜漸然滄桑容を改め其城も亦求む可らざる翌二十三日馬を此に駐む

古城跡

頭痛漸愈

二十四日行くと六十四露里ベリミキナ驛に投す前三日頭創血痕を見ざりけるが今日よりは疾驅するも疼痛を覺えざりけり此日一民村に小憩す日曜驛と云ふ日曜驛に至るまで左岸の平地を過ぎ樹林を穿ちて行き日曜驛以東四五露里にして又江上を行きけり此の夜民舎長虫多く且つ壁を隔て、兒啼嗷々終夜眠る

能はざりけり

右清左露

廿五日高原林中を行く山脈漸く低くして且つ遠く地勢漸く開けて且廣し又河流氷上を行く右岸滿洲の地に一孤屋あり小旗を掲ぐ即ち國境の哨處なり是より江流漸く廣し行くと四十七露里タルブデナ驛に投す主人床上に藁を敷きて枕に就かしむ是れ此の邊の御馳走なり翌廿六日右岸に上りて清領滿洲に入り林中を行くと數露里又氷上に出で午後左岸露領に入りマガノバ驛の孤屋に小憩す左一步露境に入り右一步清に游ひ江上一路互に兩國の土を踏む快遊と云ふべし又氷上を行き更に左岸林中を過ぎ日暮オリギナ驛に入る行程四十八露里村長例の藁を敷きてもてなしけり此の日ダハの裘袍を脱して復た寒を覺え地漸く南して天漸く暖になりゆき寒暖計なければ度を知らざるも零下二十度を超ぬざるべしと覺えけり翌廿七日行くこと廿七露里チオルニエバ驛に入り大村長の家に投す此の邊一帯夏は蠅蜂多く深夜に非ざれば往來す可らずと云ふ大村長は三年を一任と爲す此處の大村長任に在る者既に九年猶重任一期十二年に滿つる時は銀製紀念章を得べしと云ふ此の地をバクレンフスカヤ以東第四區本部と爲す

江上一路
右清左露

りて河岸のホルサコバ驛に休憩す戸敷二十餘村長待つ者久しかりきとて優待措かせ午後三時電柱に沿うて行くこと大約十露里又氷上に由て行程六十三露里ヌオチナヤ驛に投ず亦郵便積立の孤屋なり此の數日間齋日なりとて肉を食はず到處捕獲の魚肉のみ魚肉を包める麵包を得て食す次日地大に開け左岸に善路あるも天漸く暖に雪既に解けて馬蹄に附せし防滑釘却て騎行を妨ぐるより氷上を行く五十一露里エカテリノブスカヤ驛に達し大村長の家に宿す哥薩克徵兵區本部の地此驛に至りて盡く

黒河歓迎

八日午前八時馬に上る江流氷上は曲折多く路太だ遠きより防滑釘の不便あるも電柱に沿うて陸路を取り直に東南に向ひて行くこと大約二十一露里遙にイグナチバ驛を望む驛外二騎士あり中佐を迎へて進んで曰く貴下は日本の福島中佐に非せや曰く然り曰くブラゴウエヌチエンスクの哥薩克騎兵一中隊來りて貴下を此に迎へ待つ者已に久しと一騎先づ馳去る途に村長の制服を着制杖を携へて來迎るに會ふ驛に入るや哥薩克一中隊街側に整列禮を施す中隊長進んで曰く黒龍州軍務知事の命を以て此に來りて歓迎の意を表すと中佐馬を駐て好意を謝し進

んで軍隊の前に至りて禮を施し士官と與に準備の一人家に入りて小憩し尋で又馬に上る騎兵其後に隨ふ午後六時遂にブラゴウエヌチエンスク府に入り直に騎兵聯隊長の官舎に案内せらる騎兵大尉ボヤルスキー氏佛語を善するを以て中佐の東道と爲る氏の家弟も亦騎兵大尉にしてワルシヤウ駐屯近衛騎兵の中隊長たり中佐ワルシヤウを過ぎりし時待遇切なりけるが今又其兄と此に相見る奇遇と云ふべし氏は昔て布爾牙利亞に在り布公亞歷山殿下の親軍騎兵中隊長と傳令使とを兼ねけるが往年露國政府命じて露人の布國軍隊に在る者を召還するや氏も亦歸國し遂に此地哥薩克聯隊の教官に補せられけり深く布國の事情に通るより臂を交へて談論晷を移すを覺えざりけり

黒河紀事

ブラゴウエヌチエンスク府は支那稱を黒河と云ふ黒龍江と日雅河との相會する處に位し右は直に清國黒龍江省と相對し山脈此に至りて盡き此より以東地勢平坦土壤沃饒なり附近鐵山多く貿易甚だ盛に汽船來往するが如し市固より新開に屬するも街衢整然樓臺江に臨み江上又公園あり人口大約九千黒龍州軍務知事副知事此に治す屯する所の兵は黒龍哥薩克二中隊より成る一聯隊戰時編制歩兵一

清國電線之
終點

大隊半砲兵一中隊と爲す又經理部あり此の地江を隔て、相對する一小村を清領
薩哈連と爲す薩哈連一名を海蘭包と云ふ滿洲を貫ぬ。清國電線の終點なり。近者
清露兩國の電線を此に接続せしめ氷上に電柱を架したるが滿洲電信總辦なる丁
抹人シールン氏此地に來り解氷後水底電線を敷設せんことを協議し居けり氏は
丁抹國工兵中尉にして後大北電信會社役員と爲り尋で清國政府に聘せられ吉林
に在る者六年頗る地方の形勢事情に通じと云ふ海蘭包は瑛琿城を距ること大約
八十清里なり

駐馬十日

三月九日軍務知事及び副知事其餘各隊長を訪問す軍務知事は砲兵少將にして昔
て哈巴魯夫略に在りて後貝加爾黑龍江沿海三州の砲兵監たり尤重を中佐の遠征
に置き優待至らざるなく力を盡して其便利を圖りけり此の夜騎兵聯隊將校團の
中佐の爲に宴を張りて之を饗す軍務知事及び各軍隊の長官皆來會す洋々たる奏
樂の間主客の席定まり宴漸く酣なる時軍務知事盃を舉げて起ち中佐の健康を祝
して名譽なる演説を爲しければ中佐乃ち起ちて答辭を述べ尋いで騎兵聯隊長も
亦起ちて演説をなし主客歡を盡し高興座に滿ち眞に一時の盛會なりけりさて此

一時之盛會

の地より馬首を二轉して滿洲諸城を歴訪し遂に瑛春より烏港に出んことに決心
しけるより翌十日烏港の二橋貿易事務官に電報して旅費八百留の送付を乞ひけ
り是より先き蒙古を過りし時清國官吏驗査放行の字に拘泥して草秣あれども與
へず旅宿あれども許さす頗る無益の時間を費やせしこと多かりければ今又清領
に入らんとするに當り斯る煩擾を避けんが爲に北京の大鳥公使に電報し總理衙
門に照會して適當の助力を與ふべきやう地方官に命せんことを乞ひ三日逗留し
て其返電を待んことをも言送りけり十一日電報至り始めて中佐に昇級せしことを
知る此の日獨逸紳商ボツベ氏の午餐に趨き丁抹人パウレン氏の夜會に招かる
パウレン氏は黒河に在る者久しく多く地所を有し近來繁華の場とありて地價
暴騰せしより歳入莫大なりと云ふ十二日哥薩克騎兵第一中隊長の夜會に赴く氏
は中佐と同日同時に中佐昇級の辭令に接しけるより其祝宴を張れるなり此の日
大鳥公使の返電至る願意許されたりとありけり今日は歴山帝の崩御日翌日は
今上帝の即位日なるより兩日共に露國官吏軍人の正服寺院に上る者甚だ盛なり
十四日副知事來訪して曰く軍務知事と謀り貴官滿洲跋涉の便を圖り瑛琿副都統
及び齊々哈爾將軍に向て通知書を發したりと時に中佐の逗留は三四日の筈なり

けれども烏港の送金運引し遂に馬を駐むるもの十日に及びけるが其間常に騎兵
 聯隊長の官舎に在り或は官吏の饗に赴き或ハ紳商の燕に列し追隨徴逐殆んど虚
 日なかりけり十七日海蘭包なる清國の警部長隨員譯官三名を率ゐて來訪ふ是れ
 軍務知事の通知を得たる致琛副都統の命を以て中佐の状を探る者なるべし中佐
 の出立日時を問ひ且つ護照の有無を問ふ中佐出して之を示しけるに例の驗査放
 行の文字のみなるに疑を抱くもの、如し中佐曰く憂ふる勿れ予已に北京に電報
 して總理衙門に請ふ所あり其返電を得たりとて電報を示すも彼れ英文を知らず
 且つ電報紙面に總理衙門の印章なしとて怪訝の色あり印章をも電報し得べしと
 思ふにや抱腹絶倒十八日中佐海蘭包に至りて答禮をなし明日を以て發程し致琛
 に至るは廿日ならんと告げ且つ試みに國境河岸に郷導を出さるゝや如何んと問
 ふに彼れ答辭模稜左右を顧みて他を言ひけり此の日旅金を得清國通用の銀塊と
 交換せんと欲しポツベ氏と與に海蘭包の支那商に謀るも數日を費して致琛より
 取寄せざる可らずと云ふに去らば致琛に至りて交換せんとて露貨を携ふるに決
 し午後新知の人々を訪うて別を告げり

入愛瑛城

三月十九日午前十一時ブラゴウエヌチエンスク府を發す黒龍江哥薩克聯隊長及
 び聯隊將校并に同第一中隊は軍裝し長槍を携へて送る市中に小立して寫眞をな
 し直に黒龍江氷上を渡りて滿洲に入り行くこと五露里許一松林に至りて聯隊長
 及び各將校と別る騎兵大尉ポヤルスキ氏及び第一中隊と與に右岸に沿うて幾
 村落を過ぎ又氷上を渡りて左岸に上り哥薩克第一哨處に小憩す此處は府を距
 る十五露里江上の一孤屋にして下士卒十人を屯す一卒の胡弓を彈する者あり軍
 歌に和して數曲を彈す又左岸を行く者二十五露里午後七時半哥薩克第二哨處の
 東隣なる黒龍江汽船會社の支店に投宿す府の本店より照會ありければ準備し
 て待ち居けり第一中隊の大尉一名中少尉二名及びポヤルスキ氏も亦此に同宿
 す此の夜中佐中隊長に乞ふて十留を第一中隊の下士卒に與へ以て其勞を謝しけ
 り府以東此に至るまで一帯の地方に在る滿洲人猶一萬數千人を下らずと云ふ
 此日天曇りて風寒く正午零下十度に下りけり翌廿日一清人愛瑛より至る黒龍江
 省駐防八旗の籍に屬する者屢露傾に入りて通商に従事し燕麥賣買の爲に此地に
 も來往して支店の主人とも相知れる者にして其露語に通せるより今は愛瑛副都
 統の譯官たり其名を孫功額布と云ふ此の日孫の來れるは副都統の内意を受けて

中佐の状を察せんとてなり午前十一時半直に黒龍江上に臨みて右岸に遙に愛琿の市街を望む中隊長騎兵を整列せしめて別を告ぐ中佐馬を其前に立て、左様おらの一言もて相別れつゝ氷上を渡り午後一時五十分行くこと八露里滿洲黒龍江省の愛琿城外に入れり去年十一月廿五日清領蒙古を出でて恰克他に達してより以來百十五日にして再び清領の山河と相會しけり時に孫及びボルスキ一氏并に一騎兵と同行せり孫曰く僕愛琿副都統大人の命を受けたり請ふ貴官を伴ひて衙門に至り大人を訪はんと乃ち相伴うて先づ孫の家に入る天暖に雪解け道路泥濘汚穢尤甚し孫の家は城東門外に在り純然たる支那風なれども窓には玻璃を用ひ窓間花卉の盆栽を陳し壁に露國兩陛下の像及び露人二三の寫眞を掲げたる自ら歐化の氣を帯びけり

愛琿城中

愛琿城は圓木を縦列して以て之を築けり東西南北各一門あり城中副都統衙門副都統府及び電報局あり市は西門外に在り人家櫛比實に繁盛の區たり然れども衙路狹隘泥濘汚穢名狀す可らず既にして孫と與に去て副都統衙門に至り副都統を訪ふ事に託して面せず事皆要領を得ず此に至りて總理衙門の照會未だ至らず謹

嗚呼此奈之何

照中驗査放行の文字稍障礙を爲すを知りけり乃ち城内を一看して去る抑愛琿は小興安嶺を控へ黒龍江流に臨み一水を隔て、強露と相對す實に邊境の重鎮と爲す故に副都統を置き八旗二千三百餘人を駐す明治十六年時に中佐北京に在り清政府は八旗子弟を選抜して江上に練軍を編制し洋槍歩兵一大隊拾槍二人一銃を用ゆ銃は火繩筒歩兵一大隊を置けり爾來已に十年此の間歐洲各國の軍事進歩驚く可き者あるにも拘らず此の地當年の練軍は今既に其實を失ひ僅に鎮邊歩兵一營騎兵一營の駐屯するのみなりと云ふ嗚呼

電報局

電報局は副都統衙門の傍に在り清國北部の電線即ち山海關より錦州牛莊奉天を経て滿洲北部に入る者吉林に至りて分れて二と爲る一は黒龍江省を貫ぬき愛琿を経て海蘭包に至り露國電線と聯絡し一は東折して寧古塔琿春を経て露國境上に至る延伸實に數百里に達するも局は七處に過ぎず海蘭包愛琿齊々哈爾新吉林寧古塔琿春是なり光緒十三年電線架設以來已に十四年久しからざと爲さるに官民皆之を利用する所以を知らず緊急の事あれば驛馬に託し日行六百里八百里の名を以て發送するを常とし千里一瞬飛電以て傳ふる所以を知らず故に愛琿

の如き通商繁華の地にして、一箇月電報取扱の數平均五十に過ぎずと云ふ以て其一斑を卜すべし技師は概皆南方廣東附近の人にして能く英文を解すと云ふなり

愛理問話

市の南に一廟宇あり三家廟と名づく廟側旅店あり汚穢固より厭ふに足らざるも草秣の馬を養ふべきなし因て遂に孫功額布の家に投じ一日滞在して滿洲旅行の準備を爲しけり孫は一妻一妾あり又數子あり長男年僅に十五己に妻あり亦十四五なるべし中佐孫に謂て曰く早婚は健康を害し教育を妨ぐ何ぞ娶るとの早きやと孫曰く教育の深きは此の地に在りて無用の長物のみ早く一婦人を侍せしめて兒輩をして放蕩に陥らざらしめ實業を以て四書五經に代へ商賈の驅引と必用なる露語を習はしむるに若かずと答へ且つ貴國も亦一夫數婦を娶るを得るかと問ふ否々一夫一婦の人道の常なりと云へば扱も不都合かな女は早く衰ふるものなれば更に妾を蓄へて世を樂しう送るこそ中國の習なれと語りけり着後一日孫功額布の實弟中佐を招きて晚餐を饗す一庸醫亦陪す曰く康熙年中一日本人始て此の地を過ぎりしとありと其言固より虚誕自ら博識を衒ふ者なるべし一家親族の婦女老幼相集りて障障より視ひ耳語喃々笑聲頻に起りけるが二三の少婦室内に

入來りて兩手に小さき囊を披きつゝ男子の席に進みて一人々々の前に立てば男子も亦立ちて腰を屈めけり是れ禮なるべし孫は座客と相語りて曰く福姓中佐を指すは是れ日本の陸軍歩兵中佐なり中佐の官の歩兵三營を統帶する者にして中華の統領と同一卿等見よ我統領は紅頂子帽頂に紅ありの大人なり該大人公私の旅行を爲すや妻妾僕婢護衛の兵等車馬數十前後列を成し上下百餘人驕從雲の如く送迎宿泊沿道驛站の煩雜言ふ可らま嗚呼該大人と同等の大官にして一僕從なく單騎三萬餘里清里の異域を跋渉す我中國官吏の敢て爲すを得可らざる者なり單騎遠征抑何の爲にする所あるか更に解する能はざるも私事の遊歴に關して露國黑龍州軍務知事の一隊の哥薩克騎兵を以て境上に送迎し公文を以て其通過を報じ電報を以て其發着を通知す事終決して小ならずと言畢て得色あり座客之を開きて疑訝交至り批評隨て起れり或は曰く爲甚麼不帶跟班的這是跟不方便或は曰く膽子大或は曰く這個遊歴跟便易或は曰く他不但沒有跟人而且穿的衣裳很不好這是可樂的事或は疑ふて曰く心裏有一點兒事情或は嘲りて曰く海裏頭的一個小島沒有甚麼意思或は畏れて曰く他們的東西比俄們好多了人也一樣或は遂に同情を表して曰く日本國不是洋鬼子就是漢文漢字的人と罵り乙嘲り且つ語り

且つ笑ひ一場の喧嘩を極め眞に清國の風俗を寫し出しけり饗宴の肴は銅鍋中に牛羊鶏豚鴨雁雉七種の肉と野菜豆素麵とを和して煮つゝ食ふもの其味頗美なり酒は高粱酒と黄酒とにして皆煖めて以て飲むべし彼等の好んで拇指大の盞を擧げて高粱酒を飲ひ此は火酒にして黄酒は米を以て釀造せる者衆皆中佐を目して統領々々と呼びて酒肉を勤めけり清國にては小隊長を哨官又は哨長と云ひ大隊長を營官又は營總と云ひ聯隊長を統領と云ふ統領の上に馬步全營翼長總統等の官あり皆舊制八旗綠營に無き所にして近年勇營練軍の編制と與に生ぜし官名なりと云ふ

錢株車役

錢 さても滿洲旅行に就て尤必要なるは滿洲通用の貨幣なるが孫功額布の周旋にて露國紙幣三百留を清銀百五拾兩に交換するを得けり愛琿は國境通商の要地にして兩國貨幣の交換固より甚だ難からざるも動もすれば姦商の爲に欺ひかれ非常の損と損とを招くなきを保せし抑清銀は兩と云ふも我貨幣の如く定形あるに非き大小不定の銀塊を天秤に量りて其價值を定むるものなり去れども天秤亦數種あり其量一定せし甲の地一兩と稱するも乙の地は九錢に過ぎざる

ことあり亦往往白銅銅鐵等を純銀に混じて白日人を欺く者あり兩換の際尤損を招くこと多しと云ふ銀塊も亦到處使用し得べきに非き必き銅錢と交換して携帶せざる可らき銀兩と銅錢との相場も亦一定の制なく錢舖兩換店の隨意に定むる所故に愛琿にて銀一兩の相場銀三吊文なるも他の地方にては三吊二三吊文乃至二吊九百文なることあり天秤已に一定せざるが故に一兩果して一兩ならず錯雜實に甚し一吊とは一十文の義にして滿洲地方一文を以て二文に算するより一吊一十文と稱して其實五百文に過ぎき一文の大きさは猶我が寛永通寶の如し故に一吊は我五拾錢に中る一吊毎に緡もて一束となし一吊の内百文毎に結目をもて數を示せり銅錢中又惡錢あり盜匪無賴の徒官錢を鑄解して鐵或は泥沙を混じ一文を以て三四文を鑄造す綱紀を紊亂すること甚しきも官之を追究せし一吊中に少くも四五十文の惡錢を混じて通用するを默許せりとぞ扱又銀錢の兩換をなさんと欲するに省城府廳州縣の地は人烟稠密各處に錢舖あるも滿洲の如き人烟稀薄の地に至りては市街大縣甚だ希にして兩換容易ならざるより少くも一日平均五吊の割にて十分五分五吊二萬五千文の準備を爲さる可らき其多くして且つ重き携帶に便ならき人烟繁華の地に在りては錢舖地方官の許可を得て紙幣を發

三百三十一
 行するも脆弱ある唐紙は木板もて種々の番書を印し隨意に何吊と記せしに過ぎ
 せ且の其通用は一市街もしくは其一隅に止り信用ある錢鋪の紙幣といへども前
 後數驛の間に行はるのみ錢鋪の盛衰興敗甚しきより欺かれて廢物を得る事往
 々にして有り故に滿洲の旅行遂に斯る巨額の銅錢を携へざるを得ず
 株 加ふるに滿洲地方の困難なるは草糧なきことなり黑龍江省の北部は蓄草あ
 るも其質粗惡馬を養ふ可らず南部地方吉林省に至りては絶えて草秣なく粟稗を
 寸斷して水を注ぎしものゝみ愛輝墨爾根の間は燕麥あるも墨爾根以南見るを得
 可らず粟稗に麸子高粱小米粟豆餅豆の雜糧を混ざるの外なし慣れし馬はよけれ
 ば慣れぬ馬は食に乏しきより燕麥大小麥或は麸子等を準備するを要す
 車 銅錢二萬五千文及び燕麥大小麥を携へんに二馬は乗用一馬は病めるより駄
 馬亦是車を買はざる可らず滿洲馬は蒙古馬の如く強健ならざれば重を負ふて遠
 に致し難し是に於て荷車一輛を雇ひて銅錢麥類吃爾噠子鞍及び燭臺洋蠟茶砂糖
 馬足止旅囊等を積むことなしけり
 役 既に荷車を要す馬弱くして中佐と同じく馳するを得ず且つ滿洲地方盜賊橫
 行枕を高くして眠る可らず去れども護照に助勢の文字なければ清國官吏の保護

期す可らば是に於て自ら徹夜乗馬を看守せざる可らず連夜眠らず馬を守らんこ
 と固より困難なれば一支那人を雇ひて晝は荷車を監せしめ夜は乘馬看守の勞を
 分たんと欲し孫に謀りて雇入れたり
 銀錢已に兩換し馬糧已に準備し車をも役夫をも得ければ是に於て滿洲跋渉の準
 備全く成りたり

墨龍江站

二十二日愛輝城を發し南に向て行く發するに臨みて愛輝副都統は亮白頂子五品
 官の世襲雲騎尉一人をして隨從せしめ沿道一驛車を出して以て行李を輸送す此
 の日西風強く雪至り寒甚しく悉比利跋渉の服裝して馬に上る地形平坦村落點々
 道路石礫なく騎行甚だ便なり行くこと二十五清里黑龍江站の驛合に投ず雲騎尉
 名は祥雲亦此に同宿す驛舎を官房と云ふ官吏の休泊及び公用の文件物品を運送
 する所地方の繁間に隨ひ驛車數輛驛馬二三十乃至四五十頭を置き驛内の男丁交
 番役に服す驛舎に役人あり人を統ふるを小頭と云ひ馬を管するを馬頭と云ひ人
 馬を總轄するを外郎と云ひ官房を看視するを看房と云ひ食物を料理するを大師
 父と云ふ又人烟繁華の驛站に至りてハ筆帖式或は委筆帖式の官を置き驛内の

事を管せし筆帖式の六品委筆帖式は七品にして書記生の八旗軍制の下に属する者あり公文の草案公信發着の記事に至りては別に先生なる者ありて之を司る先生は山東人尤多しと云ふ中佐の官房に入るや驛中の吏員故老群集雑話す筆帖式衆を制して先づ中佐に問ふて曰く聞く君外に在る者七年なりと知らせ護照ありや否やと中佐乃ち示すに護照を以て筆怪しむ且問ふて曰く護照の日月光緒十七年に在り七年前に非す且つ自德國伯林起程とあり德國と何の地ぞと中佐笑うて答へて曰く予が單騎遠征の途貴國に跨るを以て光緒十七年貴國總理衙門に請うて此の護照を得貴國の西は則露西亞其西は則德國なりと筆更に中佐の胸を指さして曰く是れ如何なる玩物ぞと中佐色を正して曰く玩物とは何の言を是れ所謂勳章にして功を賞し勳を表する所以の者貴國の花翎と畧同じ各國帝王の贈與する所なりと因て細に其國名勳等を説く筆曰く然らば則元來洋鬼子の物か中佐曰く君は貴國も亦之あるを知らざるか雙龍寶星即ち是なりと清國六品官猶自國の勳章あるを知らず一笑すべし筆又問ふて曰く君盡く此等の國に遊びしか曰然り曰く猶他國をも觀しか曰く予れ外に在る者七年二十一國を歴遊せり曰く敢て其國名を問ふ曰く緬甸印度土耳其希臘蒙的尼克羅塞爾維布爾牙利亞羅馬尼甸

牙利埃地利伊太利瑞士白耳義和蘭叮嗎獨乙瑞典芬蘭露西亞及び貴國是なり一人傍より問ふて曰未だ小人國女人國孔朋國等に遊ばざるか中佐笑うて反問して曰く孔朋國とは如何ん曰く朋に孔あり富者外に出るに棒を朋孔に貫ぬき二夫をして擔はしむる者なりと筆帖式曰く君遊ぶ所の廿一國蓋し皆王子の小國のみ皇帝親臨億兆を統御する大國中華の如き者天下決して之をわらざるべしと中佐曰く中華實に一大國なり然れども天下亦大陸の一部分のみ筆怒りて曰く一部分とは何の言ぞ中佐曰く請ふ聊か之を説かん古の所謂天下は貴國を中央に置き英佛呂宋其他手長島足長島小人國女人國等の群小島其外を環れるも行くを得可らざる者と爲せり今の天下は然らる塊然たる圓球の上に獨立國を成す者は實に六十有餘火車輪船來往飛ぶが如く國として至る能はざるなま面積を以て之を言へば露以て第一と爲し英領を以て第二と爲し貴國は實に第三に居る皇帝親臨の國豈獨り貴國のみならんや我日本及び波斯土耳其埃地利露西亞并に英皇の兼轄する印度も亦皆帝國なり又笑うて衆に謂て曰く所謂天下も亦甚だ大ならず實に空中一個の彈丸黒子のみ宇宙億萬數ふ可らざる星の一のみ彈丸上の人皆兄弟なり何の中外か之あらんと衆皆相顧みて喪然たりけり此の驛草あれども麥なく役夫を遣

はして燕麥一斗を買はしめ門あれども扉なきより役夫と交番乗馬を看守しけり
室内土を以て床を築く高さ一尺五寸ばかり之を坑と云ふ中は空しく一方に孔あ
り一方に烟筒を設け火を坑中に燒き以て床上を暖めて寒を防ぐ床には高粱稗を
薄く削りて緇みたる藁一枚を敷くのみ窓は唐紙もて張りたるが風雨の爲に破れ
て賊風室に滿つ故に寒夜窓を開きて暖爐の上に坐するが如く頭は凍りて脊は焦
げ唇は乾きて頭岑々たり

庫木爾站

廿三日午前八時零下五度行くこと大約廿五清里の間は地勢平坦一水逶迤三村落
を貫ぬけり道路雪なく騎行頗便なり一小村を得農夫巨材を車に積み居けるが中
佐の過るを見て口を極めて罵り且つ木片を抛ちけるにぞ中佐鐵鞭を揮ふて之に
向ひければ車を乗て、逃走しけり一山を登りて大約四百尺の高原に出づ地波狀
を成せり殘雪林間に隠見し泥濘蹄を没す途に荷車數輛を見る一輛の馬匹各十餘
頭中には牛馬騾を混用すると清國內地の見る所と同じ山を匡安嶺と云ふ嶺上
に一廟あり廟側に二小屋あり小憩乃ち發す山下の路泥濘騎行に便ならず路傍荷
車を置き馬を溪間に放ち雪を掘て枯草を求むるを見る前日蒙古旅行の困難を回

想し滿洲跋涉の難易同じからざるを獨笑しけり此の日の驛車は疎惡にして馬は
老蒼中佐に後るゝこと十餘清里馬を立て、待つもの多時驛車至らず馬を返して
之を呼べば左輪破壊して奈何ともする能はずと云ふ因て輪片を收拾して繩もて
縛り徐歩して阪を下り山下の一驛に達す之を二站と云ふ此日行程八十五清里あ
り二站は山中の一寒村にして人家數戸小流村右を流る驛舎の壁落て門傾きたり
門内左に糧倉あり右に廐あり糧倉の柱に紅紙を貼りて倉内須蓄千歲栗國中
永存萬年糧と大書すれども倉中敗壞殆んど一粒を存せず廐には槽前多駿馬棚
内有良駒と掲ぐれども一病馬の將に餓死せんとするあるのみ室内には嚴肅廉明
開印大吉の好文字を貼付するも塵埃堆積汚穢言ふ可らずして大吉とも見ぬさ
りけり翌廿四日溪間を蛇行す地稍平坦なり大嶺廟前に小憩し午前十一時庫木爾
站到達す二站を去ること三十五清里日猶高きも喀兒塔兒奚站は此を去る猶七十
五清里小興安嶺の險を踏ぬざる可らざるをもて遂に此に宿す此の地人家數戸の
み寥々たる一荒驛なり此の日細流を渡りて楊柳樹梢の紅を發するを見春色漸く
動き柳芽を生じたるを知りけり

小興安嶺

廿五日午前八時發程漸く山徑を上る左方松樹の枝に一籠あり籠中一首級あり辨子を籠頂に結付けたり例の鼻首なるべく以て此の邊盜賊出沒の一證を爲すべし籠に光緒十八年九月十八日と記せり日を経る久しくして一塊の黒色と變するも猶其全形を存して腐敗せぬ氣候の寒烈空氣の乾燥を知るに足れり上ること數町山嶺に達す之れを小興安嶺と爲す嶺北黒龍江に注ぐ群流と松花江との分水嶺と爲す松花江の滿洲第一の水域にして吉林黒龍江兩省の大川皆此に會し三姓より北流して黒龍江に入る水深くして流緩に吉林齊々哈爾濱間及び大江の松花江に注ぐ處より三姓を経て黒龍江に達するまで能く汽船を通せし去れば他日吉林巴魯夫喀間に汽船の來往を見んこと必せり汽船果して此の間を往復するに至らば悉比利鐵道の竣工に向て尤望を屬する我通商に影響を及ぼすや大ならん其局に當る者留意せざる可らず嶺上に一廟あり小憩乃發す風雪交至り四顧冥漠遠近を辨せず稍寒氣の人に迫るを覺ゆ道路甚だ急峻ならず漸く下りて地勢漸く開け既に山を下るや風收り雪止み天漸く暖なり嶺北樹木あり嶺南の山野只草あるのみ午後三時半喀兒塔兒奚站に達す此の地駐兵衙門あり雲騎尉祥雲導いて衙門に至る官吏數名一小室に在り一吏曰く往年貴國の一中尉此の地を過ぐ我が衙門兵

異日松花之涼船

を出して護送せり中尉は支那語を解せざりきと尋いで驛舎に入るや老幼群集中佐を擁して外套鐵鞭軍帽短銃動章等目に觸るゝもの皆手をかけて其價を問ひ殆ど煩に堪へず遂に軍刀を見んことを乞ふ中佐急に抜いて衆に示す劍影煌々衆皆慄然たりけり

入墨爾根

廿六日午前八時發す時に零下三度なり愛輝より送り來し雲騎尉祥雲別を告げて去る地勢丘陵起伏し漸く進みて漸く開き山野一面樹木を見ず行くこと三十五清里三村落あり小憩して又行くこと三十清里一村を過ぎて午後三時半科落落站に投せ此日喀兒塔兒奚站を發するや三騎追至り或は先ち或は後れ相伴うて行くも其誰たるを知らず中間小憩せし時彼も亦憩ひ始めて其護送の一士官二騎兵なるを知りけり士官は六品委員にして官帽を頂き兵卒は平服を着け刀を帯び銃を携へ走馬鞍に一酒瓶を付け馬を下る毎に高粱酒を飲みて酒氣芬々たり滿洲地方の習俗盡く清國內地に化せらるゝと同時に滿洲固有の言語も亦自然消滅して到處支那語ならざるや山間溪谷の民纔に滿語を用ゆるのみ彼の一士官二騎兵は僻地の滿人にして更に支那語を解せず一兵の僅々單語を口にすも數語に過

三百四十一
きず中、佐滿洲跋渉の間、滿語を操るを聞きしは、只此の三人のみなりしと云ふ途中にて士官は窮屈にやありけん我官帽を兵卒の帽と交換して頂き意氣揚揚たる兵卒の後に隨ひけり驛舎に入るや滿洲人群集して三騎士の支那語に通せざるを侮り昔時均しく皆韃韃なりしを忘れて彼を韃子なりと嘲りて止まき滿洲人の腹地已に支那化すること如此し當年韃韃騎兵の威名衰敗地に落ちしも亦宜なり廿七日午前八時十五分發程遠近山嶺漸く低く平野一望際なし此の日天晴れて氣盛らかに列氏一度に上れり零點以下の寒天に立つ者百七十八日にして此の日始めて温暖の氣候に遇ひけり去れば道路の殘雪漸く消し儘に草間に點々たるを見るのみ行くこと四十清里一村を得て小憩し又一村を過ぎ小阪を上げれば地勢坦々廣原平遠なり西南遙又一市街を望む之を墨爾根と爲す遙に兵營を道右に見る電柱は道左に在り一々墨爾根と記せり愛輝近傍は愛何號と記せるが如し蓋し當初光緒十三年即我明治廿年滿洲電線を架設するに當り愛輝墨爾根齊々哈爾新城吉林寧古塔琿春の七區に分ちて毎區同時に起工せし者なるべし午後五時墨爾根城外の驛舎に投じ先づ人を錢鋪に遣はして銀錢を交換す愛輝より墨爾根に至る三百七十五清里二百三十吉羅實に我五十七里半にして一日平均九里半強六日を費し

邊徽要衝之地

て達するを得たり時に齊々哈爾將軍鐵山堡の閱兵を了り歸途此を過るとて迎接の準備匆忙なり將軍の一行は隨員親軍從僕等無慮三百餘人なりと云

墨爾根城

墨爾根は大小興安嶺口に在て邊徽要衝の地なり副都統一人を置き八旗を駐め鎮邊軍若干を屯す元來通商の衝に非ざるを以て貿易寥寥市上一村落の如く電線此地を貫くも電報局の設さへなし城は圓木を縱列して壁と成す兵營は每營繞らすに土牆を以し前面一門を開き四隅に哨處を設く皆清國內地の制と同じ西の方大江を隔て、遙に一村を望む之を臣達克圖と爲す臣達克圖より大興安嶺を踰えて露領舊租魯海圖に達すべし其道大約一千清里水草あるも驛站なきより多く牛馬駱駝を用ひざれば跋渉す可らず舊租魯海圖は齊々哈爾より大興安嶺を踰へ呼倫貝爾に達する驛路の通する地にして阿爾古訥河の左岸に瀕し露國々境哨處の在る所なり呼倫貝爾は一面露領に對し一方蒙古を制する邊境の要地にして副都統を置き八旗を駐め近年練軍の歩騎兵を屯せり呼倫貝爾より齊々哈爾に至る大約八百清里十七站ありと云ふ

烟毒可懼

廿八日廣原平阜の中を行く天漸く暖に午後三度に上れり此日草原火あり會
 暴風大に作る火勢野を掩ひ黒烟天に漲り忽ち數里の間に蔓延し殆んど嚮ひ近
 可らず實に一大壯觀たり行くこと七十清里午後四時宜拉哈站に達す驛舎は齊々
 哈爾將軍迎接の爲に床を拂ひ壁を繕ひ雜沓尤甚し因て一民家に投ず家の入口
 に太公在此の四大字を書せり是なん私塾にして幼童十人許中食の外は常に先生
 の側に侍坐し机二脚を圍みて書を讀み字を習ふ机は長さ六尺幅二尺高さ一尺許
 讀む所の書は認字三字經千字文大學中庸の類にして宛然たる我昔日の寺小屋な
 り中佐の室に入るや太公先生命じて子弟を散じ席を拂ひて座に延き膝を撫して
 古を談す往々奇論ありけり此の日六品委員及び二騎兵は辭して興安城に歸り
 墨爾根副都統衙門の八品監生一人副都統の命を以て中佐を齊々哈爾に送る此夜
 此に同宿す監生尤阿片烟を嗜む曰く僕片烟を嗜む習既に性と爲り年に月に飲
 量増加し今や痲疾と爲り禁せんと欲して能はせ毎日喫烟の定刻に至り故ありて
 喫する能はざれば頭痛岑々胸痛刺すが如く煩悶言ふ可ら甚しきに至りては手
 足麻痺して昏迷卒倒人事を辨せず故人一たび片烟の毒に染ひや繁劇の際貧困
 の時猶且生命を賭して喫せざる可らず産を破り家を亡ばし惡を作し盜を爲す皆

阿片の流毒に非ざるなし嗚呼奇怪なるは阿片なり戲にも一回之を喫すれば終
 身禁する能はず亦阿片の機性と爲りて一生を了らんのみと慨嘆しつゝ箱を
 開きて烟管烟燈を出し横臥して烟を喫する者數回談笑始めて爽快命じて晚餐を食
 し少時して又烟を喫し午後十時始めて烟器を拂拭して箱中に收め遽然眠に就き
 けり彼の快眠夢を結ぶも中佐は片烟室に滿つるが爲めに頭痛岑々終夜眠る能は
 ざりけり嗚呼彼れ烟毒の其身を殺すを知りて而して禁する能はず石を抱きて淵
 に投ずると何ぞ異ならん懼れざる可けんや

春風漸動

廿九日午前八時發程廣原益開き平野天と交る處々野火の黒烟を望み西の方遙に
 大興安嶺の山脈起伏するを見る行くこと四十五清里午後一時半喀迷哈站に投ず
 亦將軍迎接の爲に驛舎匆忙因て民家に投ず此の日氣候漸く暖に始て蒼蠅を見る
 三十日午前八時四十五分發程地平に野廣く野火四方に起り風烟淡薄天晴れ氣麗
 にして雲雀高く啼づり春色漸く新なり行くこと四十五清里草野茫茫一人家あし
 正午十二時博爾多站に達す驛頭又梟首を見る博爾多站は入烟稍密自ら市店を成
 し沿道の一大驛なり錢舖當舖典屋等あり因て又銀錢を交換し精子藥一箱を買は

しむ糴子羹は麥粉と玉子をもて製せし菓子にして我カステラと似たるが異
なれるは只油氣の多きのみ中佐驛站に達する毎に之を求めて且つ食ひ且つ茶を
喫し又朝食も代へけり此は市街大驛到處として之なきは無く小村落も亦往々牌
を掲げて之を鬻げり故に滿洲の旅行砂糖なきも憂ふるに足らずとなり卅一日午
前八時半發程驛外又鼻首を見る廣原際なく芳草野を掩ふ然れども絶えて牧畜を
見ず人烟疎薄一路蕭寂空しく野火の威を逞しくするを見るのみ此の日天殊に暖
に寒暖計上りて列氏十八度に至り袷套を脱ぬる能はず行くこと六十五清里午後
二時半拉哈站に達す此の地戸數大約五六十驛舎空室なきより去て一宿を民家に
乞ひけるに主人外國人を駐宿せしむるを喜ばず時に監生驛車に坐して至り主人
を諭して曰く予ハ墨爾根副都統大人の命を以て日木の武官を護送する官吏なり
汝快よく一宿を諾せよと主人已むことを得ずして之に従ひけり其隣家は則私塾
にして幼童十數名あり咿唔の聲絶えず中佐之を主人に聞く先生ハ山東の人なり
と山東は昔時齊魯の地にして孔子の出でし處今猶其流風餘澤を酌みてや文人儒
生妙からず滿洲地方の驛站に在りて先生と稱する者及び村夫子多くは皆山東の
人なりと云ふ子弟の謝儀ハ一童一年錢一帛文と米麵酒鷄子等なりとぞ

駐防八處

八旗之駐防

一月四日午前八時發程右の方遙一村落を大興安嶺下白雲生ずる處に見る是を
布特哈と爲す黑龍江省八旗駐防八處の一にして四百餘人を屯す所謂八處とは愛
理墨爾根齊々哈爾呼倫貝爾呼蘭巴彥蘇々北園林子及び布特哈是なり先年八旗の
子弟を選抜して練軍を編制せり此の北路は平原高野の中を貫ぬき砂磧蹄を嚙み
北風面を撲ち騎行便ならず亞爾泰の足痛益甚し行くこと九十清里軍年站に次
る二日午前八時半發程行くこと四十五清里一孤屋に小憩し又行く三十里四小村
を過ぐ地勢平坦なるも道路堅泥砂磧多く騎行に便ならず此の日塔哈爾站に次る

入齊城門

三日午前九時十五分發程地稍波狀を成し道路砂多し既にして一小林を過るや前
面齊々哈爾城を望む此の日行程六十里午後二時齊々哈爾城の北朝門を入りて一
旅店に休憩す齊々哈爾は墨爾根を去ること四百五十清里即ち二百六十吉羅實に
我六十五里一日平均九里強をのり七日にして乃ち達す旅店の前に一廟あり廟中
騎射場あり此の日八旗の大官場に臨みて八旗子弟の射を習ふを觀る聞く八旗の
子弟年十一二に至れば皆弓術を習ふ先づ左手を伸べ右手を屈して弓を引くに擬

八旗子弟之射法

して立ちつゝ、姿勢を學ぶ滿洲語の一より數へて百に至るまで姿勢を崩すを得ず此如き者久しくして姿勢已に正しければ次に弓を引く術を學び引滿發せず一より百まで數ふること前の如し次に射を學び射既に熟すれば次に弓を彎きて姿勢を正しつゝ、手綱を手にしに馬を馳することを學び次に騎射を學ぶ百メートル許の處に的三個を掛く射を學ぶの易からざる如此し二百年前韃靼騎兵の善く戰ふて遂に明を亡ぼし威名一世を震動せし所以の者武技の精に因らすんばあらず今や時勢一變兵器日に新なり射術の勤苦を移して今日の武技を習はしめば願ふに其精練、豈古に譲らんや而して八旗子弟の演武今猶如此に過ぎず嘆すべきのみ既にして中佐旅宿を出でて内城北門を入りて衙門を訪ひけり

齊々哈爾

齊々哈爾ハ黒龍江省の在る所にして直に大江に枕み船以て吉林三姓に通すべし北ハ愛理、西ハ呼倫貝爾東ハ呼蘭、北國林子巴彥蘇々等の要地に達する道路あり往年魯人馬五十餘頭を率ゐて尼爾丁斯科の境上より直に齊々哈爾に至り遂に呼蘭北國林子巴彥蘇々を経て三姓に出で尼古利斯克に歸れりと云ふ四通八達如此く實に邊徼の要地と爲す故に古來將軍を此に置き全省の政令を可らしめ八旗三千

四通八達之

餘人を置き今は又子弟を八旗に選抜して編制せし練軍三千あり城外營を築きて之を屯す城は土を以て之を築く其形は則方城内又一郭あり將軍衙門副都統衙門其中より内城南門より一直外城の南門に通する一大市街を尤賣買繁盛の區と爲す其他四門の小街は汚穢臭惡名狀す可らず人口固より詳ならざるも或云五萬或云六萬蓋し四萬を下らざるべし南門外旅店多く亦一廟あり廟側劇場ありと云ふ中佐外城北門より入りて市塵中を行き内城北門に入れば右に副都統衙門あり左に將軍衙門あり將軍衙門の左右に轅門あり門外馬を下り將に門に入らんとするや老幼群集或は罵り或は嘲り或は衣物を拉きて指笑止まず監生に導かれて門を入れれば左右に官房あり分ちて六區と爲す吏司戸司禮司刑司兵司工司是なり先づ兵司に至る曰く請ふ印房を訪へど印房は則將軍官房なり又去りて一内門を入り印房に至り更に印務所を訪ふ印務所は印房の次室に在り屬僚執務の處と爲す愛理副都統の書及び電報露國黒龍江州軍務知事の通知書既に至りければ旅宿の準備をもなして待居けり中佐馬を休め且つ調査せん爲に此の地に二日滞在せんと思ひ豫め旅店をも定め居ければ衙門の好意も亦棄つ可らざるより導かれて準備の旅店に赴く彼中佐を觀る者群集追隨衙門騷然たるも官吏之を制せず罵り

且嘲りつゝ果は中佐を突倒さんとする者さへあり斯く亂暴を加ふるも堪へて馬に上り内城南門を出んとす時に一悪少興安の臂を打つや興安驟然一足を擧げて之を蹴飛ばしけり此より衆恐れて近く能はず但口を極めて罵るのみ遂に案内の官役をさへ罵りて曰く汝如此き役をも執らざる可らざるかと以て其風習を知るべし南門外の大街を過ぎ東に折れて一小街に入る臭穢殊に甚し道右一人家扇して萬昌店と云ふ是れ準備の旅宿なり衙門準備の旅店無清潔ならんと思ひて門を入りて先づ驚きしり廣庭一面馬糞を積めるあり肥料なるべし臭氣鼻を撲ちて嘔吐を催さしむ門右の一室は主人の居る所門左の一小室窓暗く扉破れ汚穢尤甚し是れ中佐の室にして其隣室は則車夫馬丁の合宿なり將軍衙門より街道兵(猶運卒)一人を附けり見物人猶群集して窓の紙を破りて覗きつゝ罵るも街道兵之を制する能はず斯る有様なれば所詮二日間逗留するべくもなくせめて一日滞在して馬を休めんとぞ思ひ定めける

白日欺人

此の日筆帖式一人屬僚二人と與に來りて中佐を旅店に訪うて曰く貴官發程の際には士官兵卒を出して護送すべし其事既に定まれりと因て護照を検査放行的

四字を見て疑訝の色あり中佐曰く電務總辦より齊々哈爾將軍に贈るの書を携へたり會將軍兵を閱して在らず請ふ歸城の日之を轉致せよと乃ち添書を託しけり翌四日明朝發程の事を報せんとて衙門に至る衙門人なし將に去らんとす彼の筆帖式と相遇ふ因て其事を告げ且つ今將に副都統を訪はんとすと云へば面會を乞ふかと問ふ否挨拶の爲に名刺を通せんとするのみと云へば去らば僕名刺を轉致せんとして受取りて別れけり旅店滿庭の馬糞臭氣鼻を突き頭痛岑々たり此の夜十一時一官吏來訪ふ中佐枕を蹴て起ちて面會せしに明朝副都統自ら貴官を訪問すべし請ふ少しく期を緩らせよと明朝裝を理めて待つ副都統至らず筆帖式又一書記を携へて至り再び護照を見んことを請うて書記をして寫さしむ發程期迫り客心匆々たるをも知らぬ顔に健腕直筆小楷を以て長文章を寫しつゝ數刻を費しけり中佐曰く今朝副都統來訪の約あり如何んと筆恬然として答へて曰く否來訪せざるべしと云棄て去りけり中佐副都統を待ちて發程の期を誤り漸く午前十時を以て馬に上りけるが昨日護送せしめんと云ひし士官も兵卒も影さへ見えざりけり蓋し彼の筆帖式私意を以て副都統の好意を妨げ不便を與へしなるべし

南行七日

四月五日午前十時十五分齊々哈爾城の南門を出で練軍兵營の側を過ぎ直に南に向て行く者六十清里特穆德黑站に達す昨來頭痛未だ止まず水もて冷やして眠に就く既にして枕上騒然たり起出で、見れば二農夫何やらん罵り争ふなりけり遂に之を外郎に訴ふ小驛の筆帖式なき地は外郎は全驛の長にして訴訟をも聴くなら外郎二農夫を一室に延き原被雨造の言を聴きて裁判を下しけるが無数の農民集觀るもの堵の如しやがて曲直を判し曲者は哀れや戸外に引出され臂を笞たるもの數十悲しげに泣叫びけるが既にして放免せられけり今日は清曆二月十八日にして清明開河の節なり六日天晴れ氣暖なり途上興安始て驢馬を見て其我に似て非なるを怪しみ驚きて進まざる者少時驢馬一聲嘶きければ興安も亦興を鳴らして驅出しけり行くこと七十五清里温托河站に次る此の間丘阜起伏し地皆砂質にして草之を掩へり七日丘陵を踏え砂土を踏みて行くこと四十清里一小山の南に出で、地始て開濶平野茫々たり又行くこと三十五清里平野盡きて一丘を得多耐站丘上に在り遂に此に投せ丘上より望めば平野處々黒うじて森林の如し昔野火の跡なりけり八日丘陵を踏え砂地を踏みて酒沼を渉る土柔らかにして綿の如し夏は雨尤多く水あり行く可らずとぞ一小流を得氷塊落々岩の如く渡頭を求

めて時を費しけり河を渡りて丘陵に上れば芳草野に滿ち尤牧畜に適せり平地に出でて一湖水を得長さ凡十清里湖邊高阜あり阜上の人家を他爾哈站と爲す遂に此に次る行程七十五清里九日過ぐる所の地は丘陵平野沼澤二村落を経て行くこと七十五清里古魯站に次る十日朝來雨をば降る天暖にして列氏十四度に上る過る所沼なく水なし地勢快濶稍波状あるのみ途上農夫の牛馬を用ゐて耕すを見る歸雁群を成して飛び丹頂の鶴平野に下り立つ者數なし餘りに多ければ數へけるは五十餘羽も同じ處に立ち居けり一士官車中に坐し四騎兵銃を帯びて護衛しつゝ來る者に遇ふ士官は茂興站駐兵の總領にして齊々哈爾に至りて俸銀を受取りて茂興に歸る者なり黑龍江省の各地文武官の俸銀は皆自ら齊々哈爾に至りて受取らざる可らず盜賊出没人を殺し物を掠め行路の難殊に甚しと云ふ行くこと四十五清里吳蘭諾爾站に次る此の日始めて大江の開河を聞く清明を去る六日なり此の夕東の天曇り始めて電光を見る十一日途上又一湖水を得長さ凡十清里湖面猶氷あり行くこと四十五清里茂興站に達す此の驛一小村に過ぎざるも駐兵一營六十人あり路記營と云ふ捕盜護衛導等に服する者なり齊々哈爾を去ること四百五十清里黑龍江省の驛站實に此に盡く

以草薪代

興安嶺以南齊々哈爾に至るまで地は皆廣原にして絶えて樹木なく人民牧畜を爲さざるより乾馬矢もあし故に草を刈りて薪に代ゆ物を煮んには人常に窺口に在りて絶えず草を投じて火の消ぬやう注意せざる可らず齊々哈爾以南此の邊に至る迄黒龍江省の全部亦絶えて樹木なければども往々湖水あるより湖中の蘆を以て薪に代へ且つ此の邊に至りては人民耕作に従事するより粟稈高粱稈を焼くを常とす其牛馬を用ひて耕作に従事するは地漸く人烟稠密農業尤盛なる吉林省に接するが故なるべし

全省人口

滿洲三省の面積は殆んど我邦及び佛蘭西白耳義を合せしと同じ土地も亦豊饒にして人口は僅々七百五十萬ふ過ぎず三省中黒龍江省は面積尤大にして人口尤少く全省百五十萬を出でず而して土地尤荒蕪せり盛京吉林二省は自由に民人の住移を許し府縣の制を設け軍制と並施すをもて人口日に増し土地月に墾くるも黒龍江省に至りては全然八旗の一族にして民人の移住を許さず軍制を以て全省を治ひ旗人即ち八旗猶士族の如しは牧畜に習はず耕作を知らず沃土を棄て、荒草

滿洲三省之人口

に委す是れ其人少く地荒るゝ所以なり咸豊年中嘗て一たび民人を呼蘭地方より招徠して耕作に従事せしめしに盜賊頻に起り地方擾亂しければ罪を民人に歸して益其移住を喜ばすと云ふ

渡松花江

十二日午前八時發程此の邊盜賊出沒すればとて茂興の路記營は護送兵二人をして随伴せしむ兵卒は淺黄地に白縁を取りて胸と脊との圓形中に路記營捕盜兵の五字を記したる號衣を着け古びし火繩銃を携へて疲馬に跨りけり兵卒の餉銀は一入一月貳兩にして實領錢五吊文貳兩は六吊文一吊文は長官の懐に入るべし其外に飼馬料貳兩を給せらる兵卒過半は妻子あり妻子飢えざれば則馬飢ゆ其馬の疲瘠固より宜なり既にして一水を望む是を大江と爲す左岸沙上を行くもの數里人家二三あり樹木鬱蒼たり樹枝に五六の籠を掛く近きて之を見れば亦梟首なり中に年の頃十七八とも覺しき生首あり村童熙々として其下に戯る以て其人を斬るの多きを知るべし行きて大江と松花江との相會する處に至る江中に一小島あり島中一小屋あり之を鎮邊軍水師營の駐する所と爲す水師は公私の行人貨物を運する者即ち渡頭の舟子なり渡頭舟を待つこと少時舟至る平底船にして一

妻子不飢 則馬飢

不許洋銃
携行

船馬七八頭車二三輛を容るべし既にして小島に上る島の左は寛さ百メートル許
右は百五十メートル許なり又舟を呼びて島の南端より右岸に達し始めて吉林省に
入る舟子に一帛文を與へて去り行くこと四里許一小屋に小憩す一老翁曰く大江
江頭常に暴風多く風作れば波高くして渡る可らず相傳ふ大官江を渡れば風波忽
ち收ると昨日風あり今朝も亦風あり而して貴官江を渡るや風収まりぬ思ふに貴
官は日本の大官なるべしと俚諺太だ奇と云ふべし既にして馬に上る地勢平坦砥
の如く村落散在し地皆耕作せり前面遙に丘陵を望む行くこと四十清里丘を上る
高さ凡そ五十尺丘上は則高原空濶なり松花江の水溢れし時は水丘下に至るとか
や丘上村あり伯都訥站と爲す遂に此に宿す行程九十清里此の日始めて野火の燒
跡に若草の萌出しを見けり

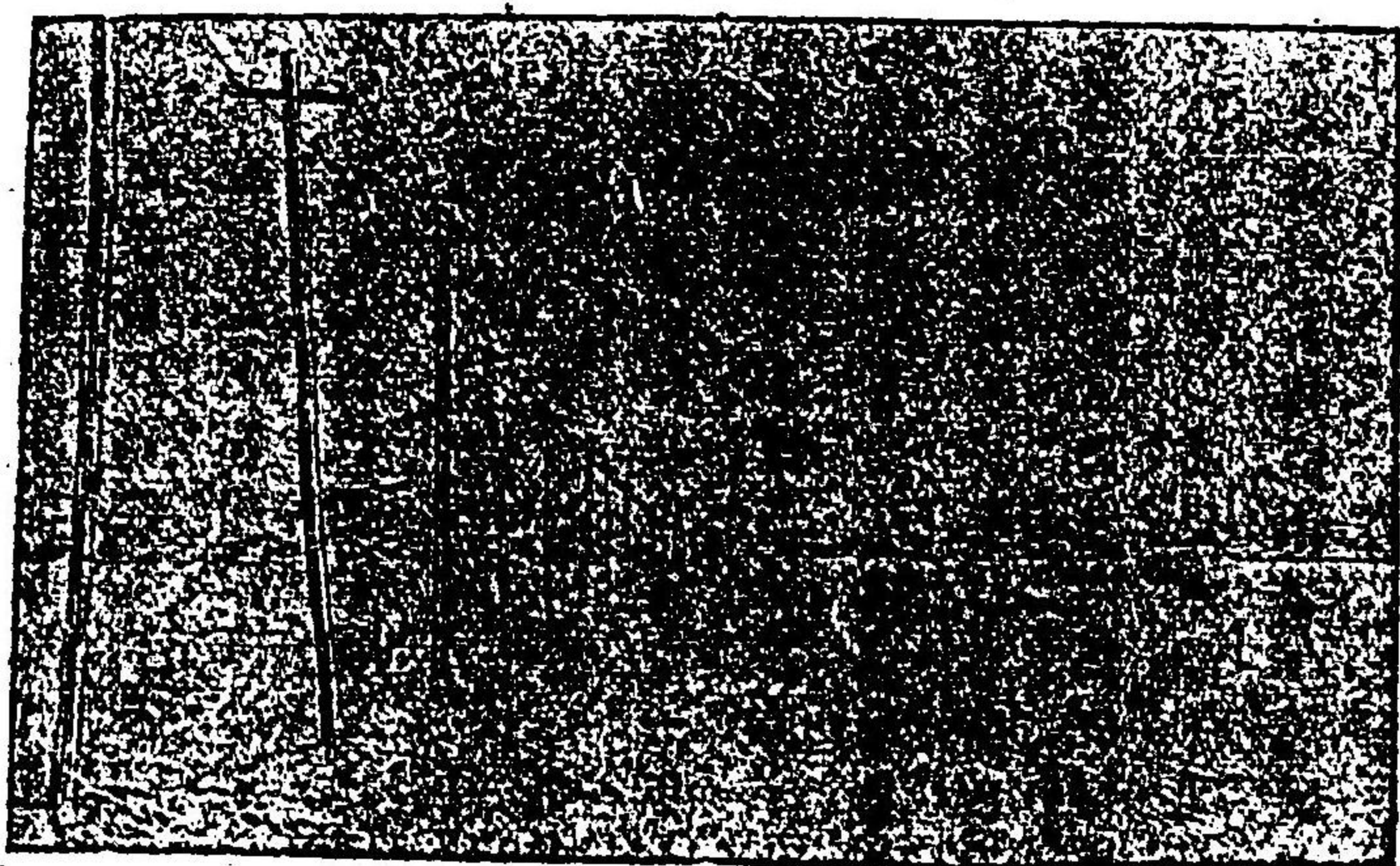
不准帶銃

十四日地勢平坦耕地豊饒なり行くこと二十五清里一人家に小憩す店内の壁に光
緒十八年吉林將軍の告示を掲ぐ曰く行旅は決して洋銃を携ふるを許さずと此地
方尤盜賊多ければなるべし行くこと五里一湖水を得湖邊沼澤多く通過す可らず
山麓に沿ひ迂廻して一小山を踰る山陰の一小村に投ず之を社哩站と爲す行程六

十清里なり此に捕盜兵五十人あり此の地元一寒
村にして驛舎は却て清潔旅情を慰するに足れり
すべて他國は繁華の地はと清潔にして田舎はと
不潔なるものなるに支那は之と反し人烟繁華の
地は不潔臭穢尤甚しく邊鄙寂寥の濱は却て清
潔を極むと云ふ

新城一宿

十三日畦隴の間を馳す左右村落あり作る所は概
ね皆高粱小米なり行くこと廿五清里新城に達す
新城は大江の右岸に臨み土壁を以て城を繞らす
伯都訥副都統此に駐し八旗駐防兵及び練軍若干
を屯す又た電報局あり人口大約二萬賣買繁盛な
り吉林省は旗民八旗と民人雜居の地なるを以て
又た同治の官廳(即ち地方廳)あり中佐旅店に入る
外人を留むるを好まず室なしとて拒絶しけり去りて他の一店に至る亦曰く室な



しど乃ち人を副都統衙門に馳せ一旅宿を命せんことを囑す衙門の未だ公信を得ざれば我關する所に非ずとて助勢を與へず因て強ひて旅店の主人に請ふて棧に厩側の一室半席を借るを得けり此の室は車夫馬丁の居る所賤民環視し携帶品をませくり返しつゝ價を問ひ物を評し隙だにあらば盗み去らんする状なり小利の爲に禮義をも人情をも名譽をも惜まぬは滿洲人の風なるが是は又更に甚しき輩なりけり

沼澤没跡

翌十五日丘陵起伏地は皆砂質車に便ならず道路は畦圃の間を貫ぬき僅に一車を通ずるに過ぎず此間吉林齊々哈爾間の驛路なれども整然たる周道あるに非ず車輪の痕を求めて畦道を傳ふのみ去れば雨なんどの爲に今の道不便なれば鳥ども云はず畦ども云はず新に便利の地を行きて自ら道路をなし道路は變じて鳥どもとぞ行くこと六十清里浩色站到小憩す此地亦捕盜の騎兵一營あり屯田に従事するを見る又輪痕を求めて畦圃の中を行き遂に松花江畔に出づ右岸水漲りて湖の如し左右皆沼澤土柔にして行く毎に地動き騎行に便ならず輪痕深さ一尺ばかり兩輪の間を擇びて行くも動もすれば誤りて輪痕中に陥り疾馳す可らず斯くて

瘴氣胃人

泥澤の中を行くこと十五清里午後五時遜扎保站に達す此の驛も亦人烟稠密賣買繁榮なり驛舍雜沓棧に室の一隅に臥しけるが外郎小頭其餘集觀る者多く綠厭に堪へざりけり

十六日丘陵起伏の中を行く砂深くして車に便ならず中間一大村に休憩し遂に松花江の右岸なる高原上を馳せ遙に江水を望み馬首遠く高峰峻嶺の雲際に登ゆるを見る四望空濶村落星羅し風光頗佳なり漸く東に向て高原を下り午後五時盟温站に達す行程一百清里なり此の日より右の耳の下腫れ熱大に發し頭痛岑々たり瘰癧に胃されいなるべし

金鼓騒然

十七日行くこと大約三十清里一小村を得村中の一店甚だ大百餘人を容るべし滿洲に入りてより以來始めて見る所なり去れども今は其一部を開きて餘は閉ぢたり老餅麥粉をねりて灼きし者及び豆芽と豚肉とを煮しものを得て中食す口を動かす毎に耳下の痛益甚し又行く二十清里登伊勒哲庫站に達す此の地靖邊軍後路左營後哨を屯す騎兵一營二百五十人を中前後左右の五哨に分つ一哨五十人其餘

は驛舎の右隣に在り士官は驛舎の上室に住居するより中佐は門側なる人夫部屋の一隅を借りて宿す此の日發熱甚しく心神昏々食して味を知らずやうく一盃をものしけり騎兵の一下士官中佐に謂て曰く小米を馬に與ふるに道あり先づ熱湯を注ぎ既にして冷水に投じ糞子を混じて與ふれば馬に害あしと因て此の後如斯して馬に與へけり午後十時頃にもやありけん騎兵樂手戶外に出で二人の長さ四尺ばかり飽賣の持ちたらんやうなる喇叭を吹き一人は鼓を打ち一人は鐘を鳴らして就眠時間を報じけるが其後凡そ三十分間毎に夜を警むるにや金鼓の聲騒然終夜眠る能はざりけり

最北邊門

十八日熱發して昏々強めて馬に上る行くと大約二十清里一小村に小憩す熱益甚し因て裘套を脱ぎて行く二十清里にして一小阪を下れば阪下に長堤あり一門を穿ち題して巴彥鄂佛羅邊門と云ふ堤は山海關の傍なる長城に起りて北に走り直隸吉林二省の境を劃して吉林省に入り以て邊の内外を分つ所以の者巴彥鄂佛羅門は其最北邊門なり門内に防禦一人兵卒若干を駐す又騎兵一哨あり捕盜に充つ門内の一驛を法特哈站と云ふ幸に驛舎の上室を得けるが室内に入るや卒

巴彥鄂佛羅邊門

然昏倒しけり

遂罹熱病

翌日熱甚しく更に食慾なく昏々として我身に非ざる者の如し自ら沼澤卑濕の地を過て瘴癘の氣に觸れ熱病に罹りしを知り法特哈站の一室に横臥し驗温器を把りて體温を驗するよ三十九度五を示し脈搏百十に至る此の驛に一醫あるを聞き召して診察せしむ醫曰く有火々々と一煎藥と一水藥を與へて曰く葱末を水藥に浸して耳下の腫處の冷せと乃ち如此する者數初は腫處冷にして稍快中に益熱を發し終に却て痲衝を増し痛み堪ゆ可らず遂に之を廢す煎藥も亦寸効なし一服乃ち棄て用ひす彼れ固より碌々たる庸醫能く爲すなきを知り復た召して診せしめ獨り一室の坑上に臥し枕上に火鉢を置き一鐵鍋を買ひて老米の粥をこしらへ更に玉子と豆腐とを煮て絶えて食慾なきも強めて之を食ひつ昨日と過ぎ今日と明して只天命を待つのみなり居る者七日熱更に減せず疾益劇し會廿五日大雪至り積ること四五寸天既に暖なり雪忽ち解けて水庭中よ溢れ汚物と混して臭濁池の如し此の邊皆沼澤水の注ぐ所なく圍庭皆水濕氣人に迫る中佐臥す所の坑煉瓦を以て築きたるが時に既に火は焼かさりけるより煉瓦

も亦濕ひて室内の衣物盡く微を生しけり健なる者すら病を得んずる天氣なるにまして熱を患ふるものをや日々に重りゆくのみ發汗せしめんとするも毛布一枚外套二枚あるのみなれば絶えて發汗せず一日不圖心付きて木炭を買ひ枕上の火鉢に火を起し坑に火を焼かしめて室内に濕氣を乾かしけり冬時熱坑の上に臥せば頭冷に背熱して心地あしきも今は頭痛岑々たるよりさして心地あしからず火氣の爲に濕氣去りて外邪をも驅ることを得つ是より病日に快よきを覺えけり斯て今は打立んと思ひ定めて起たんとすれば昏々として打倒れ今日こそはと身を起せばふらくと頭重く屢試みて遂に起つ能はず屢に氷上に墜落して頭を傷つけつ將に死なんどせし時氣力を以て勝つことを得けれども大熱の餘心身疲勞氣を以て勝つ能はず日夜枕に伏して一室に横臥す左右人なく風雨窓を打ちて一燈耿々時に頭を擡げて往事を想ひ將來を思へば萬感交集り羈心火の如く終夜眠を成す能はざる者數なり

病中紀事

法特哈站の驛舎に寢なきより三馬皆室外の立木に繋ぎけるが中佐の病中日々露天に立盡して動く能はず廿五日の大雪後風風雨あり行潦庭に滿ち濁水池の

如き中に風に吹かれ雨に打たれて備さに艱苦を嘗めけり殊に冬時は三馬の毛自ら延びると四五寸寒を防ぐ可かりけるが興安嶺を踰りて天候に温暖なるや長毛自ら剝落していと短くなりける折しも日夜雨雪の中に立ちて寒に堪へず三馬遂に外邪に冒され咳嗽の聲頻なり中佐熱甚しく雨夜眠る能はず夜久しいて病馬の咳聲を聞き斷腸に堪へざりけり一日二兵卒海蘭包より至る二兵ハ吉林將軍の親兵にして電務總辦シエルン氏を護送して海蘭包に至りし者其着る所の號衣は淺黄色に白線を取り胸背皆吉林將軍親兵の六字を書せり中佐の病めるを聞きて來訪ふ且つ曰くシエルン氏は汽船黑龍江を下りて烏港に出で將に彈春を経て吉林に歸らんとすと蓋し春期雨多く道路の泥濘を避くるなり此の兵卒一箇月の餉銀五兩數月外に在りて別手當を領し餉銀を餘すを得たりとて喜び居けり一日一宦官公事を以て北京より齊々哈爾に赴く者至る舉驛之を待つこと感歎なり定めて是れ權赫勢灼なる者なるべし又士官十四人あり大車五輛に坐して至る官は四五六七八品等なり彼等は愛輝副都統の夫人を送りて吉林に至り留まる者四十日歸途に就ける者なり副都統官兵を以て其妻を護送す威權王公の如しと云はん一日士官二名兵卒四名盜賊四人を推送して法特哈に至り車の遞傳を命す四賊

以官兵護送某妻

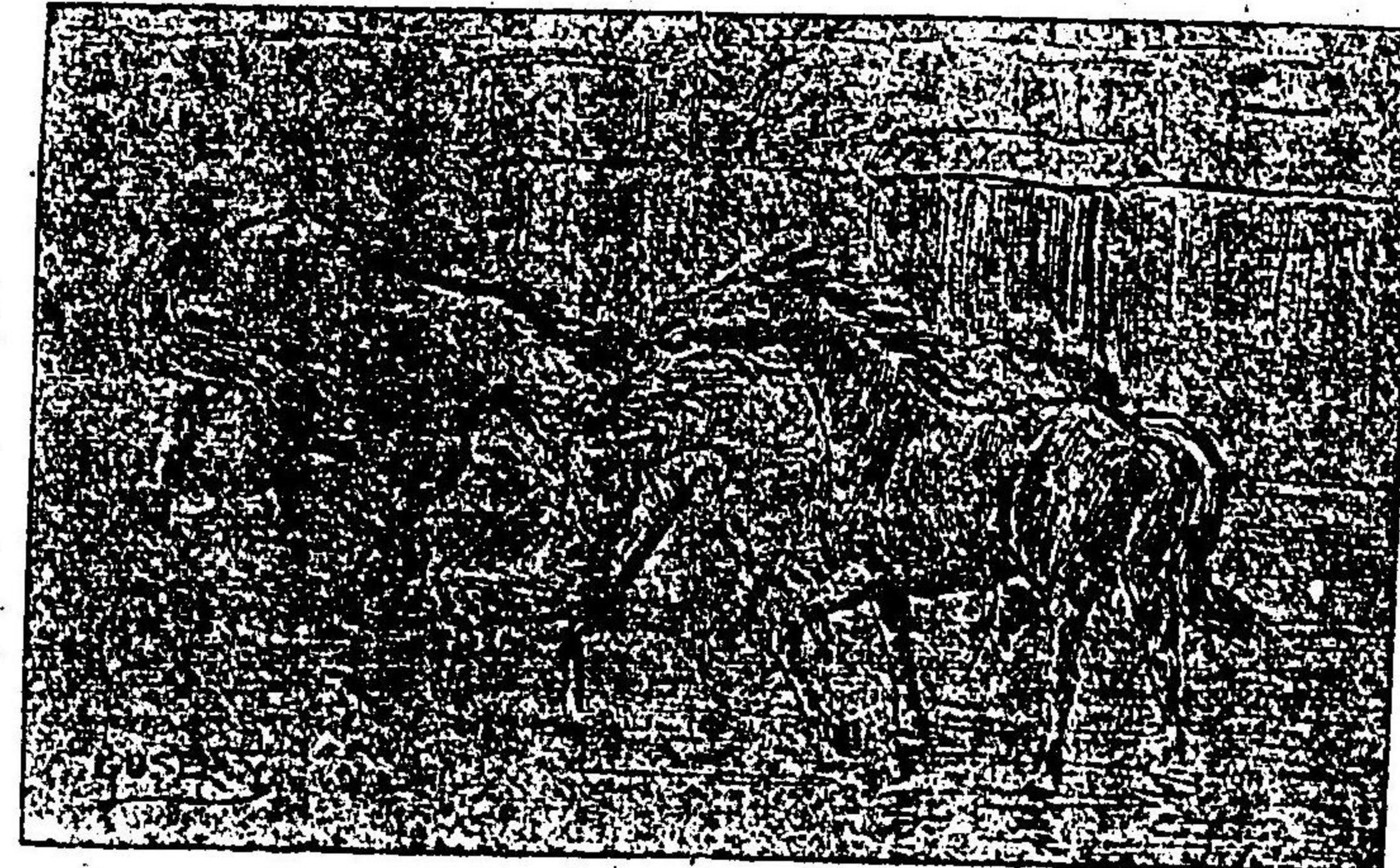
三百六十二

は足に械を施して車上に在り手は自由にして烟草をくゆらせ居けり押送兵の携ふる所は皆元込スナイドル銃なり盜賊出沒途に同類を奪ふことありて油断し難しとぞ押送兵傍人を顧みて笑つて曰く四賊一週間を出でずして鼻首せらるべしと時に天雨多く河水暴漲渉るを得可らず一日驛夫公信を帯び馬に鞭ちて驛驛に送る者あり公信は黄袋に收めて腰に付く彼固より貧にして雨具なし途より蹄りて曰く雨に遇て公信を濕はし河水漲りて渉るを得ずと公信を濕はせし罪蓋し大なり乃ち驛夫を檻倉に投じ衆相議して曰く吉林省に至りて彌縫するの外なしと因て此夕驛夫を檻倉より引出し答つ者數百起つこと能はざらしめけり酸鼻と云ふべし此の邊地皆沼澤雨至り河漲れば泥濘尤甚しく輪蹄深く没し殆んど通過す可らず雨後一旅客至る曰く舒蘭河站より此に至る僅々四十五清里二日を費せりと一日行程我三里に過ぎず以て其惡路なるを知るべし去れば夏月の雨期に至れば公信の外貨物の運搬行旅の來往殆んど皆杜絶し驛舎の外宿驛の旅店皆門を閉て業を休め天寒く河凍り貨物行旅の往來運輸漸く盛なるを待つと云ふ中佐居る所の室は幸に一坑を専有し他人と同居せず斯くて病を養ふ者十八日間天未だ此の好漢を棄てず病やうゝ癒え起居意の如くなりければいつまでか空しく

旅路に日を送らんとて驟然病を強めて馬に上りしは五月七日の午前八時なりけり

病後遇雨

五月七日雨餘の泥濘尤甚しく淤泥深く馬蹄を没しけり時に病臥十八日の間に風光一變新に生面を開き楊柳葉を生じ野草花開き滿目の耕田青み渡りて春色漸く酣に頗る爽快を覺えけり行くと廿五清里一村に達す旅店の戸を閉ぢけるを叩きて小憩す村は一小河に臨めるが河岸に小舟を造るを見る支流なれども船を通ずるあるべし河の右岸に沿うて行く此の日朝より天曇りけるがやがて雨大に至り外套衣帽盡く濕ひて濡濡たり又行くと二十清里午後二時舒蘭河站に達す直に濡れし衣袴を脱ぎて毛布にくるまりつゝ坑に火を燒かしめて其上に坐し衣袴を乾かして着換



法特哈站驛舍雨中之景

へけり病後雨に遇ひて病再び起らざりしは蓋し幸なり是より先き病みて法特哈
站に在るうち馬には常に小麥五升を煮て麸子一斗をませて與へけるが馬も好み
て食ひ又害ともならねば此より粟を棄て、小麥と麸子とを與ふるを常としけり
此日二官吏愛輝より至る一面識あるやうなればよく見ると是ぞ黒龍江站に
於て面白き問答を試みし筆帖式なりける緊急の公事あり副都統の命を以て日を
刻して北京に至ると云ふ又吉林より歸る齊々哈爾の官吏數人至る銀を吉林に得
て歸るもの滞在四月を費せりとぞ郵便爲替もなければ通運便もなき滿州の不便
想ふべし

入吉林城

八日天色猶暗し去れども晴雨計を検するに異状なし乃ち發す地勢平坦左右山脈
起伏し漸く進んで漸く迫る河を渉る者二前は水深くして馬腹を没し後は水淺く
して流急なり道路は或は河流に沿ひ或は畦圃を行き且つ廣く且狭く狭きは一車
を通ずるに過ぎず行くこと五十五清里午後七時金珠站に達す此の日銅錢馬鞍等
を載せし驛車には四馬を駕しけるが一馬は盲一馬は隻眼を失ひ二馬は皮破れて
肉露はれ四馬皆瘦瘠骨立鞭てども進まず叱すれども動かす中佐或は行き或は待

ち辛うじて驛に達しけるが斯る瘦馬に遇ふも亦宿縁なりとて糧を買うて與へけ
り前驛の外郎小頭等自ら馬の食を食して馬には枯草をのみ與ふるなるべし翌九
日地平なるも泥多し行くと六七清里丘陵高低既にして平野に出づ時に溪村離畔
梅花盛に開き春光正に酣なり行くこと十五里一村に小憩す村外河あり春水暴漲
渉る可らず一小船あり馬を下りて先づ渡り人をして馬を河中に追入れし三馬
泳ぎて前岸に達し中佐の傍に至りて再び鞍置くを待ちけり丘阜の間を行くこと
十八里松花江の右岸に達す二大平底船あり河幅二百米突許江を渡りて行くこと
九清里許兵營の前を過ぎ又行くこと三清里許吉林城に達し城東朝陽門を入る門
外既に一市街を成せり道路敗壞泥濘凹凸惡臭を衝く吉林は滿洲黒吉二省中の
第一繁華の地なれば亦第一不潔の地なり三四の旅店を訪ふ皆外人の投宿を喜ば
す室なしとて拒絶しけり午後五時やうく一旅店を得主人は回教を信せる者さ
して食らんとせしめて二室を與へけり店は直に松花江に望み江を隔て、遙に
長白山の雲間に髣髴たるを臨み風光愛すべし直に驛夫を將軍衙門に遣はし名刺
と町嗎人シニルン氏の添書とを吉林將軍に致して曰く請ふ明日正午將軍を衙門
に訪はんとシニルン氏吉林に在る者此に六年尤將軍と交り善し將軍五品官一人

を遣はして、名刺を中佐に致して曰く未だ公報に接せず知らず貴官は何地より程を起して何の地に赴くやと中佐乃ち在外六年二十一國を歴遊し歸途單騎跋涉既に四百五十五日三萬有餘里なるを以て答ふ此の夜將軍又人を遣はして懇に旅情を慰め明日正午を以て相見えんことを約し復た護照の有無を問はず

吉林城中

吉林城は松花江の左岸高阜に在り齊々哈爾を去る一千五十五里實に我百十六里なり三面城壁を以て之を繞らし群山其外を圍み東方一面直に江上に枕す江上高阜凡そ三十尺江の右は地形平坦遠く長白山の遙翠を望む實に滿州北門の鎖鑰にして四通八達の要地なり吉林將軍此に治し一省の政令を司る人口大約十萬商業繁盛なり東萊門外江に臨みて機器局あり彈藥製造の處と爲す江右又一製造所あり機器局に屬す技師工手一西洋人を用ひず皆支那人を以て製造に従事す江上小汽船六艘あり其内二三艘は機器局の製造する所に係る是皆製造所の機械工夫等を運搬する者なり近日吉林將軍將に齊々哈爾に歸省せんとす陸路を取りて沿道人民を煩はさんことを恐れ此の汽船に依りて水路直に齊々哈爾に至らんとすと云ふ朝陽門外大約五六里の地に兵營あり吉林駐防八旗の練軍を屯す吉林の名産

滿洲北門之鎖鑰

は柳枝細工なり中佐馬を駐めて光を観る者三日後一日故ありて淹留しけり

吉林將軍

習日正午馬に跨りて將軍衙門に至る衙門は松花江に臨みて城中最好の地を占む轅門内馬を下りて正門に入り秘書官を訪うて名刺を通ず既にして導かれて内門に入り又左の一門を過ぎて將軍の府内に入る將軍中佐を待つ者久し自ら迎へて握手の禮を施し之を客堂に延き茶を供し巻煙草を進む將軍姓名は長順年既に六十餘其容嚴然其言溫然黑龍江省駐防八旗出身にして回教叛亂の際伊犁喀什噶爾科布多烏里雅蘇台各地に至り屢軍功あり歴進して將軍の地に至れる者なり談笑少時語滿洲盜賊出沒の事に及ぶ將軍曰く此の地誠よ盜賊多し隨て獲れば隨て斬る今月も二日間に五十人を斬れり人を殺し物を奪ふ者死に至るも悛めず只斬わるのみと既にして中佐將軍に謂て曰く此より以東人烟稀疎宿泊草糧の得難からんことを恐る若し一卒を出して其便利を謀らしめば幸甚しと將軍曰く此の事既に定まれば盜賊出沒の地一二兵卒何の用をか爲さん當に士官及び數兵をして護送せしむべしと因て辭し去りけり翌十一日將軍使を遣はして珍膳を致す小碗十二中碗四大碗四及び饍々菓子二皿なり曰く僕將に齊々哈爾に歸省せんとす公務

訪吉林將軍

將軍贈膳